

# まんまるピンクとウニ 頭

鳩胸な鴨

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

新世界での騒動を解決して、早一ヶ月。

カービィが、ワドルデイの町にある自宅でのお昼寝から目を覚ますと、そこは見覚えのないビル群だった。

「カービィ世界って科学も魔術も《もーれつ！》に発展してるくね？」と思って書いた。

# 目次

LEVEL:0	ドリーミー・エンカウ ント	1
LEVEL:1	アイディアリズム・ネセ サリ	11
STAGE:1	来訪者	11
STAGE:2	無限のチカラ	21
STAGE:3	魔女狩りの王	35
STAGE:4	くちうつし	49
BOSS	書庫にとりつく闇 前編	
LEVEL:2	アブノーマル・セレモ ニー	77
STAGE:1	道化師	90
STAGE:2	雷牙	98
STAGE:3	妹達	110
STAGE:4	マルク	122
STAGE:5	悪党	133
BOSS	審判を下す極蝶 前編	
BOSS	審判を下す極蝶 後編	145
BOSS	審判を下す極蝶 後編	

B O S S 2	258	V S	スタードリームリ
B O S S 1		ドラゴン	ストライク
S T A G E : 8	248	真相	
S T A G E : 7	235	闘争	
S T A G E : 6	222	ヒーローズ	
S T A G E : 5	213	逆襲	
S T A G E : 4	202	星の夢	
S T A G E : 3	190	無力	
S T A G E : 2	180	襲撃	
S T A G E : 1	170	追放	
L E V E L : 3	156	バグズ・レムナント	

## LEVEL : 0 ドリーミー・エンカウント

草木が生い茂るビル群が周囲を包み込み、生態系がその神秘を循環させる、忘れ去られた大地。本来であれば存在することもなかったであろう、先の一件で繁栄した『ワドルデイの町』に立てられた一軒家にて。

窓から差し込む太陽の光を浴びながら、すう、すう、と寝息を立てるのは、まんまるピンクのヒーロー…その名も『カービィ』。

彼は特に正義感に満ち満ちているわけでも無ければ、日夜悪と戦っているわけでもない。

ヒーローとしての葛藤どころか、些細な悩みに至るまで、頭を悩ませることなどこれっぽっちもなく、あるのは果てしない食欲と、宇宙一能天気且つ樂觀的な思考だけ。

悩むことと言えば、せいぜい明日のゴハンくらいなものだ。

しかし、彼には、ある力が宿っている。

例え相対するのが、悪夢という概念そのものであろうが、星二つをぶつけて消滅を図ることができる究極の生命体だろうが、『無限に等しい力』を外付けの道具によって手に入れた魔術師だろうが、『破壊』として顕現したカミサマだろうが、誰にも負けることの

ない『無限のチカラ』が備わっている。

いや、備わっているわけではない。彼こそが『無限のチカラ』そのものなのだ。

まさに歩く理不尽。『究極の主人公補正』と置き換えても過言ではない。

無論、そんな彼に「関わった悪事全てが例外なく彼によって木っ端微塵に粉碎される」というジंकクスが付き纏うのは当然のことで。

「ちよつと利用しよう」なんて考えて悪事の片棒を担がせようと引き込むか、はたまた彼の存在を知らず、彼を悪事に巻き込むか。

経路はとにかく、彼が少しでも悪事に関われば、それは一切の例外なく、至極あつさり水泡へ消える。

現に、故郷である惑星：ポップスターから遙か遠くに離れた「新世界」を訪れるキツカケとなった元凶も、カービイが打ち倒してしまった。

その存在によって都合のいい傀儡にされていたアニマルたち：ビースト軍団らと和解を果たし、異文化交流を続ける日常が始まって早一ヶ月。

お昼寝から起きたカービイは、陽の光を一身に受けながら、「んいー！」と伸びをする。今日はどうしようか。どんなゴハンを食べようか。どんな場所でお昼寝しようか。誰と遊ぼうか。

そんな子供らしい思考回路で、今日の予定を組み立てていく。

「あしたはあしたのかげがふく」。そんな彼の座右の銘に違わぬ生き様である。

「ぼよっ」

が。組み立てた予定が吹き飛んでしまうほどに衝撃的な光景が、そこにはあった。

カービイが伸びをして、目を開けた先。

窓に映ったのは、全く見覚えのない、生活感のあるビル群の一つだったのだ。

カービイは慌てて家の扉を開け、外へと飛び出す。

…否。「外」という表現は似つかわしくない。彼が飛び出した先は、普通のポロアパー

トの一角。

無論、アパートなどという概念などこれっぽっちも知らないカービイは、「なんだかき

たないおうち」程度にしか思っていない。

カービイがあたりを見渡すと、ゴルドーという彼にとっては馴染み深い、トゲトゲ且

つ金属質のともだちによく似た影を見つける。

カービイがたたたと、とそれに駆け寄ると、アドレーヌという友人に似た体の少年が、特

大のたんこぶを作りながら目を回していた。

「ぼよっ…うっ…ぼよ、ぼよっ…」

「つでえええ…、なんだ、いった…」

少年が痛みに悶絶しながら、薄らと目を開けて、カービイを見やる。

そして、石になった。

完全に動きを止め、笑顔で「はあい！」と挨拶をするカービィを凝視する少年。

一度、二度、と数回にわたって目を擦るも、目の前にいる存在は消えない。

ためしに、右手の人差し指でその肌を撫でると、ぷにつ、と柔らかい感触が伝う。

ある程度冷静になってきたのか、はたまた未知との遭遇に慣れているのか。少しばかり広がった視野で、自らの暮らす部屋がとんでもないことになっていることに気づくと、こぼれ落ちんばかりに目をひん剥き、叫んだ。

「ふ、不幸だあああああつ!!」

「ぼよ?」

ここは新世界からも、はたまたポップスターからも遠く離れた惑星：「地球」に在る『学園都市』。超能力者たる少年少女らがひしめき合い、倫理が完全に破綻した魔窟。

そんな中、学園都市の底辺を這いずる苦学生：『上条当麻』と、『星のカービィ』が出会う。

そのファーストコンタクトは、上条当麻にとっては最悪だったとだけ語っておこう。

◆?◆?◆?◆?

その日、学園都市は大混乱に陥った。

とても人間向けとは思えない、一畳ほどの大きさがあればいいところの家屋、更には



植物や、コンクリートが無理矢理凝縮されたようなデブリ、動物によく似た生物らが空から降り注ぎ、あちこちに墜落。

開発を勧めている能力者らによる犯行か、と踏んだ治安維持組織は、即座に同じく混乱に陥る彼らとの接触を図った。

が。彼らは「ニヤウ〜」だの、「ウホウホ」だの、「ガウガウ」だの、「わにやわにや」だの、確立した言語能力を持たず、ただただ慌てふためいており、話にならなかった。

研究しようにも、彼ら生物の周りには謎の磁場が発生しており、機材が軒並みエラーを吐き、時には大爆発を引き起こす始末。

なんとか不幸から免れたテレビ：ただし液晶部分には亀裂が走り、音声すらもノイズがかかっている：で、そんなニュースを聞きながら、上条当麻は目の前のずんぐりピンクを訝しげに見つめていた。

「…俺の右手でおかしくならないってことは…、こういう生き物なのか？」

なあ、お前：…んーっと、名前は：…なーんて聞いてもわかんない：」

「カービィ！カービィ！！」

「……カービィね、うん。素直な子は上条さん好きですよ」

ぽよん、ぽよん、と弾力をアピールするように跳ね回るカービィを、思わず微笑ましく見る当麻。

しかし、そんな場合ではないと首を横に振り、跳ね回るカービィの両頬を挟んだ。

「カービィ、お前はどこから来たんだ？」

「ふい？……ぼよ、ぼよっ！」

「……うん。アレがお前の家なのは分かるから。元はどこにあつただって聞いてるんだぞー……って、あれ？言葉通じてんの？」

「ぼよっ！」

どこから来た、という問いに、背後にあるドーム状の家を指す程度には、ユーモアに溢れた性格のようだ。

このやりとりからして、意思疎通は出来ているらしい。赤点常習犯たる彼に、その理屈が理解できるだけの頭はないのだが。

しかし、YESか NOで答えられるような質問しか出来ない、という条件があるとはいえ、こちらの話が通じているというのはいがたい。

まずは友好の印に、なけなしの食料を与えようと、台所の方を見やる。

そこには、ものの見事にカービィの自宅に潰された、無残な台所の姿があつた。

「ふ、不幸だ……」

「ぼよっ……おぼよっ……」

生活費である奨学金が支給されるまで、かなり日にちがある今日この頃。

しかしながら、彼が買い溜めていた食料は、一つ残らずカービイの自宅によって使物にならなくなってしまうた。

腐った野菜の残骸に、割れに割れた袋麺。叫ぶ気力もなくした当麻に、カービイは申し訳なさげに頭を下げる。

「もしかして、謝ってるのか？…お前もわけわからんことに巻き込まれてるみたいだし、気にしなくてもいいぜ。

それに、不幸はいつものことだしな」

「……………ぼよっ！」

当麻が自傷気味に笑ったその時。カービイはたたた、と使い道を無くしたフライパンへと駆け寄る。

自身の背丈ほどもあるそれを、カービイは大口を開けて飲み込んだ。

「はあああああっ!!?そ、それは上条さんのなけなしの財産で買ったフライパンなんですがちよっとおおっ!?!」

当麻が素つ頓狂な声で抗議した、まさにその時。カービイの姿が眩く光り、そのシルエツトが変貌した。

先ほどまではなかったシエフハットを被り、当麻がなるべく大事に使ってきたフライパンを背負っている。

当麻は知らぬことだが、カービイには、とある能力が備わっている。

その名も、「コピー能力」。宇宙最強の能力とも謳われ、数々の悪事を打ち砕いてきた、カービイの代名詞。

カービイは今、料理人としての能力をコピーした「コック」となっていた。

「ぼよっ！」

カービイは何処からか大鍋を顕現させると、カンカン、とフライパンとおたまを打ち付けながら、瓦礫を鍋の中へと引き寄せていく。

ぼちやぼちや、と大量の瓦礫が入ったのを確認すると共に、カービイはそれらを煮込み、調味料をぽっ、ぽっ、とふりかける。

聴て煮込み終わったのか、カービイが鍋の前でポーズを決めるとともに、その中から、ぼん、ぼん、と、オムライスやら、カレーやら、満漢全席もびつくりな量の料理が、当麻の眼前を埋め尽くした。

「……………はっ！」

ぱちくりと目を丸くして、恐る恐る右手で料理の皿に触れてみる。

消えない。明らかに超常から生まれたはずなのに、『幻想を殺す』と謳われた、自らの右手が仕事をしない。

当麻が愕然とする傍ら、シエフハットの消えたカービイが、「めしあがれ！」と言わん

ばかりに、彼にカレーライスを差し出す。

何はともあれ、腹ごしらえはできるのだ。ありがたくいただいておこう。

「……なんで瓦礫から生まれたカレーライスが美味いんだよ……」

「ぼよよお〜い!」

「掃除機かお前は」

当麻は軽くぼやきながら、凄まじい勢いで料理をかきこむ。否、皿ごと吸い込むカービイを見て戦慄していた。

彼らは知らない。この数日後に、魔術と科学が交錯することを。

彼らは知らない。そこに入ってしまった「夢」たちが、どうしようもなく事態を混乱へと導き、果てはより盛大に宇宙を巻き込む戦いへと身を投じることになることを。

「無限のチカラ」と「幻想殺し」。

彼らはおいしいゴハンを守るため、ついでに世界を救うため、幻想が彩る世界を駆け回る。

「ん? あれ? …おつかしーなあ、さつきまであそこにあつた貯き……いやいやいやちよつと待てちよつと待てちよつと待て!？」

カービイさん、アンタもしかしくても上条さんが珍しくコツコツ溜め込めてたブタちゃん貯金箱まで料理しました!？」

「ぼよ?」

「ああそうかそうだよな小銭なんて知るわけないよなチクシヨウやつぱり不幸だあああああっ!!!」

：しかし、予知能力など持ち合わせていない彼らは、その出会いに神秘を感じる様子などカケラもなく。

貯金箱が消し飛んだ当麻の叫び声に、カービイはこてん、と首を傾げていた。

## LEVEL : 1 アイデアリズム・ネセサリー

## STAGE : 1 来訪者

カービィと当麻が出会って、早一週間。

終業式を先日に終え、補習漬けが確定した夏休み初日。当麻は目の前の問題に、悶々と頭を悩ませていた。

「わにゃ?」

「……わにゃ、じゃないんだよなあ……」

目の前にいるのは、カービィによく似たフォルムの、なんとも悩みがなさそうな顔をした謎の生命体。

頭のゆるいカービィに必死になってひらがなを教え、目の前の生命体の名称を問うたところ、「わどるでい」という、子供が描いたサナダムシみたいな文字列が返ってきた。

この謎の生命体……ワドルデイとの出会いは、2日前に起きた事件に起因する。

事件と言っても、大したものじゃない。研究員らに攫われそうになっていたワドルデイを、カービィが助け出しただけのことである。

生活費を賄うために、自販機の下にある小銭を拾い集めるといふプライドを捨てた苦

肉の策を、その行為のみつともなさを全く知らないカービーという無垢な協力者と共に実行していた時のこと。

研究員に捕獲され、トレーラーに積み込まれたワドルデイを偶然にも目撃。

「わにゃわにゃ」と騒ぎ立て、カービーに助けを求めたワドルデイ。いくら能天気とはいえ、状況の判断は的確に出来るらしく、カービーは即座に車を追いかけ始めた。

しかし、カービーのような小さな歩幅で走って車に追いつけるわけもなく。当麻がなんとか車を止めようとなない知恵を振り絞り始めた、その時だった。

カービーが自販機をほおびたのだ。

自販機を吸い込み、四角いシルエットへと変化したカービーは、凄まじい勢いで缶ジュースをマシンガンのように放出。

それによって車はベッコベコに破壊され、囚われたワドルデイは見事に救出された。

ただの缶ジュースでさえも、銃弾もびっくりな威力に変える『無限のチカラ』がどれだけ凄まじいかはわかったことだろう。

助けたワドルデイは、全部で六人。その全てが例外なく当麻の自宅に押しかけ、カービーの自宅の墜落による後始末を手伝ってくれている。

それはいいのだ。家事手伝いをしてくれるのなら、別に問題はない。

しかし、問題は別のところにある。



食費だ。

明日の食事すらままならない当麻の家に八人である。さらには、常軌を逸した悪食且つ大飯食らいのカービーがいる。

教育機関として機能する街たる学園都市に、バイトなどという文化があるわけもなく。あつたとしても、大抵違法性が付き纏うという始末。

学園都市の主な収入源である実験協力や奨学金など、無能力者という最底辺にカテゴリーされる当麻に受けられるはずもなく。

結果、全てのプライドを全力投球でドブに捨て、コックをコピーしたカービーに、かき集めたゴミ類を料理へと変換してもらつて、なんとか飢えを凌いでいた。

「これじゃ、誰が家主かわかんねえな」

「ぼよっ…」

「わにゃ?」

「…悩みがなさそうで、羨ましい限りですよホント」

今日も今日とて、ゴミから精製された冷麺を啜りながら、当麻はため息を吐く。

全財産は600円少し。溜め込んでいた袋麺は残らず消し飛び、なんなら台所も未だ復旧の目処が立たない始末。

家のことも、何かを思い立てば必ず不幸が襲いかかる。というより、何もしなくても

不幸が襲いかかる。

結果、当麻はほとんどお飾りだけの家主と化していた。

しかしながら、押しかけながらも住まわせてくれる当麻にカービイたちは大きな恩を感じているらしく、何かあれば当麻のために右往左往してくれる。

その善意により、罪悪感がさらに湧き上がってくるのだが、彼らの奉仕に、住居を与える以外の何かを返す手立てがないのも事実。

そんな奇妙な同居人への申し訳なさを胸に秘め、食い終わった皿の処理をどうしようか、と迷っていると。

突如、カービイの自宅の扉から、凄まじい勢いで青緑の小さな物体が飛び出した。

「カービイ！大丈夫だった!」

「ぶへえっ!」

「ぼよおっ!」

その物体は、中間点に位置していた当麻に、大きさに見合わぬ猛烈なタツクルをかまし、その先にいるカービイへと駆け寄る。

当麻は「不幸だ…」と嘆きつつ、カービイと共に再会を喜び合う、妖精のような出生の生命体へと目を向けた。

「あ、さっきぶつかっちゃった子かな？」

ごめんね。カービイを見つけてうれしくなっちゃって」

「いやいや、上条さんはこの程度じゃ全然音上げませんよ……って、ん？」

「……う？どうかした？」

こてん、と首を傾げる生命体をまじまじと見る。妖精と動物を掛け合わせたような神秘さを感じさせる風貌。

まるで羽のように広げた耳は、片方だけ欠けている。

当麻の顔ほどの大きさもないような小さな存在だが、人間と同程度の知性を感じられた。

「……話せるの、お前？」

「元いた場所の言語と似てたから、こっそり辞書とか読んで……なんとか？」

当麻の問いに、なんとも曖昧な返事を返す彼。

カービイはその周りで「エフィリン！エフィリン！」と全身で再会の喜びを表現するように、ぽんぽんと跳ね回っていた。

「エフィリン……っていうのか？」

「うん。ボクの名前はエフィリン！カービイのともだちだよ！

キミは……えつと、なんていうのかな？」

「上条当麻。上条でも、当麻でもいいぜ。よろしく、エフィリン」

「トーマー・トーマー！」

「うん、じゃあ、トーマって呼ばせてもらうね。よろしく！」

当麻は右手を差し出し、エフィリンに握手を促す。

エフィリンがその手に触れた瞬間、何か壊れるような音と共に、びたん、とエフィリンが顔面から落下した。

「ふぎっ!？」

「あつ、すまん!？」

どうやら、エフィリンの浮遊能力は幻想殺しで打ち消せるらしい。

そんなことを思いつつ、落下したエフィリンを左手で起こすと、彼は鼻っぽしらをさすりながら、首を傾げた。

「今の、なんだったの?」

「あー…。カービィとワドルディには効かなかったんだけどな…」

言って、当麻は自身の右腕に宿る「幻想殺し」についての説明を始める。

とは言っても、超常を無効化するという、あまりにもシンプルな能力なので、そこまです時間はかからなかったのだが。

それを聞いたエフィリンは、「ボクが落ちちゃうくらいだから、すごい能力だね!」と興奮気味に、当麻の能力を褒め称えた。

能力を褒められた試しのなかった当麻は少しばかり面食らった後、照れくさそうに話題を逸らした。

「…と、ところでき。エフィリンはなんでウチに来たんだ？カービイを探してたのか？」  
当麻が問うと、エフィリンは少しばかり難しい表情を浮かべ、口を開いた。

「それもあるんだけど…」

その時だった。カービイの自宅周りの瓦礫を片付けていたワドルデイ二人が、「わにやわにや」と騒ぎ始めたのは。

「わにや、わにやわにや！」

「わにや！」

「どうしたお前ら？今、エフィリンの話聞いてるから静か…に…」

当麻が騒ぎ立てるワドルデイらを落ち着かせようとすると。

ヤケに煤けた布団みたいな物体が、彼らの上に乗っかっていることに気づいた。

「……おなかへった」

「はっ。」

よくよく見ると、その煤けた布団は、ヤケにゆったりとした修道服であり、それを纏うのは、まだ十代前半のあどけなさがある少女。

ワドルデイに担ぎ上げられた彼女は、なんとも澄んだ目で、当麻に飯を乞うていた。

魔術と科学が交錯する運命の出会いは、なんとも微妙なファーストコンタクトであった。

◆◆◆◆◆

「はぐはぐつ……は……むつ、ん、んぐつ、んぐつ……ふはあつ！」

まんまるピンクさん、ありがとう！

すつごく美味しいんだよ!!」

「ほよ、ほよおっ！」

大食漢が二人に増えた。

コックの能力が今日も今日とてフル稼働しているな、と思いつつ、凄まじい勢いで食事にありつく少女と、先程朝食を終えた筈のカービーが、夢中になって自分の作り出した料理をかきこんでいる姿を、なんとも言えない表情で見つめる。

当麻は視認するだけで胃もたれしそうなその光景に呆れながら、口を開いた。

「……腐った焼きそばパンとか野菜のカケラから精製されたつてのに、よく食うよな、お前ら」

「カービーのコピー能力は『そういうもの』って思ってた考えるのをやめた方が楽だよ」

「うん、思い知ってる」

どうやら、カービーのデタラメさは仲間内でも共通の認識らしい。

馳て料理を食べ終えた少女は、満たされた腹をさすりながら、「ごちそうさま」と吐息混じりに吐き出した。

「満腹だから胸がちよつとくるしいんだよ…」

「ジュース飲むか？ さっきのに比べたら、あんまり美味かねーと思うが」

「ただきまーす」

当麻は先日、最低限の食事程度はなんとかしようと思いをかけずり回って偶然にも拾った、謎のドリンクを手渡す。

少女は笑顔でそれを受け取り、ものの数秒で飲み干した。

瞬間。彼女は目をかつ開き、勢いよく立ち上がった。

「すごいすごい！ なんか、すつごく元気があふれてくるんだよ!?!」

「……大丈夫か、これ？ 劇薬だったりしないよな…?」

「ええ…? トーマってば、そんなものを見ず知らずの女の子に飲ませたの…?」

当麻が困惑を口に出すと、それに呆れたエフィリンが、少女の持つドリンクのラベルを見やる。

それに見覚えがあることに気づくと、エフィリンは「ああ」と声を上げた。

「なあんだ、ただの元気ドリンクか」

「ういっ！ ぽよぽよ…、ぽーよっ!」

「…うん。とにかく、元気になるドリンクなのはわかった」

「飲むと元気になる」という、名前そのまんますぎる元気ドリンクの効能を、全身で表すカービィ。

武装無能力集団：…いわゆる、劣等生たちによる不良グループ：に殺されかけながらも手に入れた甲斐はあつたらしい。

食事に加え、元気ドリンクを摂取した彼女は、すっかり元気を取り戻した。

「ありがとうなんだよ！

えーつと…んーつと、妖精さんに、ウニ頭さんに、まんまるオレンジさんたちに、まんまるピンクさん！」

「う、ウニ頭……」

「…取り敢えず、自己紹介でもする？」

何度整髪料を使っても、このツンツンの髪型しか似合わない彼を的確に表現する言葉に、軽くシヨックを受ける当麻。

その傍で放たれたエフィリンの一言で、総勢10名の自己紹介が始まった。

…約6名、「わにゃ」としか言えないことには目を瞑りながら。



## STAGE : 2 無限のチカラ

簡単な自己紹介を終え、まずは煤だらけだった少女：インデックスの事情を聞くことにした当麻たち。

というのも、「ボクたちの事情は、ゼツタイにインデックスよりフクザツだと思うよ？」というエフィリンの一言により、カービイたちの事情聴取は後回しになったのだ。

インデックスも薄々そのことを察していたのか、当麻らに最低限、自分の立場を伝えた。

曰く、インデックスは10万3000冊の魔導書を持っているという。それを狙っている「魔術結社」から逃げていたところ、隣のビルから足を踏み外し、ものの見事にカービイの自宅にある煙突にホールイン。

結果。煤だらけになって気を失っていたところを、掃除に来たワドルデイに発見されたのだ。

当麻が「魔術などというものがあるのか」と半信半疑で問うたところ、インデックスは胸を張って「あるもん！」と反論。

科学で目覚めるような超能力は、自分の右手に宿ったソレで存分に思い知っている

が、魔術に関しては信じようとしないう当麻。

腹に据えかねたインデックスが、当麻に宿る異能を小馬鹿にしたことを皮切りに、そこで口論に発展した。

無論、喧嘩に慣れていないワドルデイは大混乱。「わにやわにや」と盛大に慌てふためきながら、カービィに仲裁するように懇願する彼ら。

カービィが仲裁しようとした時には既に遅く。当麻の右腕は、『歩く教会』と呼ばれる魔道具たる修道服を、バラバラに引き裂いていた。

結果、羞恥と共に怒り狂ったインデックスが、激しく当麻の頭に噛み付き、今に至る。その後も、「幻想殺し」によって、神の加護やら諸々を打ち消しているから、どう足掻いても不幸だと言う事実を突きつけられはしたものの、当麻はいつものように「不幸だ」と軽く嘆くだけで済ませた。

「で、カービィはどんなひ……、…カービィって人なのかな…？」

…と、とにかく！どんな存在なんだよ？」

「ぷいっ……ぼよっ……ぼよおっ」

インデックスの問いに、カービィは意図がわからないのか、はたまたどう答えればわからないのか、無い首を傾げるばかり。

エフィリンはカービィの言いたいことが何となくわかったのか、その旨をインデック

スたちに伝える。

「よくわかんないみたい」

「とにかく食いしん坊でのんびり屋で、そのくせ幻想殺しが効かないデタラメ摩訶不思議能力がある謎生物ってことくらいしかわかってないんだよなあ」

「ボクもそんな感じかなあ」

エフィリンが当麻に同調すると、当麻はパチクリと目を丸くした。

「付き合い長そうなのにな？」

「ボクたち、出会って…ひい、ふう…、うん。この星で言うと、まだ二ヶ月も経ってないよ？」

1番長いデデデ大王で…んーっと、ごめん。ちよつと数えるね。

……うん。たぶん、30年近い、のかな？そのくらいの付き合いらしいけど「意外と歳食ってんのなコイツ!？」

この幼稚な精神で、とつくに三十路は超えているらしい。

当麻らがその事実には慄くも、エフィリンはさらに爆弾を投下する。

「宇宙だと年齢を気にするような種族の方が珍しいよ？」

マホロアに聞いた話だけど、『夢のチカラ』が充満する空間に暮らしていると、まず死ぬとかって概念が曖昧になるから、誰も気にしなくなるみたい」

「……言いたいことはいろいろあるけど、一言だけ言わせてくれ。」

お前ら、宇宙人なのな」

当麻らは知らぬことだが。カービィの今の故郷であるポップスター周辺の星々には、『夢の泉』という、温かな夢を循環させ、安らぎを与える泉が存在する。

その泉は『夢のチカラ』と呼ばれる力を周囲に広げ、恩恵を受けた命を循環させる。極端な例だが、宇宙でも類を見ないほどに泉がフル稼働するポップスターでは、そこに生える雑草のように、ポンポンと命が復活を遂げるのだ。

そもそもが温かな夢と徹底的に相入れない存在だったり、花と同化したり、完全に記憶とココロを破壊されたりなど、余程の特殊ケースでなければ、それに例外はない。

そのため、宇宙では年齢を気にする種族の方が圧倒的に少ないのである。

あまりに違い過ぎる常識に、当麻は月並み以下の感想しか捻り出せず、インデックスはこれでもかと目をひん剥いていた。

「まあ、その中でもカービィは規格外なんじゃないかな？」

なにせ、何度も宇宙を救った最強のヒーローだからね」

「ほよぶ。」

「……うん。見えねーなあ」

「なんとなくはわかるけど、そこまで壮大なスケールの強さなのかは、人間の枠組みにい

る私じゃちよつとわかんないんだよ」

「本当のことなんだけどなあ」

インデックスはカービィを膝に抱えながら、抱き枕のように強く抱きしめる。

少し苦しそうに見えるが、存外居心地がいらしく、カービィはリラックスしていた。

「で、なんでカービィたちは地球に来たんだ？ないとは思いますが、この惨状を見て『観光』

とか『イタズラ』とかだつたら怒るぞ」

当麻が部屋に突き刺さったカービィの自宅を指差し、エフィリンに問うと。

エフィリンは、小さなその首を横に振った。

「まさかあ。ボクたちは『新世界』…ボクの故郷…でいいのかな？…えつと、もといた星

の名前ね。

とにかく、そこにある『ワドルデイの町』を拠点にして、カービィの故郷の星、『ポツ

プスター』と新世界のみんなでバカンスしてたんだから」

「トモダチん家みたいに惑星間を行き来してんのな…」

「宇宙すげえな」と文明の違いに驚きつかれたのか、吐くような感想をこぼす。

どうやら、傍迷惑な観光ではないらしい。

では一体何だ、と思っていると、エフィリンは難しい表情を浮かべた。

「一言で言えば、誰かがボクたちをここへ呼んだんだ。」

それが距離の関係か、それとも犯人がボクの空間転移能力を警戒したせいなのか…。  
テキトリーな転移しかできないから、こんな大規模なことになったんだと思う。

ボクが帰ろうと思つて異空間を広げようとしても、宇宙には繋がらなくて…。ボクたちをこの星に呼びたかつた誰かのせいなのは間違いないよ」

あまりにスケールが違う話に、二人は半ば放心したように、「はー」と息を吐く。  
わかつたことといえば、「空間転移能力を持つ誰かによって、地球に来てしまった。帰ろうにも妨害されていて帰れない」くらいだ。

「つまるところ、お前らも被害者つてわけか。…そりゃそつか。カービイなんて、俺の家に自分の家が突き刺さつてんだもんな」

「ぼよお…」

当麻の言葉に、カービイは未だ突き刺さっている自宅を見遣り、申し訳なさそうに目を伏せる。

ワドルディたちと協力して、なんとか撤去しようとは思っているのだが、思うように進んでいないのが現状である。

当麻が同じように、カービイの自宅を見ようとして、ふと視界に入ったカレンダーに目を向ける。

瞬間、当麻は硬直し、ダラダラと冷や汗を流し始めた。

「…やっぱい補習忘れてたああああっ!？」

そう。彼には補習という地獄が待ち受けていたのである。

壊滅的な成績を叩き出した当麻に、夏休みなどという一ヶ月近い長期休暇がタダで与えられるわけがない。

補習漬けの決まっていた夏休み初日。その憂鬱なスタートを飾る補習が、あと数分もしないうちに第一回目を迎えるのだ。

当麻は大慌てで準備すると、玄関の鍵をカービイたちに放り投げた。

「エフィリン！鍵渡しとくから、カービイたちと留守番頼む！」

ワドルデイを狙う怪しい奴が来たら遠慮なくぶっ飛ばしていいからな！」

「ぼよっ？」

「わわっ。急に慌ててどうしたの？」

「お前らのインパクトが強すぎてすっかり忘れてたけど、俺、今日学校行かなきゃいけなかったんだ！」

「がっごう？」

「わにゃ？」

学校という概念自体が存在しない文明に暮らすワドルデイたちは、揃って首を傾げる。

カービィは何度か当麻のリュックに詰め込まれてぬいぐるみのフリをしていたので、「なんだかたのしくない。トーマもいそがしそうで、かまってくれなくなるいやなところ」くらいの認識しかない。

当麻が懇切丁寧に、少ない語彙を全力で搾り出して説明したものの、そもそも勉強という概念すら知らない宇宙人には、その認識を変えることはできなかった。

「インデックスもアテがないんなら、しばらくここに居ていいからなー！」  
「別にいいよ。私も出てく」

当麻が靴のズレを直すべく、踵に指を突っ込んで横を通り抜けようと、インデックスが早足で駆ける。

が。そこで彼女の肩が、当麻の地面についていた方の足にぶつかり、大きな音を立ててすっ転んだ。

「いったああつ?!」  
「わわつ…、おうおううつ?!」

更には履きかけだった靴が脱げ、そのつま先が急所へと直撃。

そこに追い討ちをかけるように、インデックスの肘が落下した。

「ふーつ、ふーつ…、ふつ…、ち、ちよつと、待ってくれ…。結構、勢いよく入ったから…、めつちや、痛いんだけど…」



「……むがあああああつ!!」

「ふ、不幸だあああああつ!!」

悶絶する当麻に、変な感触に顔を真っ赤にして怒り狂うインデックス。

その光景に、ワドルデイたちは再び「わにやわにや」と騒ぎ立て、カービイとエフィリンは当麻の頭に齧り付くインデックスを引き剥がそうと駆け寄った。

◆?◆?◆?◆?

結果から言おう。カービイと当麻は、インデックスを引き留めることが叶わなかった。

——じゃあ、私と一緒に地獄の底までついてきてくれる?

自分が置かれている状況を「地獄」と称し、これ以上を干渉を遠ざけるように、急いで出て行ってしまった。

カービイたちが追いかけようとすると、やはりというかなんというか、待ち伏せしていた研究員が襲撃。

撃退には成功したものの、肝心のインデックスを見失ってしまった。

留守番をしているカービイは、心ここに在らずと言った様子で、今もインデックスが去っていった方向を見つめている。

「カービイ。そろそろタゴハンだよ?」

「……ぼよ」

「イヤなヨカンがする」。

カービイが日が落ちかけた今も、インデックスの去った方向を見つめている理由。

それはひとえに、何度も自分を助けてきた、戦士の勘であった。

エフィリンはその言葉に何を思ったのか、「そっか」とだけ告げ、隣に座る。

「……ぼよっ！」

と。カービイが何かを感じ取ったのか、すくつ、と立ち上がり、渡り廊下を飛び降りる。

エフィリンはそれに面食らいながらも、「ちょっと待ってよー！」と、カービイを追いかけた。

ドアのそばで様子を伺っていたワドルディたちも、只事ではないと察したのか、それぞれが顔を見合わせ、「わにゃー！」と一致団結を示す。預けられた鍵を使ってきたちりと扉を閉め、彼らもまた、渡り廊下を飛び降りた。

「……アレ、マジでなんなのかにゃー？」

正直、あり得ないほど意味不明すぎて怖いんだけど」

その様子を、なんとも愉快な格好の少年が見下ろすのに気付かず。

◆? ◆? ◆? ◆?

カービィが襲ってくる研究員やら能力者やらを軒並みぶっ飛ばし、直感の赴くままに駆けていくと。

目的である少女が、路地裏を逃げ惑っている姿に直面した。

「ぼよおっ！」

「わにやわにや！」

「か、カービィに、ワドルデイ!?今は来ちゃダメなんだよ!!」

インデックスの無事を喜ぶために駆け寄ろうとするも、彼女がそれを止める。

瞬間。インデックスに向けて、一閃の斬撃が襲い掛かった。

「カービィ!これをー!」

それをいち早く察知したエフィリンが、剣の描かれた星型の物体を取り出し、カービィへと投げる。

カービィはそれを吸い込むと、刹那に顕現した剣でその一撃を迎え撃つ。

緑の帽子に、シンプルなデザインの剣。しかし、収める技は達人級。

これぞカービィのコピー能力が一つ、「ソード」である。

カービィと切り結んだのは、長い髪をまとめた少女。彼女は、カービィの剣に込められた力に目を剥き、冷や汗を流す。

「くっ…!?!」

カービイから言わせれば、この程度、切り結んだうちには入らない。なぜなら、彼のもとだちには、銀河最強の剣士すら下した、宇宙屈指の剣豪たる存在がいるのだから。カービイは少女の持つ刀をあつさりと言き飛ばし、臨戦体制に移る。

それを見ていたインデックスは、あまりのことに、目をパチクリと丸くしていた。

「えつ…と、カービイって、もしかしなくても、ものすごく強い?」

「あんまりにも強すぎるからって、悪者に十人に分けられたことがあつたらしいけど…、まあ、結果は見ての通りだね」

10分割でも足りないくらいには強いらしい。

弾き飛ばした刀を回収した少女は、あり得ないものを見るような目でカービイを見やっただ。

「な、なんて珍妙な…!?この都市では、このような生物も造られているのですか…?」

「普通に宇宙人なんだけど…」

「しかし、相手にとって不足なし…。邪魔立てするというのがなら…!」

エフィリンのツツコミを完全にスルーして、刀を収める彼女。

インデックスはそこはかと無く頭の中に鳴り響く警鐘に、カービイに注意するように声を出そうとする。

しかし、カービイは既に、少女と同じように、腰に当たるだろう部位に剣を収めてい

た。

一瞬でもなにかしらの合図があれば、仕掛けてしまいそうな緊張感。

胸が張り裂けてしまいそうな、静謐に包まれた空気を、ワドルデイのうち一人が小石を蹴って打ち破る。

瞬間、少女は動いた。

インデックスであれば、それを魔術による攻撃だと錯覚したことだろう。

しかし、その実は違う。凄まじい勢いで操作されたワイヤー群が、カービィへと迫っているのだ。

だが、忘れてはいけない。ここにいるのは、幾度も宇宙を救ってきたヒーローである。カービィは見事、たった一太刀でワイヤー全てを切り裂いてみせた。

まさしく、『刹那の見切り』。

そう呼ぶほかない神業に、少女は啞然と口を開けたまま固まった。

「…え…う…あ、えっ…、は…:…あ…!？」

な、そんな…、で、デタラメな…」

あまりにデタラメ極まりない光景に、ほぼ戦意を失いかけた少女。

彼女は知らない。世の中には、これを超えた速度で必殺の一太刀を放つ、孤高の剣士がいることを。

「カービィ、今だー！」

「ぼよっ！」

カービィはコピーを解き、少女に向けて大口を開けて、「すううう…」と凄まじい音を立てながら、吸い込み始める。

少女が慌てて力を込めるものの、もう遅い。まるで重力がそのまま向きを変えて働いているかのような吸引力に負け、少女の刀はあっさりとカービィの口腔に収まる。

カービィはそれをほおぼると、真上に向けて吐き出した。

「さ、逃げるよ！速く！」

「ぼよっ！」

「わにゃっ!!」

「わわっ…!?ワドルディたち、こ、これはちよつと怖いんだよ!?!」

星になった刀に目もくれず、カービィたちは大慌てで逃げ出す。

ワドルディたちが六人がかりでインデックスを担ぎ上げ、エフィリンが先導し、カービィが迎撃を担当する布陣。

あまりの光景に、取り残された少女はつぶやいた。

「なんだったのでしょうか、アレは…?」

## STAGE : 3 魔女狩りの王

「ただいまー…って、インデックス？もう戻ってきたのか？」

補習を終えた当麻が玄関の扉を開くと、これまたゴミから精製されたであろう料理の山を平らげにかかるカービイとインデックスの姿が出迎える。

リサイクルもここまで極まると、恐ろしいやら愉快なのやら。

インデックスは口いっぱい頬張ったソレを、凄まじい勢いで咀嚼して飲み込み、笑顔を見せた。

「カービイたちに助けてもらったんだよ！」

「ぼよっ！」

「わにやわにやつ！わにやつ！」

「わにやわにやつ！」

インデックスがその報告をするや否や、カービイたちが等間隔に並び、それぞれポーズを取る。

一体なんだ、とっていると、どこからともなく軽快な音楽が鳴り響く。

当麻たちがソレに目をパチクリさせて慄いているのにもかかわらず、カービイたちは

そのリズムに合わせて踊り始めた。

到底、人間には真似できそうもない挙動である。数秒ほどのソレを踊り終えると、カービイらはインデックスの周りに集まり、無事を喜ぶように跳ね回り始めた。

「……さっきのは、なんだ？」

「勝利を祝うダンスだから、気にしなくていいよ」

「……………宇宙って広いな」

科学でも魔術でも分かりそうにない光景に、思考を全力で投げ捨てた当麻。

インデックスもよくわかっていないらしく、首をかしげるばかりであった。

「……………ふい？」

「どうした、カービイ？」

ふと、先ほどまで踊っていたカービイがその動きを止め、当麻の背後…正確には、開きっぱなしの扉を見やる。

本日二度目の嫌な予感である。

カービイは険しい顔つきで当麻の股下をくぐり抜け、廊下を見渡した。

「なんだよ、怪しいやつでも…」

当麻がソレを追いかけると、渡り廊下に一つの影が佇むのが見えた。

自身の背丈よりも少し高いだろうか。修道服というよりも、絵本に出てくるような魔



法使いのような服を纏う青年が、こちらを見つめている。

カービィは敵意を感じ取っているのか、ソレを迎え撃つように、姿勢を低くして構えた。

「…成る程。神裂を撃退したまんまるピンクってのは、その謎の生命体のことか」  
青年が軽薄そうな、しかし重々しくも感じられる圧を乗せて、言葉を発する。

カービィにとつては、何のことかさっぱりわからないが、少なくとも敵意を持たれていることは理解していた。

当麻はカービィの隣に立ち、同じく姿勢を低くして、臨戦態勢に入る。

「お前、もしかしなくてもインデックスを攫いにきたヤツだろ」

「攫いに？ おいおい、何を言うんだ？」

アレは元々、僕たち『必要悪の教会』の所属なんだ。攫うものにも、こちらとしては『保護』するつもりなんだよ」

「……は？」

保護。インデックスの話とは食い違った言葉に、一瞬呆けてしまった当麻。

しかし、これまでインデックスを追いかけ回し、果ては斬ろうとした経緯を知るカービィは、変わらず青年を睨め付ける。

「気をつけて、トーマ！ その人、インデックスを斬ろうとした人の仲間だ！」

「おいおい、人聞きの悪い。斬っても死なないってわかってるから、足止めのつもりで攻撃しただけだよ。」

『歩く教会』があるんだから…なんて言っても、お前たちにはわからないだろうし、さつさと退いてくれたまえ」

エフィリンの言葉に、いけしやあしやあと答える青年。

「どうやら『歩く教会』があるという前提で、インデックスに攻撃を仕掛けていたらしい。」

当麻は今朝方の応酬で破壊してしまったことを「不幸だ」と小さく嘆いて済ませ、青年の要求を跳ね除けた。

「仲間を執拗に追いかけ回した挙句、問答無用で攻撃するようなヤツに、はいそーですかって渡すわけないだろ…!!」

「ぼよっ、ぼよっ!!」

「……仕方ない。なるべく穏便に済ませたかったんだけど…」

青年は言うど、口に唾えたタバコを指に挟み、口から離す。

先ほどまで、胡散臭さすら感じさせるほどに優しげだった瞳が、剣呑な雰囲気纏う、鋭いものへと変化していた。

「ステイルⅡマグヌス。…と、名乗りたいところだけど、ここはFortis931と

言っておこうかな。

日本語では『強者』と言ったところか。ま、語源はどうだつていい。

魔法名だよ。聞き慣れないかい？」

源氏名みたいなものだろうか。

そんなことを思いつつ、当麻たちは青年：ステイルの一举一動に警戒を引き上げる。

ステイルは「古い因習だ」と切り捨てるも、ソレを名乗ったことの重要性を説こうとして、タバコを放り投げる。

瞬間。カービィは大口を開けて、火のついたタバコを吸い込んだ。

「なっ!？」

あまりのことに、目を丸くする当麻とステイル。カービィの口にタバコが消えると、彼はソレを「ごつくん」と音を立てて飲みこんだ。

瞬間、カービィの頭部から激しく炎が舞い上がり、ソレを囲うように冠が顕現する。

メラメラ燃える火炎の力で、炎さえ焼き尽くす。その名も、コピー能力「ファイア」。

「ほよっ!!」

「カービィ!?!なんだそれ!?!」

「お、おかしい!?!神裂の話では、ヤツは剣の使い手だつたはず!?!」

言葉を紡ごうとしたステイルでさえも、あまりのことに目を白黒させ、ファイアをコ

ピーしたカービィを見つめる。

当麻もコピー能力のこと自体は把握していたが、まさか火のついたタバコをも吸い込んでコピーできるとは思っておらず、同じようになんとも言えない表情を浮かべていた。

「……いや、むしろ好都合だ。炎の扱いなら、僕に分がある！

『炎よ、巨人に苦痛の贈り物を』!!」

彼は動揺を切り捨て、詠唱を始める。

手に顕現する炎が渦巻き、薙ぐようにして放たれた一撃。それに対し、当麻は咄嗟に右手を前に突き出し、己に向かう一撃をかき消そうと博打に出る。

結果。幻想殺しに触れた魔術は、あっさりと霧散した。

「今のは……?」

「……そうだよ。何をビビってやがんだ…」

あの修道服をぶち壊したのだから、この右腕じゃねえか……!!」

流星に宇宙を救うほどのヒーローたるカービィには劣るが、自らにも抵抗する手段があることを確認し、勢いづく当麻。

その瞳は、霧散した炎の中を駆けるカービィの後ろ姿を映していた。

(そんな馬鹿な……!!?このまんまるピンク、あの少年が魔術を打ち消すことを見抜いて、

放った瞬間には動いていたのか：!?)

青年はその事実には驚愕するとともに、もう一度詠唱を始め、炎を手へと顕現する。

正確には、カービィは当麻の行動と結果を見抜いたわけではない。

「トーマならやってくれる」。究極の楽観主義であるカービィにとって、ともだちへの信頼は、並々ならぬものだったのだ。

当麻は歩幅の狭いカービィを追い越し、放たれた炎をもう一度打ち消す。

「カービィ、行け!!」

「はああああっ!!」

カービィが可愛らしい声に覇気を乗せた雄叫びとともに、炎へと包まれる。炎を纏い、敵へと突撃する技。その名も、「バーニングアタック」。

ステイルは身を翻してその技を避け、挟み撃ちの形となった現状に舌打ちした。

「チツ…、どちらも厄介極まりないな…!」

魔術を打ち消す存在に、世界に20人といない超人である「聖人」をあつさりと下す、得体の知れない謎の生物。

どちらも放っておけば、確実に脅威となる。

幸いにも、あの二人はとてつもないお人好しのようだ。多少の無茶をしても、全力でインデックスを守って死ぬことだろう。

ステイルは軽く息を吸い込み、切り札の詠唱を始める。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ…!!それは生命を育む恵の光にして邪悪を罰する裁きの光なり…!!」

何か、危ない。

そのことを察したカービィは、即座に弾丸となつて、ステイルへと突進する。

しかし、直線的な軌道しか出来ないことを察していたステイルは、軽くしゃがむことでソレを避けた。

当麻も同じく、彼の頬に拳を叩き込もうと駆け寄ろうとするも、避けられたカービィが邪魔してしまい、うまくいかなかった。

不幸はいつだって、肝心なところで襲いかかる。当麻はその事実に関心を歪めながら、鎮火して壁へと向かうカービィを右手で掴んで止め、そばに置いた。

「それは穏やかな幸福を満たすと同時に冷たき闇を滅する凍える不幸…!」

その名は炎…、その役は剣…!!

顕現せよ!我が身を喰らいて力を為せ!!」

瞬間、熱波が彼らの肌を撫で、そこらの金属を溶かしていく。

やがて、炎は人に近い骨格を形成し、相対する存在を威嚇するように吠えた。

『インゲンテイウス魔女狩りの王』…!!その意味は、『必ず殺す』だ!!』

殺意に溢れた炎の塊が、顎門を開きながら、カービイたちを焼き尽くさんと迫る。

しかし、当麻が右手で触れると、やはり霧散してしまった。

これで切り札は防いだ。二人がそう思っている、霧散した筈の火の粉が再び集い、焔の魔人を形成した。

「ぼよっ!!」

「んなっ…!?!」

ステイルが勝利を確信したように、薄く笑みを浮かべる。

当麻が再び触れて、幻想としての存在を殺そうにも、魔人は再び形成されてしまう。

カービイがファイアの能力で焼き尽くそうにも、倒すことは出来ても復活を繰り返すだけだった。

魔人は右手に炎で形成された十字架を握り、二人を焼き潰すべく、剛腕を振るう。

「クククツ…。流石の君たちも、これに打ち勝つことは出来まい!!」

ステイルがそう笑うと共に、一撃が振り下ろされる。

なんとか打ち消すことは出来たが、発生した風が二人を弾き飛ばし、距離をつくった。「じゃあ、暫く相手しておいてくれよ。

10万3000冊の魔導書を回収した後に、君たちを本格的に叩き潰すからさ」

「畜生っ、待ちやがれ!!」

当麻が忌々しげに発した、まさにその時だった。

「ヤア、カービィ。随分とマア苦戦してるミタイダネエ」

耳の生えた卵のようなシルエットが、彼らの前に現れたのは。

カービィはその姿に目を丸くし、当麻はカービィの友人にしては、やけに軽薄な言葉遣いに微妙な表情を浮かべた。

「…『魔女狩りの王』」

「オイオイオイオイ!!ケツサクもケツサク、ハラ抱えてワラつちやうヨネっ!!」

ルーンを刻んで発動するタイプのカビ臭い術なんてキリフダにしてるド田舎魔術師なんテ、ボクのアイテじゃないヨオ…!!」

復活した魔人がシルエットに迫り、咆哮しながら、十字架を叩きつける。

しかし、次の瞬間。人の背丈の数倍はある、あまりにも巨大すぎる剣が、魔人を二つに引き裂いた。

「カービィ!コイツは『ルーン』って文字で顕現してル魔術ダ!ダカラ、ルーンの近くにしか生み出すコトができないんだヨオ!

要するに、近くにあるルーンを消しちやつたら、もう二度と復活しナイヨオ!!」

「ほよっ!!」

カービィはその言葉に力強く頷き、渡り廊下から飛び降りる。



当麻が驚愕の表情で、ステイルが余裕の笑みでソレを見ていると。

どこからか飛んできた星型の物体が、落下するカービィの体をキャッチした。

「な、なんだ、アレは…？」

移動用の礼装…、にしては…、周囲を漂うエネルギーがあまりにも膨大すぎる…!？」

ステイルが困惑を露わにする傍で、呆然とする当麻。

と、当麻とカービィの瞳が合う。

カービィは「任せてくれ」と言わんばかりに、頼もしさを感じさせる眼差しを送ると、そのままアパートを旋回するように、ワープスターでの移動を開始した。

「…いや、しかし、君だけになったというのも好都合…! 『魔女狩りの王』!!」

「ツソ…!」

攻略法を教えたあの卵モドキは気になるが、今は明確な脅威たる当麻を排除しなくては。

そう判断したステイルは、物量に物を言わせて、復活を繰り返す魔人で当麻へと襲いかかる。

当麻はカービィが止めてくれると信じ、右手以外の箇所には炎が触れないように立ち回る。

生憎、格闘術の心得や護身術などをこれっぽっちも収めていない身としては、軽快な

立ち回りなど出来ない。

が、右手で触れるだけで攻撃を無効化できる以上、時間稼ぎは出来る。

当麻が横目で卵モドキへと視線を送ると、彼は愉快なショーを見ているかのように、ニマニマと笑みを浮かべていた。

「なんだよ、アイツ…?」

「よそ見してる場合か!!」

「つぐ、あああつ!?!」

しかし、意識の逸れた一瞬で、魔人の一撃が凄まじい風圧を巻き起こし、当麻を吹き飛ばす。

そのままとどめを刺すべく、ステイルは魔人へと指示を飛ばした。

「灰は灰に…、塵は塵に…!!吸血殺しの紅十字…!!」

『イノケンテイウス魔女狩りの王』、殺せ!!』

ステイルの声と共に雄叫びをあげ、十字架を振り下ろす魔人。

当麻が右腕を掲げようとするも、体の下敷きになって、上手くいかない。

間に合わない。当麻が冷や汗を流した、その瞬間だった。

「はあつ!!」

火だるまになったカービーが、魔人を掻き消したのは。

カービィは着地すると、当麻の無事を確認して、「ぼよおっ！」と笑みを浮かべる。しかし、このままではまた復活してしまう。当麻がそう警戒し、ステイルが高を括っている。

魔人はそのまま霧散し、姿を消した。

「……………は？…いや、まさか…？」

まんまるピンク、お前っ!!アレだけあったルーンを消したのか!? 一体、どうやって!! 「忘れちゃツタ? カービィが今コピーしてるのは、炎すら焼き尽くす『ファイア』ダヨ?」  
んなモン、ゼーンブ燃やしチャツタヨォ

卵モドキの言葉に、ステイルは愕然と目を見開き、手を震わせる。

破いたり、水に濡らすならまだわかる。しかし、燃やすとなれば話は別だった。

「馬鹿な!?! あのルーンは『魔女狩りの王』イノケンティウスを顕現させるためのもの!! 火を司るものだぞ!?!」

「ダア・カア・ラア、ソーイウのも含めテ、『ゼンブ燃やす』ツテ言ッてンダヨ」

「あ、ありえない…。なんなんだ、このまんまるピンクは…!?!」

ありえない存在。あつてはならない不条理。

まるで、『理不尽』という概念がそのまま闊歩しているようなデタラメさだ。

しかし、ここで諦めてはならない。

ステイルは己を奮い立たせ、もう一度、炎を手に作り出そうとする。  
が。ソレを阻むように、距離を詰めた当麻が、拳を引き絞った。

「俺を忘れないよ」

「……………ツ!!」

瞬間。放たれた拳が、ステイルの頬を捉え、意識を吹き飛ばした。

## STAGE : 4 くちうつし

「……なんだったんだ、あの卵モドキ」

倒れたステイルを横に、卵のシルエツトが消えた空を見上げる。

たしかに声は聞こえた。では、肝心のヤツはどこに行ったのだろうか。そもそも、アレは味方だったのだろうか。

そんな考えが脳を駆け巡るも、当麻は「上条さんの残念頭じゃわかんねえか」と自嘲気味に切り捨てた。

考えなくても、答えを知っていそうな人物が、この場にいるのだから。

「なあ、エフィリン。さっきの卵モドキはなんなんだ？」

「マホロアのこと？ うーん…。一言で言えば、『オオカミ魔術師』…かな？」

「なんじゃそりゃ…」

「ホラ、オオカミ少年って、トーマが読んでくれた絵本にあつたじゃん。

アレみたいなのに、彼の言ってることはドレが本当でドレが嘘なのか、マホロア以外は誰も見分けがつかないんだよ」

要するに、信用ならない相手らしい。

マホロアの前科を知らないエフィリンは、咄嗟に「カービイのともだちだから、悪い人ではないんだけどね」と付け足す。

とりあえず、魔術師をどうしようか、と思い、視線をそちらに向けると。

カービイがステイルの頬をペチペチと叩き、なんとか起こそうと奮闘しているのが見えた。

「…カービイさん、何やってるんです？」

「ぼよーぼよぼよ、ぼーよっ！」

「えっと、『なんでインデックスを追いかけてるのか聞きたい』んだって」

「……インデックスに指示を仰ぐこうにも、扉がコレだもんなあ……」

当麻は言って、ドロドロに溶けて固まったドアノブを見やる。この調子では、鍵も碌に機能しなくなっているだろう。

ガツクリとうなだれ、「不幸だ……」と頭を抱える当麻。

ソレに気づいたカービイは、未だに起きないステイルから手を離し、開かなくなってしまった扉へと駆け寄った。

「なあ、カービイ。この扉、なんとか出来ないか？」

「ぼよっ！」

「え？……えっと、これでいい？」

カービイがエフィリンに何事かを伝えると、彼は少し困惑した後、そこらにあつた石ころを取り出す。

ソレを受け取つたカービイは、口を開けてソレを飲み込み、姿を変えた。ステキにムテキな重量級。歩く落石、コピー能力「ストーン」である。

カービイが拳を構えると、その腕にまとわりつくように、巨大な拳型の岩が顕現した。「いやいやいや!?カービイさんお願いだからちよつと待つ」

「ぼよおっ!!」

「……ああ……。遅かつた……」

当麻の制止の声は一足遅く、放たれたアツパークットは既に扉を捉えていた。

ガラガラと崩壊する自宅の扉を前に、当麻は蹲つて「不幸だ……」と嘆く。

頼まれて扉を開けただけなのに、何故当麻は嘆いているのだろうか。そのことをよくわかつていないカービイは、とりあえず落ち込む当麻の背をさすつた。

◆?◆?◆?◆?

「フウ、あんまりにもムカついたから、ツイ口を出しちゃつたヨオ。

…チヨット調べたケド、『無限のチカラをコンパクト化して世界に顕現できない』程度の魔術師が最高峰なら、この星の魔術師は随分と低レベルだね。

ソレで宇宙がシハイでキンなら、ハナツからマスタークラウンなんて狙わないヨオ」

その頃、学園都市から少し離れた森林にて。

再び見るも無惨な姿になったローアを見上げながら、マホロアは呟く。

何を隠そう、彼があの場合にいたのは、散らばった部品：即ち「エナジースフィア」を探していたからである。

ただの歯車にしか見えないソレは、その実、一つ一つに地球上では確認することのないエネルギー：「夢のチカラ」が大量に宿っている。

「科学も魔術もゲンシジン並ミ。夢のチカラを扱った技術なんて、コレっぽっちも発達してナイ。

マツタク、とんだド田舎に飛ばされたモンダヨオ」

ハルカンドラの文明をよく知るマホロアからすれば、どの星もド田舎のカテゴリに含まれることだろう。

マホロアはとりあえず、研究所を一つ潰して回収したエナジースフィアを組み込む。システムは復旧したが、飛ぶことはまだできないらしい。

そのことに軽く舌打ちするも、「マア、イイカ」と開き直る。

この星の魔術に科学。到底、利用価値があるとは思えない。

しかし、大きな収穫はあった。カービィのそばにいますという特大級の欠点は付き纏うが、うまく行けば、自身の望む、宇宙支配の礎となれる可能性を秘めた力が見つかった



のだ。

マホロアはその事実にも、ククク、と喉を鳴らし、ほくそ笑む。

「マ、タイクツせずには済みソーでヨカツタヨオ」

◆?◆?◆?◆?

「……ふう。ま、こんなもんでいいだろ」

とりあえず、怪しそうな物は粗方排除できただろうか。

当麻はビニールテープで出来の悪いミノムシのようになるまでステイルを縛り上げ、額に流れる汗を拭う。

インデックスによれば、もう一人の仲間はカービィに刀を空の彼方までぶっ飛ばされたという。替えの利かないものらしく、今頃必死になって探し回っているだろうのと。と。

となれば、横槍が入らないウチに、ステイルを尋問した方がいい。

「……しっかし、起きねーなあ」

「もう夜だからじゃないかな?」

「や、多分殴る力が強かったんだろ。」

コイツ、魔術を使った殺し合いにはある程度慣れてそうだったが、明らかに喧嘩慣れしてなかった。

衝撃を殺さずにモロに受けたんだと思うぞ」

当麻はそれだけ言うのと、「どうしたもんかな」と頭をかく。

と。そんな彼のズボンを、ワドルデイの一人がくいつ、くいつ、と引つ張った。

「どうした、ワドルデイ?」

「わにやつ」

ワドルデイがありもしない懐を弄ると。そこから大きめのトマトが姿を現した。

否。ただのトマトではない。中心部にペンで書いたように『M』と刻まれたトマトだ。

あまりに怪しい食物であるソレに、当麻は思わず渋い顔を見せる。

「…な、なんだ、それ?」

「マキシムトマトだ!…この星にも来てたんだね!」

「ぼよ、ぼよお!!」

その名もマキシムトマト。

一口食べれば元気いっぱいになれる、夢のチカラをたつぷり含んだ奇跡の一品。カー

ビイの好物であり、ソウルフード。

オヤツにもゴハンにもなり、どんなケガも全快する、まさに万能食材である。

ワドルデイはそのマキシムトマトを食べさせようと、ステイルの口に運ぶ。

しかし、気絶しているのに咀嚼できるはずもなく、マキシムトマトはころん、と地面

を転がった。

「わにや…」

「ぼよっ！」

「……わにや、わにや！」

カービィは転がったソレを手に取り、ワドルデイに何事かを伝える。

ワドルデイは暫し悩んだ後、深く頷いて、ステイルの顎を、少し上に上げた。

「なにをするつもりなんだ？」

当麻が疑問に思っている。

カービィはマキシムトマトを口に含んで咀嚼し、その口でステイルに接吻をかました。

「はー！ーっ?!?!?」

あまりにショッキングな光景に、目を白黒させる二人。

ステイルの喉元をペースト状になったマキシムトマトが通り過ぎるや否や。気を失っていたはずのステイルはカツ、と目を見開き、あたりを見渡した。

縛られている状況を察した彼は、蔑んだ目を当麻へと向ける。

「……悪趣味な……！僕を葉だのなんだので尋問しようって腹積りか…!!」

「ンなつもり微塵もねーよ、ファーストキスが目の前の宇宙人のステイルさん」

「……………は？」

当麻の言葉に、啞然と口を開けるステイル。

カービィは「ぼよ！」とステイルが起きたことを喜ぶように、笑顔で手を振るだけ。周りを見ると、インデックスと当麻が同情しているのか、なんとも言えない瞳で自身を見ていることに気づいた。

「……………えっ、と…。ど、どう言うことだ？」

「カービィの『くちうつし』だね。

くちうつしで食べた物を分けて、それぞれのケガをすぐに治すんだ」

「……………食事でケガが治るのか？」

「えっ…この星じゃ治らないの？」

そんな話、見たことも聞いたこともない。

長い目で見れば、治癒に助力しているのだろうが、少なくとも数日はかかる。

彼らは知らぬことだが。ポップスターのように、夢のチカラが充満していると、食べ物とはどんな物であれ、自然発生する。

材料だったり、もしくは料理そのものだったり種類は様々で、そのどれもが例外なく、夢のチカラを宿している。

ソレを摂取することによって、どんな傷でも、たちまち癒すことが出来るのだ。

「……その…、つまるところ、僕のファーストキスは…」

「今より前に誰もいなかったら、カービィになるんだよ」

「……………今ほどお前が恨めしいと思ったことはないよ、まんまるピンク」

「ぽよっ。」

「どうやら、本当にファーストキスだったようだ。熱い接吻を交わしたのが、まさかの人ですらないというショックに、遠い目をするステイル。」

「文化の違いだから気にしなくていい」と当麻が慰めると、ステイルは「うるさいよ」とぶつきらぼうに返した。

「で、こんな状態で僕を叩き起こした理由はなんだい？まあ、理由なんて分かりきってるけど、一応聞いておこうか」

「インデックスと所属が一緒なのに、なんで執拗に追いかけて回してるんだって聞きたかっただけだよ。」

正直、怪しいもんは取り上げたから、このまま放逐してもいいんだけどな」

「自分を殺そうとした相手に、随分と慈悲深いことだね」

「性分だ。気にすんな」

上条当麻はカービィに負けず劣らずの善人であり、英雄気質である。口こそ粗野で適当だが、倫理観が破綻したこの都市においては、もはや稀有な程に善性に溢れている。

その優しさは、自分を殺そうとした相手にも向けられるほどには、懐の深いものだった。

ステイルは暫し考え込んだ後、口を開く。

「彼女を別の部屋に移してくれ。彼女に聞かれない場所なら、話してもいい」

「わかった。インデックス、いいか？」

「う、うん。…あつ！ワド太郎、ワド次郎、ワド三太、ワド四郎、ワド五郎、ワド六郎も連れてつていい？」

「3番目だけあからさまに落ち込んでる!!」

仲間はそれなのはやめてさしあげろ!!せめてワド三郎にしてやれ!!」

「わにやにや…」と泣き崩れるワドルデイの一人に、インデックスは「ごめんなんだよ、ワド三郎」と彼を抱え、部屋を出ていく。

ソレに連れ添うように、五匹のワドルデイたちがわらわらと出ていくと、残された当麻たちはステイルの拘束を解いた。

「…アレもデタラメに強いとかないよな？」

「いや、ワドルデイたちはそんなに強くない。強いのは団結力と可愛さ、優しさくらいだ」

「……………」

スタイルはなんとも言えない表情で、ワドルデイらと戯れているだろうインデックスが、いる部屋を見遣り、ため息をついた。

## BOSS 書庫にとりつく闇 前編

結論から言うと、ステイルがインデックスを付け狙った理由は、彼女の延命措置のためであった。

インデックスには、完全記憶能力という、一度見たものを忘れないという特技がある。生まれながらの天才であった彼女は、その能力をもつてして、10万3000冊の魔導書を寸分変わらず記憶した。

魔力を作れない体質ゆえに、その魔導書を使うこと自体はできなかったが、それでも果てしない危険性だけは孕んでいた。本人にその自覚はないだろうが。

しかし、1冊でも膨大な情報量を持つ魔導書を、10万3000冊も記憶したのが祟ったらしい。結果、彼女の脳の85%は圧迫され、残る15%で日常生活を送っている。

インデックスという少女の特異性がそうさせるのか、15%しか働いていない脳でも、凡人としての生活はできるらしい。

だが、ここでネットクになってくるのが、完全記憶能力だ。忘れるというメカニズムで容量を確保できる凡人とは違い、インデックスはそこに情報が追加されていく。



だからこそ、一年置きに記憶を消す措置が必要になった。記憶を消さなければ、インデックスの脳は容量を超え、死を迎えてしまうのだから。

そのために、ステイルと神裂は『必要悪の教会』から逃げ出したインデックスを追い回していたのだ。

そして、その周期は、あと数日に迫っているという。

全てを聞き終え、沈黙が支配する中。当麻は、何か違和感を覚えていた。

脳医学に明るいわけではないが、学園都市におけるカリキュラム上、その知識はある程度叩き込まれている。

しかし、肝心な部分が悪い出せない。

当麻が悶々と唸っていると、インデックスにまつわる全てを語り終え、返されたタバコを口に啜えたステイルは、ふう、と息を吐いた。

「…僕も、既にいない過去の彼女と絆を結んだ身だ。インデックスを死なせたくない。頼む、彼女を真に想うのなら、僕たちに引き渡してくれないか？」

「んなこと、言われたって…」

当麻には決断し難い話だ。

今まさに、ワドルデイたちと遊んでいるインデックスを、記憶を消すことで殺すか。それとも、消さずにその時まで待つか。

彼は優しいからこそ、決断できなかつた。

カービィは大前提として、死という概念すらほぼ曖昧な文明に暮らし、人として当たりの器官があるかすら怪しい宇宙人。その能天気さも相まって、「インデックスは、いろんなことをわすれないと死んじやう」ということくらいしかわかつていない。

だが、親しい人から忘れられ去られることの悲しさは、ともだちの一人であるスージーから聞いている。

しかし、記憶を消さなければ、インデックスが死んでしまうのも事実。そのことに、カービィは珍しく頭を悩ませていた。

と。ここで、エフィリンが首を傾げた。

「あれ?あれれ…?ん…?」

「ん、どうした?」

「ねえ、インデックスって、いくつ?」

エフィリンがステイルに問うと、彼は皮肉めいた笑みで答えた。

「…宇宙人にはわからないだろうが、日本で言う、中学生ほどの年齢だ」

「12〜15くらいってことか。」

あの感じだと、12かそこ…ら…つ!?」

当麻はその答えが、どこかがおかしいことに気づいた。

インデックスの一年の記憶容量は15%。それを繰り返すことで死ぬのならば、完全記憶能力を持つ人間は、単純に100を15で割って、6年少しか生きることが出来ない。

無論、そんなわけがない。数年ほど前、ニュースでチラッと見た完全記憶能力保有者は、少なくとも成人していた筈だ。

そのことに気づいた当麻は、慌てて誰かに連絡を取ろうと、携帯を取り出した。

「どうした？そんなに血相を変えて」

「お前の言うことがハナツからおかしいってことに気づいたんだよ!!」

「やっぱり！お昼のテレビで見た『完全記憶能力』を持つてる人はおじいさんだったんだ！

ステイルの話だと、完全記憶能力を持つ人にとって、一年の記憶で脳を15%使うなら、小さな頃に死んじゃうんじゃないかな？」

エフィリンも、当麻と同じ違和感を抱いていたようだ。ステイルは面食らうも、「そんなはずは…」と、言葉を紡ごうとして、即座に押し黙る。

一方で、なんのことかさっぱりわかっていないカービイは、首を傾げていた。

◆?◆?◆?◆?

当麻は慌てて担任教師に連絡を取ろうとしたが、先日出会った中学生の電撃によつ

て、携帯が見事に壊れてしまっていた。

そのことを悟った彼は、階段を降り…というよりは転げ落ち、なんとか公衆電話にたどり着く。

財布の中に入っていた100円玉は消え、中身は1000円玉のみ。

本日何度目かもわからない微妙な不幸に、「不幸だ…」と嘆き、1000円玉を入れ、番号を打ち込んで受話器を手に取る。

数秒のコール音。ソレを待っている間、当麻はふと、電話ボックスの隅に、黒い汚れがあることに気づいた。

「うっわ、汚え…。ったく、誰が前に使ったのか知らないけど、掃除しろよな…」

当麻は言って、少し視線を離す。

あの担任教師のことだ。どうせ晩酌中なのだろう。早く出てくれ、と願いながら、響くコール音が途切れるのを待つ。

彼はこの時、気がつかなかった。

足元にあつたはずの黒い汚れが、自身の影に潜り込んでいたことに。

◆?◆?◆?◆?

結論から言おう。記憶のパンクで死ぬことは絶対にならないらしい。晩酌中の担任教師から、補習の激化と引き換えに当麻が得た情報は、ステイルたちに並々ならぬ衝撃を齎

した。

つまりは、インデックスに首輪を付けておきたい上層部に騙されたのだ。

しかし、それでは一年の周期に訪れる苦痛や高熱などの症状の原因がわからない。ステイルたちが考えた結果、その原因は、何かしらの魔術にあるのではとのこと。

そして、頭に症状が出るのなら、その元凶は頭部にあることも突き止めた。

刀を探しに駆けずり回っていた神裂にも事情を説明し、当麻のアパートに招集。

一度カービイらと敵対した身ではあるが、インデックスを救いたい気持ちは皆同じだと和解。そもそも、カービイたちは、神裂に斬りかかられたことを特に気にしていなかった。

集まった皆は、ワドルディたちと遊び疲れてすっかり寝入ったインデックスを前に、相談を始める。

「まずは頭にある術式を破壊するところからだな。ちようどおあつらえ向きなヤツがいて助かった」

「とは言っても、こいつの頭にやあ何回か触ってるぞ？もう壊れてるんじゃないか？」

「いえ、壊されたのなら、何かしらのセキュリティが発動する筈。」

そのリスクを度外視するほど、上層部はおめでたい頭をしていません」

3人がインデックスの顔をまさぐり、原因となっているであろう箇所を探す中。

カービイがその前に立ち、大口を開けて、その中を丸い手で指差した。

「ほよっ!」

「カービイ? 何やって…いや、まさか」

当麻がカービイの行動に何かを察したのか、インデックスの口を広げる。

と。彼女の喉奥に、普通の人間には考えられない模様が刻まれているのが見えた。

神裂とステイルもそれを覗き込み、自らが騙されていた事実が実感としてのしかかったのか、暗い表情を浮かべた。

「まさか、本当にあるとはね…」

「……まんまと騙されていたわけですか」

「後悔はコイツを助けた後でしろ」

当麻は模様に向けて、指を伸ばす。

カービイは右手がソレに近づくと、じわじわと迫り来る嫌な予感に、構えをとる。

ステイルたちもカービイと同じように、それぞれ構えをとった。…神裂が持つ獲物は、当麻宅の物干し竿という、なんとも締まらないものだったが。

ばちん、と何かが壊れる音と共に、インデックスの雰囲気が急激に変わる。

様子を見守っていたワドルディたちはそれに怖気付いたのか、大慌てで部屋から去っていった。

「——警告、第三章第二節。Index—Librorum—Prohibitorum——禁書目録の『首輪』、第一から第三まで全結界の貫通を確認。再生準備……失敗。

『首輪』の自己再生は不可能、現状、10万3000冊の『書庫』の保護の為、侵入者の迎撃を優先し……」

そこに立ちほだかったのは、神裂が予想したセキュリティそのもの。

インデックスの魔力は、この「首輪」と「セキュリティ」に全て回されていたと考えれば、彼女が魔術の一切を使えなかったことにも説明がつく。

と。ここでふと、ある異変が起きた。

まるで、今のインデックスに誘われるように、当麻の影から現れた謎の黒いモヤが、彼女にまとわりついたのだ。

ソレに見覚えのあったカービィは、目をこれでもかと丸くし、警戒心を高める。

モヤは魔法陣を次々と破壊し、インデックスへと染み込むように、彼女の体内へと侵入する。

それに対して、彼女を突き動かすセキュリティ……『自動書記』は、エラーを吐いた。

『書庫』内に侵入者有り。『書庫』内部に結界を形成……失敗。迎撃魔術……失敗。失敗、失敗、失敗、失敗、失敗。

『書庫』に深刻な精神汚染を確認。排除不か…、ふふ、ふふふふ、ふ、不可の、不、不不……』

「な、なんだ…？なにが、起きて…？」

瞬間。彼女の瞳が赤く染まり、纏う雰囲気がいよいよ邪悪なものへと染まっていく。

ステイルたちも、本来あり得ない異常が起きていることに気付いたのか、ぱちくりと目を丸くする。

皆の視線を浴びる中で、体の感触を確かめるように、まじまじと掌を見つめていたインデックスが、口を開く。

『ふむ…。粗悪な魔術だ。ハルカンドラの基礎魔術にも及ばんとは、随分と程度の低い。

…まあ、いい。これほどまでにか弱い体であれば、ヤサシイヤサシイ「星のカービィ」はヘタに手を出せないよなア？』

「……お前、なんだ？」

歪んだ笑みを浮かべるインデックスに、当麻が拳を構えながら問う。

否。インデックスではない。そもそも、目の前にいるのは、人間ですらない。

エフィリンはソレに愕然とし、口を開いた。

『『ダークマター族』…?!? な、なんでこの星に…?!?』

「ダークマター族…？なんだ、ソレ…？」



「ダレかを乗っ取って星を闇に包み込む、闇の生命体だよ！」

グーイっていうカービイのともだち以外は、揃って『光溢れる世界』とか、『暖かい夢』とかが大っ嫌いなワルモノなんだ!!」

『オット、シンザンモノにしては詳しいな。デデデ大王あたりに聞いたか?』

ダークマター族。今なお、全宇宙で勢力を広げる、闇を司る種族。

ハルカンドラがばら撒いた夢のチカラや、宇宙に溢れる光を敵視し、自らの住み良い世界を手に入れようと、宇宙全体を闇で包み込むことを目標に動いている。

彼らは揃って狡猾であり、重大且つ、ある程度の勝手が見逃されるような立場の存在に取り憑き、星にある文明を崩壊へと導き、闇へと包み込む。

寄生虫のように、体内から追い出されれば弱くなるかといえ、そうでもない。寧ろ真逆で、より強大になるケースがほとんどである。

前触れのない出現に、皆が目を白黒させる中、心当たりのあつた当麻は、目の前の存在に問いかけた。

「お前、さつき電話ボックスにあつた汚れか?」

『……一応、肯定しておこう。』

「あのお方」に命じられ、この星に降り立ったのはいいが、下手に動くなど言われてしまつてな。ああして誰かの影に潜り込み、取り憑く相手をセンベツしていたのだ!」

「……上条当麻、君は良い知らせと共に、余計なモノまで連れてきたね」  
「気づくわけねーだろ、あんなん…!!」

ステイルの白い目に、当麻は顔を擧めて反論する。電話ボックスの中に、そんな危険な生命体がいるなど、誰が予想するだろうか。

今までのものとは、あまりに程度が違いすぎる不幸に、「不幸だ」と嘆くことも忘れ、忌々しげにインデックスを睨め付ける当麻。

ダークマター族と浅からぬ因縁があるカービイもまた、同じように彼女を睨め付けた。

「不浄の者め……その子に取り憑いて、何が目的ですか……」

『この私、「ダークリムロ」の目的はただ一つ。』

「星のカービイ」、キサマの始末だ』

神裂の問いに答えるや否や、インデックス…否。ダークリムロの前に、ダークマター族を象徴するかのような、瞳によく似た魔法陣が展開される。

そこから放たれたのは、闇色の光線。当麻の部屋をドロドロに溶かすほどに熱量を含んだソレが、カービイへと襲いかかる。

当麻は咄嗟にカービイの前に立ち、右手でソレを受け止めた。

「っ…、お、重い…っ!!」

『竜の息吹』……インデックスの収めている魔術は一通り使えるのですね……!』

「いや、恐らくは伝承の何倍もの威力を誇っている……。それこそ、人の身で触れれば一瞬で蒸発するぞ……!!」

幻想殺しですら殺しきれない勢いに、当麻は吹き飛ばされないよう、足と右腕に力を入れる。

ワドルデイたちも黙って見ていられなかったのか、吹き飛ばされようとしている当麻の背中を六人がかりで支えた。

「わにやつー!」

「ワドルデイ、サンキューな……!」

「油断しないでください! ヤツはまだ何かを仕掛けてきます!」

当麻がワドルデイに礼を言ったその時、ダークリムロが新たに魔法陣を展開する。

今しがた放たれている『竜の息吹』と全く同じ魔法陣。

燃費が悪い魔術である『竜の息吹』をここまで惜しげもなく使えるあたり、魔力量は本来のインデックスの遥か数倍はあると考えると良さそうだ。

その事実を悟った当麻は、咄嗟にカービィに指示を飛ばした。

「カービィ! 俺の右手じゃ限界がある! アレ、全部吸い込んでくれ!!」

「ぼよっ!!」

瞬間、放たれた光線が、当麻たちへと襲いかかる。

カービィはソレに大口を開け、「ごおおお…」と、いつもより激しい音を立てて、その光線を吸い込んだ。

光の束を口いっぱい頬張ると、カービィはそれをゴクリ、と飲み込む。

彼が飲み込んだのは、『竜の息吹』と称される、この星における高位魔術。幻想殺しでなければ、かするだけでも人が蒸発するようなシロモノである。

そんなものを、この「星のカービィ」がコピーすればどうなるか。その答えを悟ったダークリムロは、慌てて魔法陣を展開する。

『さ、させるか!!』

しかし、時すでに遅し。

魔術が放たれるのを待たず、カービィの体が強い光に満たされる。

頭部から放たれたのは、ステイルとの戦闘で顕現したものよりも遥かに激しい。炎を包み込むように現れた王冠は、燃え盛る炎を象徴するようなものへと変わっている。

ただ立つだけで、竜が吼えているような威圧感が、カービィの周囲を包み込む。

普通のコピー能力とは比べものにならないチカラを秘めた、『スーパー能力』の一つ。

あまねく全てを、業火の竜で焼き尽くす。その名も『ドラゴストーム』。

「ぼよおおっ!!」

『ぐおおっ…!?!』

カービイが吼えると共に、炎の竜が顕現し、光線を放つ魔法陣を打ち砕いた。

あまりの光景に、動けずにいたステイルたちに、当麻が発破をかける。

「ボサツとすんな!!いくらカービイが強くても、インデックスを傷つけずにアイツを倒すなんてのは無理だ!!」

俺たち全員で隙を作って、アイツをインデックスから追い出さなきゃなんねえ!!」

「追い出すと言ったって、君の右手で触れてどうにかなるものなのか!?!相手は未知の生命体なんだぞ?!」

襲いくる猛攻に対処し、思うように動けない当麻とカービイ。

特にカービイに至っては、インデックスを傷つけないように立ち回っているため、強い魔術に対処する固定砲台のような状態だ。

ダークリムロをインデックスごと倒して、元の状態に戻す…という手もあるにはある。だが、そうすれば確実にインデックスは死に瀕することになる。

ダークリムロはそのことを理解して、カービイがヘタに手を出せないインデックスに取り憑いたのだ。

唯一の誤算は、カービイが「魔法陣を消すためだけにその能力をフル活用する」こと

を思いつく程度には頭が回ったことくらいだ。

「大丈夫！ボクの浮遊能力を一度は消した右手なんだ！」

ダークマター族の憑依くらいなら、絶対に引き剥がせる！」

「だとよ！助ける条件がちつとばかり変わった程度だ！やることは変わらねーだろ!!」

「し、しかし…！あれほど強大な存在に…、僕たちみたいな魔術師の力が通用するのか…?!」

当麻の言葉に、今なお猛攻を続けるダーククリムロに対して戦意が萎みつつあったステイルが、思わず弱音を吐く。

それに対し、当麻は怒りの形相で叱責した。

「テメエら、こんなワケのわかんねえバケモンに心折られて、ずっと望んでいたことすら忘れてんじやねえぞ!!」

なあ、思い出せよ!!テメエらは、ずっと待ってたんじやねえのか!?

インデックスの記憶を奪わなくて済む…！インデックスの敵にならなくて済む…!!

そんな誰もが笑って、誰もが望む、最っ高に最っ高なハッピーエンドってヤツを!!」

ダーククリムロからすれば、何より大嫌いな、光溢れる夢物語である。

虫唾が走ったのか、苛立ちを吐き捨てるように舌打ちし、更なる魔術を展開する。

黒い羽が舞い散り、竜がそれを薙ぎ払う中で、当麻は言葉を続けた。

「望んだ展開とは違うかも知れねえ……でも、もう絶望するようなことなんて微塵もねえんだ!!ちつと前に進むだけで、願いに届く、そんな展開が今なんだよ!!」

英雄がやってくるまでの場繋ぎじゃねえ……、ヒーローが登場するまでの時間稼ぎでもねえ!!」

他の何者でもなく他の何物でもなく……! テメエのその手で、たつた一人の女の子を助けてみせるって誓ったんじゃねえのかよ!」

より苛烈になる攻撃に、当麻の言葉が徐々に苦悶に満ち始める。

しかし、当麻はそれでも、言葉を紡いだ。

「ずつとずつと、ヒーローになりたかつたんだろ!!絵本みてえに映画みてえに、命を賭けてたつた一人の女の子を守る、『そんな魔術師になりたかつた』んだろ!」

だつたらそれは全然終わってねえ!!始まってすらいねえ!!長いプロローグがようやく終わるって時に……、出てきたボスがちつと強いから……つ、そこで絶望してんじゃねえよ!!」

羽を薙ぎ払う竜が、魔法陣を打ち砕く。

しかし、新たに展開された魔法陣が、幾つもの光弾を生み出し、カービイたちへと襲いかかった。

当麻はワドルディたちにも向かつていたソレを打ち消し、ステイルたちに告げる。

「手を伸ばせば届くんだ……いい加減、始めようぜ！魔術師!!」

その言葉に奮い立った彼らは、それぞれの獲物を手に取り、告げる。

「————Fortis931!!」

「————Salvere000!!」

「「「「わにやつ!!」」」」」

「ぽよっ!!」

ソレに呼応するように、ワドルデイとカービイもまた、気合いを入れる。

カービイと当麻、そして魔術師とワドルデイ。総勢10名のドリームチームが今、一人の少女を救うべく立ち上がった。



## BOSS 書庫に取り憑く闇 後編

一瞬の油断が死に繋がる、緊迫した空間。

インデックスに取り憑いたダークリム口を追い出すためには、当麻の右手が彼女の体に触れる必要がある。

しかし、この情報はダークリム口にも筒抜けであり、触れられないように、黒い羽をばら撒かれ、死角に罫まで張られている。

少しでも触れれば、死は免れない猛攻。その攻撃の矛先は、完全にカービィから当麻へと狙いを変えていた。

「ツツ、近づけねえ…!!」

『炎よ、巨人に苦痛の贈り物を』!!』

ステイルが炎を放つと共に、当麻の死角を舞っていた羽を打ち消す。

しかし、自身にも小さな脅威が迫っていることを悟り、身を翻した。

「キミに叱責でもしようかと思っただが…、そんな暇もないね」

「でも、こんだけ必死になって俺を殺しにくるんだ…！俺が触れれば、全部終わるってこつたろ…!!」

「成る程。それまでの道を作るのが、我々の戦い、というわけですね」

「わにや、わにやわにや!」

獲物が無く、物干し竿を握る神裂に、ワドルデイの声が、とたとたという音と共に近づいてくる。

一体なんだ、とそちらを見ると。何処から持ってきたのか、よく手入れされた短剣を掲げるワドルデイが居た。

「これを、私に?」

「わにやっ!」

「…ありがとうございます」

本当は刀が望ましいのだが、ない物ねだりをしていても仕方がない。

神裂はワドルデイから剣を受け取ると、生まれ持った臂力で迫り来る羽を打ち払う。

魔術の通りは悪くない。流石に愛用の刀とまではいれないが、代替品にしては破格の性能と言えるだろう。

しかし、ワドルデイたちは武器もなければ、力もないはず。そのことを知っていた当麻が、果敢にも戦場に立つワドルデイらを見やると。

馬鹿みたいに巨大な傘を開き、攻撃を受け止めながら行進するワドルデイらが見えた。

実のところ、ワドルデイたちはもしも襲撃者がきても、相打ち覚悟でインデックスを守るために、どこにあるのかよくわからない懐に傘を仕込んでいた。

しかし、インデックスに取り憑いたダークリムロ相手では相打ちどころか、即座にやられてしまうのは目に見えている。

そこでワドルデイたちは考えた。自らが今すぐに強くなるには、どうしたらいいかと。その答えは、案外すぐそばにあった。

カービイの持つ能力の一つ、「フレンズハート」である。

フレンズハートは、カービイのココロにある「優しさ」と「究極の楽観的思考」、更には彼の「無限のチカラ」を一部分け与え、仲間意識を芽生えさせるといふ機能を持っている。

わかりやすく言えば、フレンズハートに触れると、「カービイのともだちになる」という条件と引き換えに、「カービイに近い存在になる」のだ。

結論を言えば、ワドルデイたちはカービイの「フレンズ」となり、その能力の一つである「アイアイパラソル」を多重に発動させ、魔術を受け止めていた。

そのことを知らなかった当麻は、その光景に目を白黒させるも、そんな場合ではないと首を振る。

「…………いや、驚いてる場合じゃねえ……ワドルデイ、ソレで俺を守りながら進めるか!？」

「わにゃっ!」

もちろん、と言わんばかりに、力強く頷くワドルデイ。

当麻の周囲を、アイアイパラソルを構えた5人のワドルデイたちが全方位を固め、御に徹する。

視界が機能しなくなるのが欠点だが、幸い、こちらには仲間があと数人いる。移動については、誘導して貰えばどうとでもなる。

が。ソレを視認したダーククリムロもソレを悟ったのか、修道服を棘のように変形させ、アイアイパラソルを貫こうと迫った。

「くそッ、宇宙人つてのは僕たちよりも遥かにデタラメだな…!!」

ステイルが吐き捨てるように言うや否や、傘と棘が金属と金属がかち合うような、高い音を立てて激突する。

拮抗する力。激しく火花散るソレに、神裂が魔術を切り裂きながら間合いを詰め、伸びた修道服を掴んだ。

ダーククリムロがソレに対応する暇もなく、神裂は肩に力を入れ、その華奢な体を放り投げる。

「インデックス、すみません!」

『くそッ!』

投げられたダーククリム口は、咄嗟に黒のレーザーを当麻と神裂に放つ。

神裂は軽く飛ぶことでソレを避け、当麻はアイアイパラソルで受け止めたワドルデイを左手で支えることで、なんとか防御する。

と、そこに浮かんでいたワドルデイの一人が、ダーククリム口を傘ではたき落とした。

「わにやつー！」

「わにやつわにやつー！」

今のうちだ、とワドルデイが仲間告げると、当麻の周りを囲んでいたワドルデイたちがダーククリム口を取り押さえにかかる。

しかし、悲しきかな。ワドルデイのあまりに非力なまんまるの手では、ダーククリム口が取り憑いたインデックスを抑えられるわけもなく。

あっさり吹き飛ばされ、続け様に光弾が彼らに迫る。

「わ、ワドルデイ!?!」

「ほよっー！」

カービーが咄嗟に竜を放ち、光弾を全てかき消すことでことなきを得たが、当麻を守る布陣が崩れてしまった。

当麻は反射的に右手を前に掲げ、ダーククリム口が放ったレーザーを受け止める。

油断すれば、肩ごと持っていかれそうなほどの闇の奔流。骨が軋むような感覚に顔を

響めながらも、当麻は押されないように堪える。

と、その時。ステイルの逼迫した声が響いた。

「上条当麻、動くな!!」

ステイルが炎を放つことで、当麻の周囲を漂っていた黒の羽を打ち消す。

同時に、当麻のトレードマークたるツンツン頭を炎が掠めたのか、毛先が焦げたような音が響いた。

「うおあつち…!?!もうちよつとスマートに助けしてくれませんか?!上条さん自慢のツンツンが『チリッ』つつただけど!」

「助けてもらってにおいて文句を垂れるな!贅沢なヤツめ!!」

二人が言い合う間にも攻撃は止まず、カービーが操る炎の竜がそれを打ち払う。

その隙にワドルディたちも持ち直し、立ち上がったダークリム口を睨め付けた。

「ふりだし、ですね…」

「インデックスにある10万3000冊の魔術をフル活用してない…いや、『出来ていない』のか…?どっちにせよ、僕たちはナメられてるのかもね」

『違うな、小僧』

ステイルの意見に口を出したのは、他ならぬダークリム口。

攻撃の手を一切緩めず、ダークリム口は淡々と語り始める。

『私はコイツの頭にある魔術を使えないのではない。「使っても無駄だとわかってるから使わない」んだよ』

「なに……？」

世界の理すら捻じ曲げるほどの危険性を有する、10万3000冊の魔導書。

ソレを使っても無意味な事象が、果たして存在するのか。ステイルらが疑問を抱いたのを察したのか、ダークリム口は嘲るように笑いながら、カービィを指した。

『お前らのような程度の低い魔術師どもは、カービィのことを「やたらと強いピンク玉」程度にしか思っていないだろう。

しかし、その実は違う。カービィは世界の理を捻じ曲げようが、あらゆる概念を破壊しようが、絶対に揺らがぬ……、「理不尽」という概念そのもの。まさに「あらゆる宇宙の絶対的英雄」とでも呼ぶべき存在。

私たちがコイツを「星のカービィ」と呼ぶのは、その畏怖を込めてのものなのだ』

ダークリム口の言葉に、魔術師二人は怪訝な表情を浮かべる。

いくらカービィに高度な魔術が効かぬとて、自分たちの排除くらいならば訳ないはず。

そのことを問おうとするも、ダークリム口はそれさえも察知したのか、言葉が続けた。

『もし、私が世界の理を書き換えるようなマネをすれば、「星のカービィ」は必ず奇跡を

起こす。それこそ、私がしたことなど一瞬で覆すほどに大きな奇跡をな。

だからこそ、カービィを過度に刺激せず、且つ排除するために、最善の選択を取っているにすぎない』

ダーククリム口はそれだけ語ると、『終わりにしようか』と告げ、魔法陣を多重に展開する。

「竜の息吹」。先ほどから何度も放たれているソレが、不可避の一束となつて襲いかかる未来の見たステイルと神裂は、思わず冷や汗を流す。

そんな中で、当麻は不適な笑みを浮かべた。

「…なあ、ダーククリム口。アンタ、後ろに気をつけた方がいいぜ？」

なにせ、なによりも怖がつてる『ヒーロー』がいるからよ!!」

ダーククリム口の背後には、いつまにかコピーを切り替え、青の鉢巻を巻いたカービィが、星形の穴から飛び出た姿があった。

星型の穴の奥には異空間が広がっており、そこに台座に乗った青い鉢巻が鎮座しているのが見える。

台座の名は「コピーのもと」。カービィが触れるだけで、そのコピーに切り替えることが出来る優れものである。

「ほー…よおっ!!」



カービィが「コピーのもと」からコピーしたのは、スーパー能力ほど強大ではない。しかし、「ダーククリムロと当麻の距離を詰める」という点においては、最適なものだった。燃える闘魂で、敵を掴んで投げ飛ばす。その名も「スーパーレックス」。

カービィはダーククリムロを掴むと、彼が反応しきれないほどの速度で、その華奢な体を投げる。

その先にいるのは、当麻。その事実を視認したダーククリムロは、困惑を吐き出す。『ど、どういふことだ!?なぜ、スーパーレックスをコピーしている!』

なぜ、私の背後に回っている!?キサマから目を離れた一瞬で何が起きたのだ!?キサマは異空間を繋げるほど高位な空間転移能力など持ち合わせていないはず!!何故、何故、何故ええええっ!』

「なあ、お前。俺の『ともだち』を始末するとか言ってたな」

当麻がインテックスの体を右手で受け止めると、何かが壊れる音と共に、黒い球体が飛び出す。

ぼん、ぼん、と跳ねた球体…ダーククリムロの本体を、カービィが掴んだ。「ともだちの体でもだちを排除する…」

そんな外道極まりねえテメエの筋書きで、全部が思い通りに行くとか思ってたから、ベラベラと俺らに情報渡したんだろ?」

カービィがダークリムロにスープレックスを決め、投げ飛ばす。

飛んできたそれを前に、インデックスを床に寝かせた当麻は、右拳を構えた。

「そんな手で、俺のともだちを殺す…なんて幻想がまかり通ると本気で思ってたんなら…」

『や、やめろ!!やめろおとおつ!!』

幻想を否定する右拳が、ダークリムロに突き刺さる。

ダークリムロがソレに苦悶の叫び声を上げ、火花を散らしながら萎みゆく中。

当麻はダークリムロを見上げ、告げた。

「まずは、その幻想をぶち殺す」

『この、ナマイキなゲンシジンめがあああああつ!!!』

それが、ダークリムロの最後の言葉だった。

火花のように弾け飛び、部屋中を舞っていた嫌な空気が霧散する。

部屋に朝日が差し込む中、インデックスが目を開けた。

「んっ…?もう朝なんだよ…?」

「っはあああ…。お前なあ…」

そんな能天気な言葉に、当麻が呆れたため息を吐き、薄く笑った。

当の本人は何が起きていたのか知る由もなく、キョロキョロと散らかった部屋を見渡し、目をひん剥いた。

「わわっ!?! な、なんでこんな散らかってるんだよ!?! も、もしかして…、私すっごく寝相悪いかも!?!」

「ね、ね! ボクの『後ろからスープレックス作戦』、上手くいったよね、トーマ!」

「上条さんは聖徳太子じゃないから、二人いっぺんに迫ってこないでほしいな…!」

ダークリムロの不意を突くために、隙を窺っていたエフィリンも当麻の元に駆けつけ、勝利を喜ぶ。

一方で、何が何だかよくわかっていないインデックスは、怪訝そうに当麻を問い詰めていた。

当麻がそれに対応しつつ、カービイの方を見ると。カービイらがステイルの時と同じように、等間隔に並んでいるのが見えた。

「わにや、わにやつ!」

「ぼよ、ぼよっ!」

「ほら、トーマたちも! あ、トーマはカービイの隣だよ!」

「は、はあ…? え、俺らも踊るの?」

「踊る? 一体、何の話です?」

「僕たちに何をさせようって言うんだい?」

「私もカービイの隣に行きたいんだよ!」

ワドルデイやエフィリンに案内されるがままに、同じように並ぶ当麻たち。

神裂とステイル以外のそれぞれがポーズを取ると、軽快な音楽がどこからともなく流れてくる。

カービイが激しい挙動で踊る中で、ダンスの心得など微塵もない当麻たちは、なんとも心もとない挙動で音楽に合わせるのが手一杯だった。

数秒ほどのソレが決めポーズと共に終わると、暫しの沈黙が訪れる。

その後、彼らを包み込んだのは、インデックスの笑い声だった。

◆? ◆? ◆? ◆?

「……ん?」

「どうしたの、デデさん? そうめんなくなっちゃうよ?」

その頃、とある学生寮にて。

実家から山ほど送られてきた素麺を突く少女:「佐天涙子」が、季節外れのガウンを羽織るペンギンのような存在に声をかける。

ペンギンもどき:「否、ププランドの自称大王『デデデ大王』は、窓から視線を外した。

「ああ、いや。ちよつと、ヘンなカンジがしてな」

「ガウン羽織ってるからじゃない? 脱ぎなよ、見てて暑いし」

「サテンお前、なんてこと言うんだ!？」

コイツはプププランドの大王さまたるオレさまの大事な大事なトレードマークなんだぞ!!」

「そーだそーだ! 大王さまが勢い余って袖を破いて、その晩泣きながら補修した、大事な大事なガウンなんだぞ!!」

「クラツコオ!？」

学生寮の一室に、ペンギンと雲と女子中学生が三人。

一人の少女を救う奮闘の傍らで、具材どころか、薬味すらも全くないそうめんを三人は啜っていた。

LEVEL : 2 アブノーマル・セレモニー

STAGE : 1 道化師

「ぼよっぶいっぽよーぽっぽよー♪」

ぐっぐつと音を立てて煮立つ鍋に、よくわからない歌を歌いながら、調味料をふりかけるカービィ。

すっかり上条家の馴染みの光景になったソレに、形容し難い感情に表情を歪める当麻と、出てくる料理を今か今かと待っているインデックス。ワドルデイたちも子供用のフォークやら手に、くう、とお腹を鳴らしながら待っている。

聴て、鍋から料理が飛び出ると、我先にとインデックスがかぶりついた。

その光景を前に、当麻はチャーハン片手に今なお料理を出す鍋を見やる。

「相変わらずデタラメだよな、この鍋」

「絵筆があつたら、『アーティスト』をコピーして絵から食べ物を出したりもするよ。」

絵の具だと『ペイント』になって、そこからペンキまみれにするから気をつけてね」

「…上条さんの場合、気をつけても不幸が祟るんだけど」

「……ま、まあ、カービィが『クリーン』をコピーすれば何とかなるから」

カービイのコピー能力は、どれだけ数があるのだろうか。以前、ワドルデイを助けた時に見せた、自販機をほおぼる能力も気になる。

暇つぶしに、カービイの英雄譚をエフィリンから聞くのも悪くはないかもしれない。少なくとも、退屈することはないだろう。

そんなことを考えながら、ワドルデイらと食事をかきこむインデックスを見やる。

結局、彼女は上条家で暮らすこととなった。

彼女を除いても、9名もの大所帯なのだ。今更一人増えたとして、気にすることでもない。

寂しい一人暮らしから一転、騒ぎの絶えない、賑やかな家になってしまった。

そんなことを思いつつ、当麻は食べ終えた皿が消える驚きの光景に、苦笑を浮かべる。

「なんか俺、カービイたちのことにすっかり慣れちまったな。」

そばにるのが当たり前っつーか…、勝手なことだけどき、お前らのこと、ずっと昔からの『ともだち』みたいに思えるぜ」

「おっつーおっつーおっつーおっつー」

そんな日常の裏で、悲劇が起きていることには、まだ誰も気づいていない。

◆? ◆? ◆? ◆?

「…どういう、ことだ?」

ステイルは「三沢塾」と呼ばれる、育成機関の名を騙った魔術師の根城を前に、小さく困惑を吐き出す。

本来ならば、2000人が余裕で収まるほどのビルだったソレは、見るも無残な姿と化している。まるで、獰猛な獣を放ったような、そんな破壊の跡。

生存者など見込めなさそうな瓦礫の山を前に、ステイルは意を決して歩みを進めようとして、止める。

「あれは…、姫神秋沙と、アウレオルスIIイザード…と、なん、だ?」

目的であった保護対象と、そのそばに立つ警戒対象。そして、その前で悪魔のような羽を広げる、謎のシルエット。

先日出会った、カービーという理不尽によく似た出で立ち。またもや宇宙人関連か、と呆れていると。

そのシルエットの瞳が、こちらを向いた。

「おっほおっ?なんだなんだよなんなのサ、キミイ?ジロジロとボクの方を見て。

『ブシツケ』って言うんじゃないやなかつたっけ、この星じゃあサ」

「…お前、『星のカービー』という存在に聞き覚えは?」

「はア〜?ヤ〜ツパリ、ヤツも来てるのサ?」

じゃ、ツブシシってセーカイだったってことなのサ。ラッキー♪」



言つて、ケタケタと笑うシルエツト。

道化師とも、悪魔の角とも取れるような、二つ別れた帽子。万華鏡のように、いくつもの色彩を放つ翼膜。

焦点が合わないようで、しつかりと獲物を捉えて離さない瞳。悪魔の顎門としか思えない、笑みを浮かべた口元。

その全貌を視認した途端、シルエツト：否。いたずら道化師「マルク」が、一瞬にしてステイルに詰め寄つた。

「コイツ、オマエの同業者サンだろ？じゃア、ちゃんと手綱握つとけよな。コンナしよーもないコトで、いちいちカービィに奇跡なんて起こされたら、ボクが迷惑するじゃないのサ」

「なんだと…!!」

「おほ？」

マルクがそちらを見ると、オールバックだった髪を乱し、怒りの形相を浮かべるアウレオルスが立つ。

何を隠そう、彼もまた、記憶を屠られたインデックスと絆を結んだ一人なのだ。

インデックスに隠された真実を知らず、今なお彼女を救おうと足掻き、他者を顧みぬ方向へと暴走した男。それこそが、今のアウレオルスⅡイザードであった。

その彼が成そうとしていることを、「くだらない」と一蹴したマルク。いくら自身が敵わぬ相手とはいえ、到底看過できることではなかった。

「貴様、もう一度言ってみろ…!!」

あの子を救うことの、なかが『くだらない』と言うのだ…!!」

「知ーらねっ!!ボクはキミのことを知らないし、キョーミもない。」

ボクはただ、オモシロオカシク、とびっきりのいたずらを楽しみたいだけなのサ。

なのに、キミが『星のカービィ』を刺激するよーなマネするからいけないんだぜ?」

「何をぐちゃぐちゃと言っている!!不浄なる悪魔よ、『死ぬ』!!」

アウレオルスが激昂と共に、完成している黄金鍊成…この世の理を思うがままに捻じ曲げる術式…を発動させる。

だがしかし、アウレオルスは現在、激しく動揺している。自らの城を一瞬にして飲み込んだ目の前の存在が本当に死ぬかどうかすら懐疑的になりつつあるのだ。

黄金鍊成は、その懐疑すら現実へと変える。

つまり、アウレオルスはどうやってても、目の前の悪魔を退けることができない。

「な、なぜ…!今なお、詠唱は続けているはずだ…!何故死なない、悪魔ア!!」

「…え?今のナニ?キミ、マジで何がしてーのサ?」

「……っ、ぬがあああつ!!『割れる』!『砕ける』っ!『壊れる』っ!!『千切れる』っ

!! 『消えろ』『消えろ』『消えろ』 おおおっ!!!」

半狂乱になって、現実を歪めようとするアウレオルス。

しかし、本人も気付かぬ間に折れた心では、思うように都合のいい現実を浮かべられるはずもなく、マルクの身には何も起きない。

その後も譫言のように、呪詛混じりの言葉を吐き出すアウレオルスに、マルクは「がばっ」と音を立て、大口を開けた。

「じゃ、このまま大人しく負けてちよーよ」

「あ、ああ…、ああああああっ!!」

アウレオルスの絶叫に合わせるように、その口腔から光線が放たれる。

その姿が光に包まれ、見えなくなつて数分。光の奔流が終息すると、そこに立っていたアウレオルスは、黒焦げの姿で崩れ、倒れ伏した。

「おーほっほっほ!!」

いやア、気分ソーカイ!! カービイのジャマが入らねーのはツマンネーけど、これはこれでカイカンなのサ!!」

「……お前は、なんなんだ?」

下品にも笑い声をあげるマルクに、ステイルは構えながら問う。

マルクはそれに対し、悪どい笑みを浮かべた。

「ダレが見ず知らずのヤツに答えるモンかよ！ チャーオーっ!!」

言うのと、その場から天高く飛び上がり、夜の空へと消えていくマルク。

ステイルはソレを見上げ、更なる厄介ごとの予感に舌打ちした。

◆?◆?◆?◆?

その頃、夜の街にて。

ふらふらとおぼつかない足取りで…そもそも足はないが…幽霊のように、あてどなく彷徨う少女。

彼女は唯一持っている槍を杖代わりに、どこへ向かっているかも自覚せず、ただ歩いてきた。

「ああ、親愛なるハイネスさま…」

三魔官シスターズの長という、身に余る光栄を受けたにもかかわらず…。

ザン・パルルティザーヌは今…、情けなくも行き倒れています…っ!!」

彼女の名前は「ザン・パルルティザーヌ」。マジユハルガロアという文明にて、最高司祭の側近…三魔官シスターズの長を務める少女である。

長すぎる名前故に、ここでは「パルル」と省略しておく。

例の如く、新世界から地球に飛ばされた彼女は、逸れてしまった主人…神官ハイネスと、同僚であり、義理の妹であるフラン・キツスとフラン・ルージュを探していた。

が。文明の程度は低くとも、こんな広大な星に、小さな体一つで探し回るなど、到底不可能なことだ。

結果、パルルは今の今まで仲間に出会えず、心労からか、ひどく憔悴していた。

「せめて、カービイの場所さえわかれば……。ヤツさえいれば、少しは希望が見えてくると言うのに……」

カービイさえ見つければ、取り敢えずの希望は見えてくるはず。

先の一件で居住であったマジユハルガロアが崩落し、彼女はポップスターに暮らし始めてから、まだ五年も経っていない。

しかし、周囲の話から、「何かが起こったら取り敢えずカービイを探せ。カービイと一緒なら、どんな状況でもなんとかなる」ということだけは知っていた。

しかし、ここに来て日にちすらわからなくなるくらいには、時間が経っているのも事実。

カービイの足取りは未だ掴めず、更には謎の白衣の連中が襲いかかってくる始末。

パルルは現状を嘆き、何度目かもわからない、深いため息を吐いた。

「ああ……。おなかへったなあ」

ザン・パルルティザーヌの明日は、まだ見えない。

## STAGE : 2 雷牙

「なあーん」

「わにやつ、わにやわにゃ」

「ぼよー!」

「……おつかしーなー……。ウチ、猫なんて飼ってたっけなあ、インデックス?」

昼過ぎに補習から帰宅した当麻は、カービイの頭に乗ってリラックスする猫を見て、半目でインデックスを見やる。

やけに清潔感があるあたり、既に体を洗い、ノミやダニを落としたばかりなのだろう。気持ちよさそうに眠気の波に揺られる猫を指差し、インデックスを問い詰めると。

彼女は悪びれもなく、猫の両脇を抱え、当麻に見せつけた。

「お散歩してたら見つけた捨て猫なんだよ! 名前はスフィンクス!」

もう名前までつけられている。

猫を飼うための設備を整えるような金は、生憎と上条家の悲しい懐事情では存在しない。  
い。

そもそも、食費をカービイのコピー能力に依存しきつてくるくらいには切羽詰まってる

のだ。人間やワドルディたちならとにかく、猫なんて飼う余裕はない。

しかし、捨て猫を元あつた場所に捨ててこい、というのも、インデックスには酷な話だろう。

当麻は「引き取ってくれる人が見つかるまでな」と言い、カービイに迫る。

「……………カービイ、猫の餌って作れる?」

「ぼよ?」

「え?猫って、食べれないものあるの?」

「ポップスターじゃどうかかわらんが、地球の猫は食べたら命に関わるような食べ物が多いんだよ」

「へえ…。ナゴはなんでも食べてたんだけどなあ」

実はと言うと、カービイがコックで生み出すような、『夢のチカラ』が詰まった食物ならば、どんな生物でも食べることができる。

そもそも、命を循環させている夢の泉が生み出す「夢のチカラ」が毒になるようなことなど、ダークマター族のような夢のチカラに相反する存在でなければあり得ないのだ。

無論、そんなことなど微塵も知らない当麻は、カービイにかかる負担…本人からすれば、あつてないようなものが…を思い、申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「カービイが帰るってなったら、ウチは一気に崩壊するなあ……」

「ぷいっ？」

「ああ、気にしなくていい。お前にも帰るべき場所があることはわかってるよ」

「ボクたちだったら、『ともだちの家に遊びに行く』みたいな気持ちで移動できるから、心配はしなくてもいいと思うよ？」

「……………上条さんにクールに決めさせてくれませんかね、エフィリンさん……」

異空間を行き来する穴を自在に作れるエフィリンがいる以上、当麻がセンチメンタルになる必要性は皆無だった。

せつかく格好をつけたのに、見事に挫かれた当麻は、がつくりとうなだれた。

◆? ◆? ◆? ◆?

「…猫を飼うためのあれこれって、結構するんだな。」

カービイのおかげで食費がかからないウチだから良かったものの……

当麻はダイエツトのし過ぎで餓死寸前の財布を手に、「不幸だ……」と嘆く。

その腕にかかる大きめのビニール袋には、猫を飼うために必要な最低限のものが入っていた。

服という概念が微塵もなさそうなカービイたちとは違い、インデックスの身の回りを調えるための出費もバカにならなかつたというのに、その上で猫を飼うなど正気の沙汰



ではない。

そもそも、当麻の住まう学生寮はベットの飼育が禁じられている。バレたらタダでは済まないな、と思いつつ、当麻は荷物持ちを手伝うカービイたちに目を向けた。

「ふいつ、ぽよ、ふいつ♪」

「わにや、わにやっ、わーにやっ♪」

「ゴキゲンだな、お前ら。そんなにあの猫が飼えるのが嬉しいのか？」

当麻の心情など知ってか知らずか、鼻歌を歌いながら、とてとてと歩くカービイたち。いつになくご機嫌なカービイらに問うと、肩に座っていたエフィリンが代弁した。

「どっちかというと、トーマとお出かけしてるのが楽しいみたい。

インデックスがスフィンクスにかかりきりになってるから、退屈してたんだって」

「…ほんと、そういうところはそこらの子供みてーだな、お前ら」

最低でも三十は超えてるらしいが、とてもそうは思えない幼きである。

テンションが上がったのか、小躍りしながら進むカービイたちを見て、苦笑する当麻。と。彼はふと、見覚えのある背中を見つけ、「げっ…」と声を漏らした。

「迂回するぞ、お前ら」

「どうしたの？」

「あそこにいるの、ビリビリ中学生つつつな。絡むと碌な事がねえ」

ビリビリ中学生……もとい、御坂美琴。この学園都市において、数人だけ存在するとい  
う「超能力者」の一人であり、そのトップスリーの末席に座す少女。

「超電磁砲」という異名を冠しており、努力によってエリート街道を突き進む、やる気の  
ない当麻とは縁のなさそうな少女である。

カービィがその少女の後ろ姿を見ていると、ふと、その奥に見覚えがある影を見つ  
つた。

「ぼよおっ……ぼよー」

「お、おい、カービィ!？」

それに見覚えがあると気づいたカービィは、抱えた袋をワドルデイらに投げ渡し、美  
琴の方へと駆けていく。

当麻は「面倒ごとになるだろうな」と思いつつ、カービィの後を追いかけた。

瞬間。目の前の景色が爆ぜ、雷光があたりを駆け巡った。

「ぐおっ……!？」

「ぼよっ!？」

いつも受けている美琴の電撃よりは弱いものの、しかして、彼女が小手先に放つよう  
な、戯れの電撃の威力ではない。

下手をすれば死ぬ。そう思わせる一撃が、黒の影へと迫っていた。

が。影は手に持った長槍を一閃させるだけで、その電撃を霧散させる。「数だけで地頭が悪いな、ゴーグルムスメ。お前らでは私に敵わんと言ってるだろ。」

1日に20回も来られると迷惑だ」

槍を構えた影は、人とよく似ていたが、よくよく見ればカービイたちに近いシルエットだった。せいぜい、一頭身か二頭身かくらいの違いくらいだろう。

幾何学的模様が走る独特な衣装に、切り揃えられた金髪。

佇む少女の名は、雷牙の三魔官「ザン・パルルティザーヌ」。カービイのともだちの一人であった。

「むっ…、誰か巻き込んでしま…」

「ぼよおー！」

「…っー！」

パルルがカービイに視線を向けると、目を見開き、安堵に顔を綻ばせる。

いくら三魔官の長とは言えど、宇宙全体で見れば、まだ年若い少女であるパルル。

彼女は溢れそうになる涙を堪え、駆け寄るカービイに強がって見せた。

「ふ、ふん。ずんぐりピンクめ。私に一直線に向かってくるとは、珍しいじゃないか」

「ぼよ、ぼよおー！」

「そうかそうか。私に再会できたことがそんなに嬉しいか」

パルルと再会を果たしたことに、喜びを跳ね回る事で表現するカービー。

そんな二人のやり取りを前に、当麻はエフィリンに耳打ちする。

「あの、人…でいいのか？知り合いか？」

「うん。名前はザン・パルルティザーヌ。」

マジユハルガロアって星で暮らしてたんだけど、カービーが壊しちやつたからポップスターに引越してきたんだ。

いつもなら、三魔官シスターズって言つて、二人の妹と、主人のハイネスと一緒にいるはずなんだけど…」

「…うん。上条さん、カービーのやらかしには口を出しませんよ、うん」

不可抗力なのだろうが、星さえも破壊する「星のカービー」、恐るべしである。

仲間とはぐれて心細かったのだろうな、と強がるパルルを傍目に、尻餅をついた美琴を見やる。

いつもとは違い、額にゴーグルをかけた出立。その姿に違和感を覚えるものの、当麻は攻撃されないようにという保険もかけて、右手を差し出す。

「事情は後で聞くとして…」

ほら。立てよ、ビリビリ。汚れちまうぞ？」

「…あなたは？」

「おいおい、上条さんみたいな無能力者なんて眼中にもないから忘れましてか？  
これまであんなに絡んできたつてのに、薄情なやつだな」

肩をすくめ、美琴に皮肉を告げる当麻。

しかし、本当に当麻のことを知らないのか、しきりに首を傾げていた。

「おい、どーした『超電磁砲』さんよ？」

「…質問します。あなたは、『御坂美琴』の知人ですか？」

「へ？…いや、知人一つ一か、腐れ縁？」

…いや、腐れ縁ってほど付き合い長いわけでも…、なんつーか、ケンカ友達？」

当麻が返答に悩むも、取り敢えず知人であることは伝わったのだろう。

美琴…否。彼女にそっくりな少女は、同じ顔の澆刺とした美琴とは比べものにならない

いほど、起伏の少ない言葉を並べる。

「結論を述べると、ミサカは『御坂美琴』ではありません」

「はー…。じゃ、双子の妹みたいなもんか」

「…：…そうです、と、ミサカは面倒なので、取り敢えず肯定しておきます」

「複雑な事情があんのはわかったわ」

起伏は少ないが、やけに素直な性格らしい。

やれやれ、と動かない表情筋で首を振り、淡々と述べる姿に苦笑する当麻たち。

と。彼はふと、パルルの方に目をやり、首を傾げた。

「ん？じゃあ、お前はなんで…えっと、パルメザンチーズ…だっけ？」

「ザン・パルルテイザーヌだウニ頭!!」

「ご、ごめんごめん…。で、なんでコイツを狙ったんだ？」

凄まじい剣幕で迫ってきたパルルに軽く頭を下げつつ、少女…便宜上、御坂妹としよう…は、少しばかり眉を顰める。

「どうやら面倒な事情が絡んでいるようだ。」

「あ…、はいはい。上条さんみたいな一学生には言えないアレね。」

「ま、取り敢えず…頼む、見逃してくんね？」

「……不可能です。ミサカには、その生命体の捕獲が命令されています」

「そんなこと言わずに！なんでもするんで、そこんところ、どうか！」

当麻が手を合わせて懇願する様に、困惑する御坂妹。

パルルもまた、何が何やらわかっていないようで、首を傾げていた。

「おい、ウニ頭。何故、見ず知らずの私を庇う？キサマからすれば、私は何の関係もない未知の生命体だぞ？」

「んなこと言われてもなあ…。」

『助けたい』って感情の理由なんぞ、俺でも分かんねーよ」

その言葉にパルルは目を丸くし、御坂妹は首をかしげる。

しばし、数拍の沈黙が走る。それを破ったのは、パルルの笑い声だった。

「ふ、ふふ……。ふはははっ！ははははっ！」

「わ、笑うこたあねーだろ！」

「はは、ははは……っ！いや、すまない……！」

ははは、はは……っ、ふ、ふふっ……。

……キサマはカービィのヤツにそっくりだな」

パルルは一頻り笑うと、左手を差し出す。

右手に槍を持っているあたり、まだ御坂妹を警戒しているのだろう。

無理もないな、と思いつつ、当麻は左手でパルルの手を握った。

「『雷牙の三魔官』であり、その長を務めるザン・パルルティザーヌだ。

ウニ頭、キサマの名を聞いてやろう」

「上条当麻。『上条』でも、『当麻』でもいいぜ」

「トーマ……か。覚えた。よろしく頼む」

その傍で、御坂妹はいじけたように膝を抱え、座り込む。

表情は変わっていないが、何処か不機嫌そうに、アスファルトに「の」の字を書いて

いた。

「……ミサカは完全に居ないものとして扱われてるのでしようか…と、不満を漏らして  
みることにします」

「ああ、ごめんごめん。」

でも、襲つてこないってことは、見逃してもらえたってことでいいのか？」

「…現時点での撤退が推奨されていたため、行動しなかっただけです、と、ミサカは事実  
を述べます」

「そーかい」

当麻が言うと、御坂妹は立ち上がり、「それでは」と頭を下げる。直後に踵を返したあ  
たり、どうやら、パルルのことは諦めてくれたようだ。

ほっ、と胸を撫で下ろしながら、当麻らは去り行く背中を見送った。

「…で、…長いからパルルでいいか？」

「別にいい。メタナイトのヤツや義理の妹二人以外で、フルネームで呼ばれたことなど  
皆無だからな」

「そつか…。か、哀しいな…」

パルルの哀しい告白に、思わず顔を引き攣らせる当麻。

主人もなかなか覚えられないあたり、彼女自身も名前に嫌気が差していそうだな、と  
思いつつ、当麻は問いを続けた。



「…パルルは、どっかアテあるのか？」

「ない。だが、『カービィと一緒に行動すれば大抵のことはなんとかなる』と言うことだけ知っていたから、血眼になってコイツを探していたんだ」

「…なるほどね」

言つて、当麻は暫し考える。

只今の上条家の住人は、10人プラス一匹。既にかんりの大所帯である。しかし、パルルにこのままアテもない旅を強要するのも、後味が悪い。

当麻は軽いため息を吐くと、カービィを見やった。

「…お前が気にしないんだったら、寝床くらいは貸すぜ？」

「本当か!!」

こうしてまた、上条家に居候が増えたのであった。

STAGE : 3  
妹達

「つまんねエよ、オマエ」

ぐしやり。そんな音と共に、目の前の少女の形をした肉塊が潰れる。

これで何人目だっただろうか。既に殺した感触すら薄れゆく中で、学園都市最強の名を冠する少年：『一方通行』は一人ため息を吐く。

無敵の力を手にするため、参加した『絶対能力進化計画』。

それを計算で導き出したスーパーコンピュータ：『樹形図の設計者』は壊れ、使い物にならない状態。結果、殺しても能力が進化するのが曖昧になってしまった。

しかし、彼はもう戻れない場所まで来てしまった。自らの名前の通り、時間を逆に突き進むことなど、誰にもできやしない。

とても健常とは言い難い精神状態を表すように、濁った瞳を背後へと向ける。  
「コレまた派手にやったのサ。鉄クサクて敵わんのサ」

「…またテメエか、道化師」

道化師マルク。少し前から一方通行に接触を凶っている、謎の生命体。

本人曰く、「ここから遠く離れた星、ポップスターに暮らしていた」そうだが、住んで

いた星の名前からの連想が容易いほどに腑抜けたツラである。

数度目の接触に呆れたため息を吐き、一方通行はそこらの瓦礫に腰掛けた。

「…俺はオマエに構ってるほどヒマじゃねエつつつてンだろオが。失せろ」

「オイオイオイオイ、ゴールの見えないチマチマとしたレベル上げにイラついてるガキンチョが、随分とエラソーなくチ利くじやないのサ。」

折角、一発逆転、誰も殺さないハートフルな手でパワーアップする方法を教えてやるーつてシンセツで来たのに」

「その御託は聞き飽きた」

一方通行は言うのと、マルクの顔を掴み、自らの能力の副産物であるベクトルの操作を行う。

神経電流をめちやくちやにして殺すつもりだったが、マルクには意味がなかったのか、変化は訪れなかった。

そもそも、神経という器官があるかすら怪しい種族である。一方通行は「ウザつてエ」と吐き捨て、マルクを放り投げた。

「へエ。そーやつて、ずううううつと自分のココロもコロすツモリなのサ？

いやはや、地球人はみんな揃ってつまんねー生き方しかできねーのサ」

マルクの煽りに、びくり、と足を止める。

神経を逆撫でされた、などという表現では飽き足らない。

根っこが普通の少年であるからこそ、心の底からフツフツと湧き上がる怒りに、一方通行はナイフのような目つきをマルクに向けた。

「クソ道化師。テメエに何がわかる」

「わかるわけねーだろ。ボクはポップスターの住人なんだから」

「殺す」

一方通行は凄まじい速度でマルクに肉迫し、その顔面に蹴りを入れようとする。

が。マルクは突如真つ二つに割れ、その空間にブラックホールを顕現させた。

「っ…!?!」

得体の知れない生物が出したブラックホールに足を突っ込めば、どうなるかわからな  
い。

一方通行は慌てて距離を取り、吸引が収まるまで警戒する。

マルクは真つ二つに割れた体を元に戻すと、ケタケタと笑った。

「オイオイ、ボクはキミを怒らせに来たんじゃないんだぜ？」

寧ろ、キミを『宇宙最強』にしてやろうと思っただから」

マルクの言葉に、一方通行は苛立ちを吐き捨てるように舌打ちする。

甘言には必ず裏がある。

仮にも学園都市最強の名を冠する身である一方通行は、マルクが腹に何かを抱えていることは見破っていた。

そして、その上で誘いに乗る価値があることも。

一方通行はため息を吐きながら、マルクに問いかける。

「…テメエになんのメリットがある？」

「メリットならありまくりなのサ」

——宇宙最強のヒーロー、「星のカービィ」が倒せるつてメリットがね。

今、最悪の悪党二人が手を組もうとしていた。

◆?◆?◆?◆?◆?

「…で、ビリビリの妹さんたちや。

なーんで直したはずの扉がまたぶっ壊れてんのか、なんでそんなに同じ顔がいるのかとか、家主の上条さんに懇切丁寧にみっ…ちりと説明してくれませんか?」

その頃、当麻の家にて。補習から帰宅した当麻は、こめかみに青筋を浮かべ、縛られた御坂妹…否、『妹ら』に迫る。

そこにいるのは、まとめて拘束された、同じ顔をした10人。そのどれもが、先日出会った御坂妹と同じ顔をしていた。

「個体名『パルルルルルーヌ』の捕獲を命じられたからと、ミサカは先日あなたに答えた

回答を繰り返して言ってみます」

「もう一撃喰らいたいようだな」

「個体名『ザン・パルルティザーヌ』の捕獲を命じられたからです…と、目標がキレたらなんだか面倒くさそうなので、ミサカは訂正を試みます」

「一言余計だ」

ぱん、ぱん、とまるでガラの悪い看守のように長槍を左手で振り下ろし、右手に打ち付けるパルル。

名前に関しては相当気にしているようなので、弄らないようにしよう、と思いつつ、当麻は尋問を再開する。

「あ…。まあ、嫌だったら解放するから。扉の弁償代払ってくれるなら、俺も文句言わねーよ」

「わーい、とミサカは見かけによらず寛大な心をもっているウニ頭相手に喜びを露わにします」

「見かけによらずってなんだ、見かけによらずって…」

「ウニ頭は突っ込まないんだ」

インデックスの無垢な鋭い一言に、当麻はガクつ、と脱力する。

カービイたちはいつも通り、難しい話はよくわからないのか、縛られた御坂妹らを心

配そうに見つめていた。

「ぼよ、ぼよっ！」

「……わかった、わかったから。耳元で抗議をするな」

パルルは長槍を数回転させると、逆手に持ったそれを投げる。

それは器用に御坂妹の拘束を引き裂き、当麻の靴を貫いて床に刺さった。

「…拘束は解いてやる。お前たち如き、警戒する必要もあるまい」

「あの、ザン・パルルテイザー又さん？上条さんの靴が消し炭になったんだけど…」

「………すまない」

当麻は「不幸だ…」と嘆き、ボロボロと崩れるだけの炭になってしまった靴を覗き込む。

幸い、古い靴はまだ余っている。明日のうちに新品を購入しておこう、と思いつつ、拘束の解けた御坂妹らを見やる。

「じゃ、事情を説明するなり、出ていくなり好きにしてくれ」

「…いいのですか？」

「カービイたちが研究員に狙われることなんざしょっちゅうだ」

当麻が言うのと、御坂妹らは暫し目を瞑ったのち、「それでは」と頭を下げる。

残ったのは奇しくも、先日パルルを襲った個体だった。…勿論、当麻らにその見分け

がつくはずも無いのだが。

「説明してくれんのか？」

「はい。説明してこの個体を引き渡してくれるかは度外視し、これから何度も押しかけることになるので、一応は説明しておこう…とミサカは必要かどうかもわからない保険をかけることにしました」

「一言余計だな、うん」

隠し事ができない性分なのだろう。

そんなことを思いつつ、当麻は御坂妹の話に耳を傾けた。

御坂妹：『妹達』と呼ばれる存在は、御坂美琴のクローンらしい。

2万もの数に上る彼女らは、美琴と同じように電撃を操る能力者らしいのだが、最高峰に位置する彼女のクローン故か、性能が劣っているらしい。それこそ平均でレベル2、良くて3の基準値をギリギリ超えるかどうかという程度だと言う。

そんな彼女らの現在の目的は、『絶対能力進化計画』の完遂。

学園都市最強を誇る一位：『一方通行』の能力の進化を促し、人の身で神に匹敵する存在へと至らしめる計画である。

学園都市最高峰を誇る『樹形図の設計者』の計算によれば、一方通行が進化するには、最低でも決められたシチュエーションで『超電磁砲』と128回戦闘を行い、同数殺害



しなければならぬ。

しかし、御坂美琴のような能力者を128も用意できるはずもなく。

その代替案として目をつけられたのが、『超電磁砲』の量産計画で生まれた自分たちだったという。

既に半数近く殺されているらしく、計画の進行は順調だった。

が。その実験の途中で、研究者や一方通行、妹達にとつて、予期せぬ発見があった。仲間を探し、放浪していたザン・パルルティザーヌである。

空き地のダンボールハウスを拠点にしていた彼女が、家電をフル稼働させても、一切疲れた様子を見せなかったのを見て、研究員らはその様子をカメラに収めた。

本来であれば捕獲するのが望ましかったのだが、相手は謎の生物。下手に刺激して暴れられては、たまったものではない……という判断だったらしい。

その映像を『樹形図の設計者』で計算している途中に、肝心の衛星が破壊されたという。

なんでも、正体不明の星型の物体が貫通し、砕け散ったのだとか。

求めていた答えが出ず、研究者たちは困惑しながらも、冷静に話し合った。

その結果、貴重なサンプルとして、ザン・パルルティザーヌの捕獲と、目的である絶対能力進化計画を同時に進行することに決めた……というのが、御坂妹がパルルを襲った

経緯であった。

全てを聞き終えた当麻は、怒りを堪えて、震える口を開く。

「…お前らも、ソイツに殺されるのか?」

「はい。来月初めには」

「お前は、怖くねーのかよ?死ぬんだぞ?」

「怖い…という感情は、知識としてならインプットされています。『ミサカたちの人生は、そのためだけにあるものだ』…とも」

「ふっ…ざけんじゃねえぞ!!」

当麻の怒鳴り声に、話の難解さに寝ていたカービイたちが飛び起き、あわあわと慌てる。

インデックスがそれを宥める隣で、エフィリンもまた、険しい表情を浮かべた。

「難しいことはよくわかんなかったけど…。それでも、その計画を止めなきやいけないことはわかった!」

ボクたちも協力するよ、トーマ!」

「無理です。相手は大義名分を得て、治安維持組織からの干渉すら手玉に取るような組織です。

あなたたちが何を言っても聞き入れるつもりはないでしょう」

その一言に、勢いづいて二人が押し黙る。学園都市における治安維持組織はいくつかあるが、その干渉すら受け付けぬと言うことは、抗議は意味を成さないということ。情報の統制も安易だろう、立場のある敵にどう立ち向かうか。そんな思考の沼にハマりかける当麻たち。

それに対し、パルルは淡々と口を開いた。

「トーマ。キサマが『学園都市最強』とやらを叩きのめせばいい話だろうが。バカが思考を拗らせるな」

その毒舌っぷりが当麻を殴りつけ、当麻は「うぐう」と声を漏らす。

しかし、パルルは変わらず毒舌混じりに言葉が続けた。

「『最強』を『無敵』へと変える計画ならば、計画をする有象無象の排除よりも、その『最強』を引き摺り下ろすほうが簡単だ。」

キサマは学園都市において底辺を這いずり回る劣等生なのだろうか？

そんなキサマが最強を倒せば、その称号にケチが付くことは間違いないはずだ」  
「あの、ザン・パルルティザーヌさん？」

事実なんですけど、上条さんにキツくないですか？」

「ん？なんのこゝろだ？」

自覚はないらしい。

人付き合いが苦手そうだな、と思いつつ、当麻は右手を見やる。

あらゆる幻想を否定し、殺す右手。普通に生活する上では、何の変哲もない右手。

この右手があれば、取り敢えず相手を殴れることは間違いないのだ。

「ごちやごちやと難しいことを考えるのをやめ、当麻は拳を握る。

「無謀です。相手は『学園都市最強』。あなたが首を突っ込んで無事で済む保証は…」

「生憎だな。『助けたい』って感情に自分でケチつけて、誰の手も取れない一生なんざ死んでもごめんなんだよ」

御坂妹の制止に、胸を張って答える当麻。

その瞳は真つ直ぐに、御坂妹の目を捉えていた。

「お前みたいに『生まれた意味』とまではいかねーけどさ…」。

誰かを助けるってのは…、そうだな。言うなれば、俺の『生き様』なんだよ。

これを曲げちまつたら、俺はこの先、二度と胸を張って『上条当麻』を名乗れねーんだ」

当麻は言うど、御坂妹の肩を掴んだ。

「だから、頼む。俺に、お前たちを助けさせてくれないか？」

◆?◆?◆?◆?

「……断られちまつたか」

去つていった御坂妹の背中を、廊下から見下ろし、ため息を吐く当麻。しかし、その表情は一切落胆がなく、寧ろ平然としていた。

断られることはわかつていた。ならば、勝手に助けるだけだ。

当麻が決意を新たに拳を握り締めていると、パルルが隣に立つ。

「どうする？ 足で探そうにも、この都市は広大だぞ？」

「そこなんだよなあ……。カービィのワープスターで空飛んで探すとか……」

余談だが、ワープスターが当麻の右手に触れても機能を失わないのは、とうの昔に確認済みである。

どこを探せばいいのかはわからないが、空から見下ろした方が、見つかる可能性は高いだろう。

そんなことを思っていると。

激しい爆音と共に、どこかの施設の残骸が舞うのが見えた。

## STAGE : 4 マルク

「……ぶつ壊れたコンピュータに頼るしか能のなかったボンクラどもを潰したんだ。

マルク。そろそろ、お前の『計画』の全貌を教えてもらおうか」

研究所を潰し終えた一方通行は、奔走する治安維持組織を見下ろし、隣に佇むマルクへと目を向ける。

マルクは何処からか顕現させたボールに乗り、玉乗りをしながら答えた。

「んなタイソーなモンじゃねーのサ。

宇宙の何処かを彷徨っているとと言われる、あらゆる願いを叶える機械仕掛けの大彗星……『ギャラクティック・ノヴァ』。

究極の願望機であるソイツを呼び出すのサ」

ギャラクティック・ノヴァ。ハルカンドラより生み出された、あらゆる願いを叶える機械の大彗星。

マルクは一方通行に隠しているが、彼の悪巧みを阻止するべく、奇跡を起こしたカービイによって、木っ端微塵に粉碎された過去がある。

しかし、ギャラクティック・ノヴァには、破壊されても部品さえ残っていれば、次の

召喚時に復活するという機能がある。

呼び出すだけで、望みの力が手に入る。

あらゆる探求の全否定にも繋がる願望機。おとぎ話に出てくる、世界を根本からひっくり返してしまいたいような理不尽のからくり。

一方通行は足元が地盤ごと崩れたような感覚に、自嘲気味に笑みを浮かべた。

「本来であれば、各惑星にある『夢の泉』から力を繋げ、『ミルキーロード』を作つて呼び出すという手間がかかるんだケド…。

ギヤラクティック・ノヴァが感知しているのは、『ミルキーロード』の連鎖反応から溢れる『莫大な夢のチカラ』なのサ。

つまり、キミがベクトル操作で『夢のチカラ』を操れるようになれば、簡単にギヤラクティック・ノヴァを呼び出せる…と、言うワケなのサ」

「…嘘だったら承知しねエぞ?」

要するに、「夢のチカラ」と呼ばれるエネルギーのコントロールさえ出来れば、ギヤラクティック・ノヴァを呼び出せるらしい。

もしかすれば、無敵の力を手に入れるどころか、自分の過去…いや、世界すらも改竄できるかもしれない。

しかし、ソレを呼び出す以上、隣に立つマルクにだけは、心を許してはならない。

一方通行はマルクを警戒しながらも、彼に詰め寄る。

「生憎だがなア、俺ア『夢のチカラ』ってモンの法則を知らねエ。

その願望機を呼び出すどころか、夢のチカラを操ることもできねエよ」

「そこんトコは心配しなくてもダイジヨープなのサ。

今、この都市にやあ、夢のチカラの塊みてーなヤツらがワラワラいるのサ」

マルクは言うのと、コンビニで売り子をするワドルデイを見やった。

◆?◆?◆?◆?

「…実験の主要メンバーが重傷を負い、肝心の一方通行は暴走。

捕獲作戦が実施されるものの、側にいる『マルク』と名乗る謎の生命体が起こす、ブ

ラックホールを始めとした能力の数々に敗れ…。

結果、現時点で用途のなくなったミサカたちは、いくつかのグループに分かれ、各施

設をたらい回しにされている…と言うわけです」

御坂妹は言うのと、カービィが作り出したコーヒーを啜り、息を吐く。

要点をまとめると、マルクという存在によって一方通行が暴走したせいで、実験がストツプしてしまっているらしい。

怪我人が出ている以上、喜んでいいのかは分からないが、少なくとも現時点においては、御坂妹らの危機は去ったと考えていいだろう。



「現時点で……つてことは、結局は実験が再開する可能性があるってこつたるか？」

「はい。妹達にも、一方通行の捕獲を優先事項として設定されていますが……正直に言う  
と、半分くらいヤケ気味に決定したのではないかとミサカは邪推します。

しかし、マルクによってデータも着実に一つずつ潰されているようで……」

「んー……。そのマルクつての……、カービイたちはなにか知ってるか？」

今の今まで研究に従順だった……それも、樹形図の設計者という、スーパーコンピュー  
タが導き出した、違えようのない結論に沿って動いていた一方通行が、反旗を翻した。

一方通行を唆した「マルク」という存在は、確実にカービイらの関係者だろう。

そんな推論から当麻が問うと、カービイは聞き覚えのある名前が出たことに笑みを浮  
かべ、ぴよん、と跳ねた。

「ぼよー」

「ポップスターの太陽と月を大喧嘩させた犯人つて聞いたことあるよ。」

ボクもちよつと話してみたけど……、なんていうか、掴みどころがない感じだった」  
「宇宙じゃ太陽と月も喧嘩するんだなー、うん……。そっかー……」

……上条さん理解が追いつかないんだけど、どゆこと？」

「ポップスターだと、太陽も月もれつきとした生き物なんだよ」

ポップスターでは、あらゆる常識が根本から通用しないらしい。

カルチャーショックという単語では収まり切らない衝撃に慣れ切った当麻は、遠い目で「そっかー」と返す。

太陽と月の大喧嘩。もし、この太陽系で起きれば、大惨事どころではない騒ぎである。その解決にカービーが奔走したことは、先日相手にしたダークリム口の警戒っぷりから、予想に難くない。

カービーはその自覚がないのか、皆の視線に首を傾げていた。

「マルクは性格はアレだが、カービーと渡り合えるほどの実力者だ。

相手取れば、このずんぐりピンクは兎に角、私たちはタダでは済まないだろう。

…しかし、ヤツの真の恐ろしさは、その狡猾さにある」

「…強い上に悪知恵が働くってことか？」

「ああ。その認識であっている。

ヤツのことだ。『一方通行すらも利用されている』と考えた方がいい。ヤツの目論みにとって、なんらかの重要な利用価値があることは間違いないだろう。

その性格上、ロクでもないことは確実。更に言えば、こうして言葉を交わしている間にも、ソレは成就に向かっている」

もし、現時点で妨害しても、マルクならば、それすらも利用することだろう。

それ故に、マルクの計画を潰すのであれば、成就寸前に全てを台無しにする他ない。

カービイはかつて、ポップスターを支配しようとかかるギャラクティック・ノヴァの動力部を破壊し、機能を停止させた。

そこまでやって、漸くマルク本人を引き摺り出すことができる。

そのことをエフィリンとパルルが語ると、当麻は笑みを浮かべた。

「つまり、最強をぶん殴りやあいいつてのは変わらないわけか」

「そういうことだ」

先日となんら変わらないシンブルな結論に、御坂妹は鉄仮面のまま口を開く。

「先日からも言ってますが、無謀です。」

と、中身がすっからかんなウニに無駄な忠告をミサカは試みます」

「とうま、補習は大丈夫なの？」

「上条さんくらしいのスーパー劣等生にもなると、補習に参加してもしなくても成績アツ

プなどという奇跡は起きません!!」

「その悲しい告白はどうなの？」

「コイツら人の話を聞いてねえ…と、ミサカは苛立ちをあらわにします」

相手は『超電磁砲』を三桁近い数殺すことができる時まで言われた実力者。

その強さを実感している御坂妹からすれば、当麻の挑戦は無謀にしか思えなかつた。

あいも変わらず、打倒一方通行を掲げる当麻と、それに賛同して盛り上がるカービイ

らに、御坂妹は呆れたため息を吐いた。

「ぼよっ！ぼよよ、ぼよおっ！」

そんな御坂妹の隣を通り抜け、カービィが玄関の扉を開き、空へ向かって叫ぶ。

すると、宇宙で暇を潰していたのであろう、ワープスターが降り立ち、カービィの目の前で止まった。

「ぼよっ！」

「カービィは探す気満々みたいだな」

「ぼよ、ぼおよ！」

「…コイツ、ただマルクに会いたいだけみたいだぞ」

「おいおい、いいのかよ…。敵なんだろう？」

「まあ、これがカービィだから」

ともだちであつてもなくても、どこまでも疑うことを知らない、純真無垢の化身。

事実、カービィを欺こうと企てたマルクとマホロアは、こと「欺く」という一点に於いては、看破させることはなかった。

それもこれも、カービィらが想像を絶する楽観主義故に、人を疑うことを知らないからなのだ。

カービィはワープスターに飛び乗ると、当麻を手招きする。

当麻は慣れたように一角を掴み、エフィリンがその肩に掴まる。と。ソレを真似たのか、御坂妹も同じようにワープスターに乗った。

「あれ？ミサカも行くの？」

「先程言った通り、ミサカは優先事項として一方通行の捕獲を命じられています。

逃亡を続ける一方通行を捕獲するためには、あなたたちと行動を共にした方が遭遇確率が高いと、ミサカは判断しました」

「お前つ……まだ死ぬ気なのかよ!!」

当麻が怒鳴りつけるも、御坂妹はその鉄仮面を剥がすことなく、首を傾げる。

これは、何を言っても聞かない。

そのことを悟った当麻は、わしやわしやと頭を掻きむしった。

「…あくまでお前が死にたがるってなら、俺はお前が『生きたい』って思えるまで、お前を助けるからな」

「そうですか」

淡白なやりとりを最後に、ワープスターがなんとも軽快な音を立てながら、空へと飛び立っていった。

◆?◆?◆?◆?

「…で。なぜミサカたちは、アクセサリーショップにいるのでしょうか？」

数分後。

先程の緊迫感は何処へやら、取ってつけたような煌びやかさが支配する空間に、御坂妹のなんとも言えない声が響く。

その表情は戸惑っているのか、それとも苛立っているのか。あいも変わらず一ミリも変化しない表情筋に苦笑しながら、当麻はアクセサリーを物色した。

「もしお前の姉妹が出てきたら、見分けつかねーだろ。」

上条さんがなければの生活費を捻出して買ってあげますから、好きなものを選びな」

「…別にいいです。」

「ミサカにそういつた嗜好品を嗜む趣味は…」

「ぷいー」

「あつ、こちらカービィ！それはおもちゃじゃないからな!？」

「…人の話を聞かない習性でもあるのでしょうか、このウニは…と、ミサカは露骨に呆れてみます」

御坂妹のためにアクセサリーを選んでいる、という建前すらも忘れ、はしゃぐカービィを宥める当麻。

そういつた嗜好品を嗜む心が成長していない御坂妹は、訝しげに目についたアクセサリーを手取る。

と。カービイがそれに向かつて、とてととと小さな歩幅で歩み寄った。  
「ぼよっー！」

「……これは？」

カービイが差し出したのは、蝶の形をした、オレンジ色の髪飾り。

御坂妹からすれば、少し幼稚なものに思えたが、何故か目が離せず、髪飾りを手に取る。

と。そこへ、どこからか入ってきたのだろう、ひらひらと橙の羽を持つ蝶が降り、御坂妹の指先にとまった。

「ソレにするのか？」

「……そうですね。これにしておきます。」

ミサカはそこまで、装飾品に執着がありませんので」

「あいよ。えーつと…、…600円…。」

け、結構痛い…。」

600円という金額は、上条家にとってはかなりの大金である。

この一言だけでも、上条家の逼迫した懐事情がうかがえることだろう。

当麻はがつくりと項垂れながらも、受け取った蝶のアクセサリーをカウンターへと持っていく。

アクセサリーの受け渡しを経てもなお、蝶は掌にとまったままだった。



## STAGE : 5 悪党

「ウホホツ、ウホツ、ウホ」

「ああ、その石で頼むダス。」

「って、アルマパラパ！勝手に備品を持ってかないとあれほど言ったダス!!」

観光客が屯する海水浴場から少し離れた、小さな島にある洞穴の中。

メタナイト直属の部下：『メタナイト』が一人、メイスナイトの呆れが混じった怒号が、巨大なアルマジロの背中に響く。

ビクツ、とアルマジロ：踊転甲獣アルマパラパは肩を震わせ、かしゃん、と機械の塊を落とした。

「機械じゃなかったら使っていいダスから！」

ちよつとは大人しくしてて欲しいダス！」

「グー……」

「そんな声出してもダメダス！」

「騒がしいぞ、メイスナイト」

メイスナイトがアルマパラパを叱りつけていると、毅然とした声が響く。

彼がそちらを見ると、鉄仮面に蝙蝠のような翼を広げた騎士が、陽光を背に立っていた。

その光景に面食らいながらも、メイスナイトは首を垂れる。

「メタナイトさま、おかえりになられたんだスね」

その名は、孤高の騎士『メタナイト』。

メタナイトは翼に付着した海水を払うように、パタパタと軽く羽ばたかせると、洞窟の奥へと進んでいく。

メイスナイトはアルマパラパが落とした機械を回収し、慌ててメタナイトの後に続いた。

「なにか収穫はあったダスか？」

「ああ……。ただ、事が事だ。報告は全員を集めてからにする。

船員ワドルデイ！現在の復旧状況は？」

メタナイトが声を張り上げると、水平帽を被ったワドルデイがととと駆け寄り、敬礼した。

「はいっ！ピースト軍団の協力で現在、85%が修復してます！

しかし、フライトまでにあと三週間はかかる見込みです！」

「当初の予定より、随分と進んだな……」

感謝する、ビースト軍団諸君。

「こちらレオンガルフ、キャロライン兩名が一刻も早く見つかるよう、善処する」  
「ウホ」

感謝するほどのことではない、と言わんばかりに軽く頭を下げ、はにかむゴリラ：剛腕獣ゴルムンバ。

メタナイトは同じように頭を軽く下げると、作業するワドルデイやメタナイト、更にはビースト軍団らに向け、「集合だ！」と声を張り上げる。

すると、彼らは一斉に作業を中断し、数秒足らずで等間隔でメタナイトの前に並んだ。凄まじい統率力である。

本来、敵であつたはずのビースト軍団さえもまとめ上げているあたり、そのカリスマ性がよくわかることだろう。

メタナイトは咳払いをすると、仮面の下にある口を開いた。

「まずは、ここにいる全員に感謝を。諸君らのお陰で、我らが船：『戦艦ハルバード』の復旧率が八割を超えたと聞いた。

肝心の私が留守にしている間、不満も多く出たことだろう。

その謝罪も含めて、皆に伝えよう。すまなかつた。ありがとう、と」

「ウホホッ、ウホウホッ！」

「水臭いぞ、オレたちの仲だろう」と言いたげに、白い歯を見せて笑みを浮かべるグルルムンバ。

きちんと歯磨きをしているようで、清潔感のある爽やかな笑顔である。

メタナイトは頭を上げると、声を張った。

「では、調査の報告に入る！」

『星のカービィ』の居場所が判明した！」

星のカービィ。この場にいる全員の宿敵でもあり、ともだちでもある、無敵のヒーロー。

彼さえいれば、どんな状況でもなんとかなってしまおう、理不尽の塊。

そんな頼もしいヒーローの所在がわかったことで、皆はざわつき、嬉々とした声を漏らす。が、メタナイトが少しばかり動くと、急激に静まった。

全員が静まって数秒。メタナイトは言葉を続ける。

「しかしだ！悪い知らせとして、現在、かの悪名高い『マルク』が、カービィ打倒のために動いていることが判明した！」

私はこれを止めるべく、カービィのいる『学園都市』に乗り込む！」

「それはメタナイトさま単独で、ということでしょうか!？」

船員ワドルデイが問いかけると、メタナイトは深く頷く。

ここにいるメンバーはメタナイトを除き、図体がデカいか、カービイの吸い込みで呆気なくやられるような戦力ばかりだ。

はつきり言つて、学園都市に踏み込めば3秒で捕まるだろう。

「かの都市の警備は嚴重だ！」

皆には迷惑をかけるが、どうか私の単独行動を受け入れて欲しい!!」

その言葉に、反対する者はいなかった。

◆?◆?◆?◆?◆?

「わにゃー! わにゃわにゃ、わにゃーっ!」

「わにゃわにゃうっせエ」

「わにゃーっ!」

一方通行の手によって、まるでスクイーズのように伸び縮みするワドルデイ。

いくら夢の泉の加護で死なないとはいえ、苦痛はある。囚われたワドルデイたちは、同胞が悶えるのを目の当たりにして、ガタガタと寄り添って震えている。

彼らから見れば、一方通行は悪魔以外の何者でもない。

カービイに吸い込まれた方が遥かにマシだ、などと思いつつ、残ったワドルデイたちは手に傘を持ってわずかな反抗心を露わにする。

が。フレンズハートの効力が働いていないワドルデイでは、焼石に水どころではない

だろう。

一方通行はその態度に舌打ちしながら、手に持った傘をベコベコに折って見せる。

「わにやつ…」

「わにゃあつ!! わにゃ、わにゃわにゃ、わーにやつ! わにやつ!!」

「わにゃあああつ!」

「うっせエぞテメエらア!!」

落ち込んだり、怒ったり、泣き喚いたりときさまざまな反応を見せるワドルデイらに怒号を飛ばし、黙らせる一方通行。

それぞれが傘の前で涙を流すあたり、相当思い入れがあつたのだろう。

伸ばされているワドルデイもまた、苦しそうにしながらも傘を見て泣いていた。

その態度に更に苛ついた一方通行は、まとめてベクトル操作でワドルデイらを締め上げる。

「で、どうなのサ? 夢のチカラの輪郭くらいは掴めてきたのサ?」

「ああ。シンプルだが、『存在が想定されるすべての次元』を把握してようやく操れるって点だけが厄介だったな」

もう少し。もう少しで、究極の願望機を呼び出すことができる。

操るところか、こうして伸ばして縮ませるだけでも意識を持つていかれそんな感覚に

陥る中。

空から降りてきた星型の物体が、勢いよく地面に突き刺さった。

ちかつ、と、やけにポップな音を立てて霧散する星に、降り立つ数人の人影。

その影は着地するや否や、右手を振りかぶり、一方通行へと駆け出す。

バカだな、と思いつつ、一方通行が棒立ちしていると。

何かが壊れる音と共に、その拳が顔面に突き刺さった。

「わにゃー！」

「わにゃわにゃー！」

「危ないから離れてろ」

助け出されたワドルディらが、その人影に駆け寄り、各々頭を下げる。

それに対し、影：上条当麻は一言だけ告げ、新たに出現したワープスターを指すように一瞥した。

「…あり得ません…。一方通行には、あらゆる攻撃が通用しないはずでは…？」

顔を殴られて倒れ伏す一方通行の前に、御坂妹が愕然とその光景を見つめる。

ワープスターが飛び立ったのを確認すると、カービイがともだちと認識していたはずのマルクを睨め付けた。

「ハイハイヘーイ、しばらくブリなのサ、星のカービイ。」

随分と心強いオトモダチが出来たみたいで、羨ましい限りなのサ」

「……ぼよっ」

カービィはマルクの言葉を一蹴するように、姿勢を低くする。

マルクはそれにおどけながらも、歪な形の翼を広げ、ケタケタと笑った。

「コトバはいらないってか!？」

そんなら、ボクたちとトコトンあそんでちよーよ!!」

がぼっ、と口腔が開き、光条が空気を穿つ。

カービィは咄嗟に、放たれた光を軽く横に飛んで避ける。

が、いつのまにか起きていた一方通行の蹴りが、その背中を捉えた。

「ぶゃっ!？」

びたん、とビルの壁に打ち付けられ、へばりつくカービィ。

そこへ追い打ちをかけるように、一方通行の足がカービィの後頭部に押しつけられる。

「コイツが『星のカービィ』かア。

随分と弱つちそオな見た目だなア」

「油断しない方がいいのサ。ソイツはどんな状況下にあつても、必ず奇跡を起こす。

運命に愛されたヒーローなのサ」



「そオかい。そりやア…ムカつくことこの上ねエなアアッ!!」

カービイの背に強い蹴りが放たれる。

カービイは「むぎゆう」と苦痛にうめく程度で済んだが、へばりついていたビルには亀裂が走り、倒壊を始める。

一方通行がそれに笑みを浮かべていると、当麻の右拳が、今度は顎を捉えた。

が。一方通行はベクトル操作で、当麻から距離をとり、訝しげに眉を顰める。

「カービイ、大丈夫か?」

「ぶ…、ぼよっ!」

当麻が手を差し伸べると、カービイはその手を掴み、元氣よく飛び上がる。

一方通行とマルクが狙っているのは、カービイただ一人。

どんな狙いがあるのかはわからないが、当麻が殴り倒すべき相手は変わらない。

当麻は拳を握り締めると、一方通行へと駆け出した。

しかし、一方通行もバカではない。寧ろ、当麻とは比べ物にならないほどに頭脳明晰であり、その脳細胞の一片に至るまで、当麻を上回っている。

先程の打撃で、当麻の右腕相手に反射が機能しないことを悟っていた彼は、地面を隆起させた。

「オイオイオイオイ、宇宙人相手にヒーロー気取りですかア?」

雑魚の考えることア、俺にやアよくわかンねエ…なアっ!!」

一方通行が転がっていた空き缶を蹴り、弾丸のような速度で当麻に飛ばす。当麻は仰け反ってソレを避け、踊るように身を翻した。

「カービィ!このクソ野郎は俺がぶん殴る!いいな?」

「ぼよっ!」

カービィに向かって叫ぶと共に、ゴミやら礫やらで構成された弾幕を張る一方通行へと向かう当麻。

しかし、ソレを阻むべく、マルクが彼の前へと躍り出た。

「バカだねえ…!サスガにメタ能力持つてるヤツを好きにさせるワケがないのサ!!」

マルクは言うど、四つの刃:「シューターカッター」を放つ。

その刃先が、当麻のカッターシャツを裂こうとした、まさにその時。

「カービィ!」

「ぼよっ!」

いつのまにやら、当麻の背に隠れて走っていたカービィが飛び出したのは。カービィは待つてましたと言わんばかりに、その刃をまとめて吸い込む。

瞬間。カービィが光に包まれた。

光が収まると、カービィは金属質のトサカが特徴的な帽子を深々と被り、そこに佇ん

でいた。

ブーメランで全てを切り裂く、その名もコピー能力『カッター』。

カービィは即座に帽子のトサカ部分を外すと、それを勢いよくマルクに投げつけた。

「ツト、あつぶね…ぶつ!？」

マルクは咄嗟にソレを避けるも、帰ってきたブーメランに直撃し、軽く吹っ飛ばす。

と。その先にエフィリンが開いた異空間への扉が開き、マルクが放り込まれた。

カービィも同じようにそこへ飛び込むと、当麻へと目を向ける。

「そっち頼むー！」

「ぼよっー！」

これで分断は済んだ。

エフィリンは入り口を塞ぐと、御坂妹が待機する物陰へと退避する。

一方通行とマルクを同時に相手取れば、厄介なことこの上ないのは目に見えていた。

エフィリンのファインプレーにより、二人はどうやっても協力できない状況になっ

た。

あとは、当麻とカービィが悪党二人を倒すだけだ。

当麻はこの状況を作り出したエフィリンに感謝の言葉を述べようとして、その口を閉

じる。

今は、目の前の悪党を殴ることに集中しなければならぬ。  
彼はなんとか弾幕をくぐり抜け、一方通行の元へと辿り着く。

「らあっ!!」

当麻は裂帛の気合いと共に、引き絞った右拳をその頬へと放つ。

一方通行はうめき声をあげる暇もなく、後方へとバウンドして吹っ飛んでいく。  
倒れ伏した最強を見下ろしながら、最弱は挑発してみせた。

「おい、三下。テメエが酔ってる『最強』の称号、今ここで捨ててもらおうか…!!」  
二組のヒーローと悪党の戦いが、幕を開けた。

## BOSS 審判を下す極蝶 前編

「うーむ……。見つからんなあ」

えっちら、おっちら、となんとも覇気のない掛け声で夜空に浮かぶ雲。

その上には、やけに丸々とした体軀のペンギンが胡座をかき、その隣で中学生ほどの少女が寝息を立てていた。

ペンギン……デデデ大王は、眼下に広がる街を見下ろしながら、一人ぼやく。

雲……クラツコも同じように、下にある街並みへと目を向けながら、弱音を吐いた。

「大王さま、もう遅いですし、帰りましょうよ。サテンちゃんもオネムだし」

「くかー……はっ!?ね、寝てない!寝てないよ!?寝てない……寝てな……くかー……」

少女……佐天涙子は、ぼつ、と顔を上げてかぶりを振るも、即座に眠気が襲ったらしく、再びうつら、うつら、と首を遊ばせる。

まだ夕飯どころか、入浴すらも済ませていないというのに、余程眠たいらしい。

少女とは思えないいびきをかく佐天に、デデデ大王らは眉を顰め、起こそうと奮闘する。

「おいサテン、お前が寝るな!!」

お前がうっかり逃した『アレ』を探してるんだろが!! 起きろ! 起きろっ! おーきーろーっ!!」

「…ふっっ」

デデデ大王が搜索しているのは、彼らの部下ともう一つ、特大級の爆弾であった。ある騒動の産物を取り込み、学園都市の一角を焦土に変えた、黄泉からの審判者。

デデデ大王と佐天の奮闘によりなんとか打倒し、彼らは危険性を憂慮して、その化身とも呼べる存在を虫籠に捕獲した。

が。今朝方、佐天がボールを踏んづけてすっ転び、虫籠を壊したため、中身に逃げられてしまい。

結果、デデデ大王らは丸一日学園都市を駆けずり回り、『中身』を搜索する羽目になったのだ。

その疲労が溜まったデデデ大王は、こめかみに青筋を浮かべながら、寝こける佐天をがくがくと揺らす。

それに対し、クラッコは呆れたようにため息をついた。

「考えすぎじゃないですか、大王さま。」

前に倒したAIIMバースト並みの思念の強さじゃなきや、まず覚醒はしないって大王さまが言ったんでしょ?」

「考えてみる！オレさまたちがここに飛ばされてる時点で、なにかヤバいものが裏にいるのは確定してるだろ!!」

「あつ…。あーつ…。あー…」

その可能性に至ったクラッコは、遠い目でデデデ大王から目を逸らす。

デデデ大王は「まったく…」と呆れつつ、ふと、ある場所を見下ろすと。

「……あー…?!?!」

瞬間、デデデ大王は目をひん剥き、視界に入ったソレを指差して叫ぶ。

クラッコは何が何やらわからず、わたわたと目を動かした。

「ど、どーしたんです?」

「クラッコ、あそこ見ろ!!」

「……あー…?!?!」

デデデ大王が指す方向に視線を向けると、クラッコもまた同じように叫ぶ。

そこには、探し求めたモノと共に、接点が見当たらない友人二人が、何かを覗いているのが見えた。

「くかー…」

尚、佐天は完全に寝落ちしていた。

◆? ◆? ◆? ◆?

その頃。上条当麻と一方通行の戦いは、佳境に差し迫っていた。

能力の開発にかまけて、全くと言っていいほどに体を鍛えず、摂生もしていなかった一方通行。そんな彼が、ロクに喧嘩などするはずもなく。

結果、肉つきもなく、ほっそりとした体で食らう打撃の数々にダメージが蓄積され、フラフラになっていた。

当麻は数発、投擲を体に喰らった程度で、普段絡んでくる不良たちの一撃よりかは遙かに軽い。

「どうした、最強。さつきまでの余裕が消えてるぞ」

最強。無敵の力を手に入れると謳っていた自分が、幾度となく地に叩き伏せられた。

一方通行の自尊心は、既にズタボロだった。

訳の分からない宇宙人を助けようとしたバカを相手にした、と言う認識を改め、心底苛立ちを込めて当麻を睨め付ける。

目の前にいる人間は、この都市においては最底辺の劣等生だろう。

しかし、最強の能力を持つ一方通行にとっては、不倶戴天の天敵であった。

「ツッ……あの、ピンク玉ア……!!」

そもそもの話、一方通行がここまで苦戦を強いられているのは、とある理由がある。

能力の本質である解析能力が、マホリアをもつてして「存在自体が意味不明」などと



言われるカービィに触れたことで著しくエラーを吐いているのだ。

だからこそ、細かな操作に集中力を割かなければならず、その間に当麻に殴られる…というのを繰り返していた。

本来であれば、風力操作によりプラズマを形成してぶつけるつもりでいたのだ。

「…いや、待てよ。くかつ、かかつ…」

と。フラつく頭に、なにやらインスピレーションが走ったのだろうか。

一方通行は不敵な笑みを浮かべ、手を掲げる。

当麻が殴りにかかろうとした、まさにその時だった。

「や、やめて!!そんなに無作為に夢のチカラを集めたら、『悪夢』が出ちゃう!!」

エフィリンの焦った声が響いたのは。

一方通行が操っているのは、夢のチカラ。あらゆる不可能を可能へと変える、まさしく万能のエネルギー。

しかし、そのチカラにはたった一つだけ、大きな欠点があった。

『悪夢』さえも呼び寄せてしまうという、あまりにも大きすぎる欠点だ。

「悪夢ウ…う…くかつ、かかつ…！俺が呼ぶのはんなモンじゃねえよ…！」

来い…！俺の願いを叶えろオ!!究極の願望機『ギヤラクティック・ノヴァ』!!」

一方通行が叫ぶと共に、夢のチカラが歪なほどに膨れ上がっていく。

ここで、一つの疑問が浮上することだろう。彼が操っている夢のチカラは、一体全体どこから生まれたものなのか。

答えは単純。一方通行の抱く、『絶対的な力への渴望』から生まれているのだ。

そのエネルギーの総量は、こうしてたじろぐ間にも増えていく。

臆て、集った夢のチカラに呼応してか、空が歪むのが視認できる。

当麻らがそれに絶句していると。

いつの間にやら出現していた異空間に繋がる穴から、ズタボロになったマルクがバウンドして転がった。

「くか、かかかっ……邪魔者の退治、苦勞オ、星のカービィ……!!」

「ぼよ!?!」

マルクを打ち倒したカービィは、不敵に笑う一方通行を前に当麻らと同じように狼狽える。

一方通行を恐れたのではない。膨れ上がる夢のチカラの危険性を、なんとなく察してしまったのだ。

皆が目を白黒させていると。マルクもまた、不敵に笑い、集まる夢のチカラへと近づく。

「クク、ククク……。こちらこそ、ゴクロウさまなのサ……。バカみたいに夢のチカラを集め

てくれて」

「あア……？」

一方通行が何かを言う暇もなく、マルクは凄まじい速度で御坂妹へと迫り、彼女を蹴り飛ばす。

何が起こったかわからず、御坂妹は目を白黒させながら、夢のチカラの塊へと突っ込んだ。

「——あつ」

どぶん、とまるで液体に突っ込むような音を立て、その姿が消える。

当麻らはソレを目の当たりにして、マルクを睨め付けた。

「……マルク……！ テメエ……！！」

「クク、ククク……」

一方通行、キミは気づけなかっただろうけど……。ボクの言葉には、ある決定的なウソが含まれていたのサ……」

マルクはケタケタと笑い、紅に染まる夢のチカラの塊へと目を向ける。

その中心には、当麻が買い与えた髪飾りにソックリの蝶が佇んでいた。

「ギョラクティック・ノヴァは、莫大な夢のチカラに反応するワケじゃない。それはあくまで、召喚の衝撃のクッション材なのサ。」

ホントはなあ…、『ミルキーロードが繋がった特殊信号』によって呼び出されるのサ…

！」

「……は？」

ずあああ、と音を立てて、蝶にエネルギーが集中する。

そんな中、茫然自失となった一方通行に、マルクが嘲笑を浮かべた。

「つウ、まア、リイ…。キミがしてたコトは、マーツタクのムダだったってワケなのサア

!!

ひやひや、あひやひや、あひやひやひやひやひやひやひや!!!」

ゲラゲラと笑うマルクをよそに、審判を下す者はこの場に姿を現す。

ふあつ、と羽ばたくような音と共に、光が霧散すると。

そこには、カービィによく似た体躯の、紅の騎士が佇んでいた。

「この際だから、ゼンブ教えてやるのサ。

ボクがホントーに狙ってたのは、『バルフレイナイト』の降臨!

ハナツからギヤラクティック・ノヴァを呼び寄せる気なんてサラサラ無かったんだよ

バアアアアアーカッ!!!」

瞬間。嘲笑うマルクの体に、ぱりっ、と雷が走る。

皆がなんだ、と思った矢先。凄まじいまでの雷撃が、マルクを焦がした。

「がはっ……」

ボロ雑巾のようになったマルクは、口腔から黒煙を吐き、その場に倒れ伏す。

騎士……バルフレイナイトはソレを一瞥すると、紅の剣を手に、地面へと降り立った。

「ば、バルフレイ……、ナイト……?」

「詳しいことは、ボクたちも知らない……」

でも、確実に言えることは……、アレは、ボクたちの敵だよ……!」

夢啜る極蝶、バルフレイナイト。彼が啜るのは、共に吸収した御坂妹『たち』の夢。

弄ばれ、ゴミのように吐き捨てられた生命の叫びを聞き届けた審判者は、ある一角に目を向けると、天高く飛び上がる。

当麻らがソレを止めようと駆け寄った時には、既に遅く。

その方角に、バルフレイナイトが放った、雷炎纏う斬撃が直撃した。

バルフレイナイトはその先にて起きる悲劇に目もくれず、ゆつくりと彼らの前に降り立ち、剣を構える。

と。完全に踊らされていた一方通行が、凄まじい形相でソレに迫った。

「……っ、がアアアアアっ!!」

が。悲しきかな。

『存在するはずのない存在』が放つ一撃に、ベクトルなどという物理法則など、存在する

はずもなく。

バルフレイナイトは一方通行の体を切り裂いた。

「……あ？」

一方通行は斬られた感覚がよくわからなかったのか、熱を感じた腹部を見遣り、目を見開く。

そこからは、とめどなく血が溢れ、焼け付くような痛みがじんわりと広がっていった。その痛みと、先ほどの消耗に耐えきれず、崩れ落ちる一方通行。

バルフレイはまるで、通学路でも歩くかのように、一方通行を一瞥することもなく通り過ぎた。

当麻らはそれに目を見開くも、即座にあることに気づく。

「……御坂妹は……、御坂妹はどうなったんだよ!？」

「吸収されちゃった、と思う。」

少なくとも、アレを倒さない限りは、ミサカ妹は解放されない」

熱波と共に、ゆっくりと歩みを進めるバルフレイナイトに、ごくり、と唾を飲み込む当麻。

ダークリムロなど、比ではない。

相手は一切の声を発しないというのに、生命の叫びを叩きつけられるような感覚が、

当麻を襲う。

今、黄泉より返った極蝶が『災来』した。

## BOSS 審判を下す極蝶 後編

炎に包まれ、落雷が轟く学園都市の一角。

その渦中にいる当麻たちは、相対する敵に対して、あまりに無力だった。

当麻は遠距離攻撃こそ打ち消せるものの、ただの斬撃を喰らうだけでも瀕死は確実。

カービィはマルクを倒した時点でコピー能力を解除しているため、攻撃によつて生じた星型弾を用いるほかない。が、ありえない頻度で瞬間移動をかますため、かすりもしないというのが現状。

エフィリンに至つては、瞬間移動の妨害を試みても、即座に移動されて無駄に終わるという始末であった。

「なあ、強すぎねえか、コイツ!？」

「前よりも明らかに強い……！」

ま、まさか……！ミサカ妹の前に、何か強大なモノを吸収しちやつたとか……!？」

「ぼよっ、ぼよお……！」

エフィリンの推測は、残念ながらももの見事の中していた。

デデ大王と佐天涙子らの奮闘により、見事解決した「幻想御手」騒動。



その末に、幻想御手を使用した計一万人の能力者の思念が集まって生まれた怪物：「AIMバースト」を極楽の夢見鳥が吸収し、既に一度顕現していたのだ。

銀河最強の騎士を取り込み、思念で世界を作り出す究極の生命体を取り込み、一万人の意識の集合体を取り込み、果ては一万人の妹達を取り込んだ。

その蓄積により、目の前に立つバルフレイナイトは、かつてカービィが打ち倒したモノよりも遥かに強大な存在となって、その前に立ちはだかった。

「トーマー！」

「うおっ!? あっぶねっ!」

と。カービィが当麻に体当たりをかましたことにより、迫っていた斬撃が空を切る。

あのまま突っ立っていたら、当麻の頭は体と永遠のお別れを告げていただろう。

流れるような斬撃を、千鳥足でフラフラと避ける当麻。

剣術などこれっぽっちも修めていないが、その練度の高さは素人目ながらも伝わった。

以前遭遇した魔術師：神裂よりも、はるかに鋭く、素早い。

斬撃の延長線上にあるだけでも、ビルに一線が走り、倒壊するのを目の当たりにすれば、それがいかに危険かも理解できた。

「トーマー！バルフレイナイトはトーマを一審警戒してる！」

トーマの右手のチカラに気づいてるんだ！」

「つてことは…、俺が触れば、御坂妹は助け出せるつてことか!!」

無論、そう簡単にはいかないが。

バルフレイナイトが放つ電撃や熱波は打ち消せても、無類の剣技、高頻度の瞬間移動が防壁となり、接近することすらできない。

カービィに頼ろうにも、コピー能力がない彼では、足止めすることすら困難である。

当麻は迫り来る竜巻をなんとか避け、続け様に放たれた謎のモヤを打ち消した。

「だーっ！近づけねえ!!」

「んつと、えつと、カービィになにかコピー能力が、コピー能力があれば…」

エフィリンは異空間へと意識を飛ばし、そこにあるコピーのもとを探す。

が。ソレさえも察知されたのか、バルフレイナイトが一瞥すると共に、側から炎を纏う結晶が弾幕として襲い掛かった。

慌ててエフィリンの元へ駆け寄った当麻たちは、その弾幕をなんとか打ち消す。

カービィに関しては、打ち消すと言うよりは吸い込むだった。

これならコピーできるかも、と思い、飲み込んだものの、カービィの体に変化はなく。ただ「すかつ」という、なんとも気が抜ける音が響いた。

「ほっしゅい」

「ファイアすらコピーできないなんて…!?」

ど、どうなってるのお…!?」

実のところ、結晶はカービィの口腔に収まる直前に鎮火していた。

バルフレイナイトは、カービィのコピー能力の危険性を十分に理解していると考えていいだろう。

勝ち目が見えないほどの強敵を相手に、当麻らは冷や汗を流す。

そんな汗すら、バルフレイナイトが発する熱波で即座に乾いてしまった。

「どうすりゃあいいんだよ…!」

ジリ貧というほかない状況に、思わず弱音を吐いてしまう当麻。

と、そんな時だった。

「今こそ、オレさまの出番だろーが!!」

そんな声と共に、バルフレイナイトが巨大な影に叩き落とされたのは。

ずん、と音が響き、大地に衝撃が走る。

目を丸くした当麻たちの眼前には、こんな時期だというのにガウンを羽織る人影が映る。

カービィはその影に見覚えがあることに気づくと、顔を綻ばせ、駆け寄った。

「まったく、懲りずに暴れおって…」

「はあい！」

「話は後だ！コイツを食え！」

彼は言うのと、駆け寄るカービィの口に、木槌を放り込む。

瞬間、カービィの体が光に包まれる。

それが霧散すると。ねじり鉢巻を頭に結び、木槌を背負ったカービィが立っていた。

大王直伝、重撃必殺。その名も、コピー能力「ハンマー」。

その隣でお揃いのハンマーを構えるのは、カービィの永遠の宿敵、デデデ大王。

彼もまた、同じようにこの星へと流れ着き、この都市に渦巻く動乱に巻き込まれていた。

紆余曲折を経て、ようやく再会した宿命のライバルたち。

二人は並ぶと、よろよろと立ち上がるバルフレイナイトを睨め付けた。

「ペ、ペンギン？」

「デデデ大王！…その、今回は操られてないよね？」

「シツレイな！そう何度も操られるオレさまじゃないぞ！！」

エフィリンの確認に怒鳴るものの、その顔は笑みを浮かべている。

前科が腐るほどある彼が吐くにしては、説得力に欠ける言葉である。

そんなやり取りをしている間にも、バルフレイナイトは高く飛び上がり、剣を背丈の

数倍へと肥大化させていく。

カービイらがハンマーでそこを叩こうとするも、姿を消す。

次の瞬間、彼らの背後に回ったバルフレイナイトが、まとめて薙ぎ払うように、剣を横薙ぎにした。

が。ここにいるのは、手を組んだ宿命のライバルたち。

カービイとデデデ大王は互いにハンマーを振りかぶると、炎を纏わせ、剣へと叩きつけた。

一撃で鬼さえ滅する、最大の一撃。「鬼殺し火炎ハンマー」。

がきん、と、木槌と剣がぶつかつたとは思えないほどに鈍い音が響き、力が拮抗する。

熱波が周囲を削ぐような感覚にも陥る中で、当麻は目を見開いた。

「バルフレイナイトが、押されてる…!？」

撤回すると、拮抗というには、少々状況が傾いていた。

カービイとデデデ大王が、バルフレイナイトの一撃をより上回る形で。

「ぬう…、でりやあああああつ!!」

「はあああああつ!!」

ぐぐつ、とバルフレイナイトが渾身の力を込めるものの、カービイとデデデ大王が裂帛の気合と共に、さらに押し返す。

両者の介入を許さぬ力の応酬。それを制したのは、星の戦士たちだった。

「トーマ、今だー！」

「おうー！」

剣を弾き飛ばされ、大きく隙を晒した今。

当麻はバルフレイナイトの懐へと潜り込み、拳を引き絞る。

が。そんな考えを嘲笑うかのように、バルフレイナイトは即座に剣を顕現し、構える。距離を取ろうにも、間に合わない。

当麻がせめて命を守ろうと、右手を前に掲げた、その時だった。

「ふっー！」

きいん、と、金属同士がかちあう音が聞こえたのは。

当麻の眼前に広がるのは、蝙蝠の羽。

顔はよく見えないが、カービィによく似た体躯の誰かが、バルフレイナイトの剣を受け止めていることは伝わった。

当麻はその背中を回り込み、バルフレイナイトの背後をとる。

そして、先ほどと同じように、拳を引き絞って、放った。

が。その拳は空を切り、剣戟を繰り広げていた剣が行き場をなくす。

どこに行った、と周りを見ると、ぱりっ、と雷が走った。

「そこかっ！」

蝙蝠の羽を持つ騎士は、目にも止まらぬ速度で移動すると、現れたバルフレイナイトと凄まじい勢いで切り結ぶ。

きいん、きいん、と何度かの衝突を経て、バルフレイナイトは再び姿を消した。

「メタナイトまで！ やったやった！ これなら勝てるかも！」

と。フリーズしていたエフィリンが顔を綻ばせ、状況の好転を喜ぶ。

孤高の騎士、メタナイト。銀河最強の剣士すら下す、宇宙最高峰の剣士。

当麻はエフィリンの喜びぶようを疑問に思いながらも、メタナイトに声をかける。

「メタナイト……っつーのか、お前？」

「デデデ大王も言った通り、話は後だ、カミジヨー・トーマ。」

バルフレイナイトを倒すのだろうか？ 私も微力ながら、力を貸そう」

微力どころの騒ぎではないのだが。

先程の剣戟を目の当たりにして、そんなことを思いつつ、周囲を警戒する。

と、いつの間にもやら顕現した、雷炎纏う結晶の弾幕が、彼らを取り囲む。

「やばっ…!？」

「安心しろ。私が切る」

メタナイトは言う、ありつただけの力を込め、地面へと剣を突き刺す。

刹那。巻き起こったのは、天さえも引き裂くかの如き竜巻。

これぞ、彼の必殺技が一つ、「マツハトルネイド」。

周囲を薙ぎ払うように、暴れ回る斬撃の竜巻により、結晶は切り刻まれ、砂となってそこら中に霧散した。

煌めく雨の中に佇むメタナイトの姿に、思わず目を奪われそうになるが、そんな場合ではない。

当麻はあたりを見渡し、消えたバルフレイナイトの姿を探す。

と、カービーがこちらへと駆け寄り、ハンマーを横薙ぎにして回転し始めた。

「っし、来い！カービー！」

「ぼよおー」

当麻は言つて、体をのけぞらせてカービーの一撃を避ける。

と。当麻の背後まで迫っていたバルフレイナイトの頬を、木槌が捉えた。どごつ、と鈍い音が響き、バルフレイナイトの体がバウンドする。

「おー……らあつ!!」

その先にいるのは、炎を纏わせた木槌を構えるデデデ大王。

必殺を謳う一撃が、バルフレイナイトの顔面を捉え、その体を宙へとかち上げる。

と、そこへ瞬きほどの闇が訪れる。



当麻が何事だ、と思っていると。一閃が放たれ、バルフレイナイトの体を切り裂いた。よくよく見ると、バルフレイナイトの背後には、切り終えた体勢で宙に浮かぶメタナイトの後ろ姿が見える。

そのまま落下するバルフレイナイトに向けて、カービイが駆け、激しく回転する。勢いが最高潮に達すると、カービイは木槌を握る手を離し、叫んだ。

「はあああああつ!!」

これで、「爆裂ハンマー投げ」。

激しく回転しながら、真っ直ぐにバルフレイナイトへと飛ぶ木槌。

咄嗟に避けようとするも時すでに遅く、木槌は顔面に叩きつけられた。

派手に吹き飛ぶバルフレイナイトに向けて、当麻は駆け出す。

ここまで弱れば、瞬間移動も剣技もクソもない。

当麻は拳を引き絞り、告げる。

「やつぱ、ちゃんと生きたいんじゃないか」

一方通行や研究所を切り伏せたのは、御坂妹が知らないうちに抱いていた、生存願望だったのだろう。

都合のいい解釈かもしれない。だが、当麻の目には、間違いなくそう映っていた。

「もしも……もしも、お前が解放されて、それでもまだ死にたいって言うんならなあ…

！」

拳がバルフレイナイトに突き刺さる。

命の重さが詰まっているような、あまりに膨大すぎる重量がかかる。

それでも、当麻は叫びながら、それを殴り飛ばした。

「まずは、その幻想をぶち殺おす!!」

腕を振り切ると共に、バルフレイナイトの体が光を放ちながら、宙へと浮かぶ。

やがて、それが限界に達し、ふあつ、と音を立てて蝶が飛び立つと。

分離した御坂妹が、その場に残った。

「御坂妹!」

当麻は落下する彼女の名を呼び、駆け寄る。

その手に収まった彼女は、すう、すう、と寝息を立てていた。

「…呑気に寝やがって…。こっちは大変だったんだからな…」

そんな彼女に、当麻は笑みを浮かべながら、悪態をついてみせた。

「捕まえた!!」

「やったぜ、サテンちゃん!これで一件落着だな!」

その背後では、飛び立とうとした蝶を、一つ目の雲に乗った少女が虫取り網で捕まえる。

皆がその姿に目を丸くしていると、コピーを解いたカービーが声を張り上げた。

「ぼよーぼよー!」

「うむ、アレだな! 前々から思ってたが、お前が真ん中にいないとしつくりこない!」

「再会を喜ぶ意味も込めて、祝おうではないか」

「オレも混ざっていいですか、大王さま!」

「あー…、やっぱ踊るのな…」

「あー…、やっぱ踊るんだ…」

当麻と少女…佐天涙子の呆れを皮切りに、皆がポーズを取る。

と、どこからか流れてきた、軽快な音楽に合わせて、皆がステップを刻む。二度目の

ソレに、当麻と佐天もまた同じように、軽くだが踊ってみせる。

やがて、音楽が終わると共に、皆が決めポーズを取った。

それを照らしたのは、登る朝日だった。

◆? ◆? ◆? ◆?

「うーん…。大王さま、どこ行っちゃったのかなあ…?」

その頃、学園都市から少し離れた、とある集落にて。

わにやわにや、と声が響く中で、青いバンダナを頭に被ったワドルデイが、槍の手入

れをしながら眩く。

そんな彼の不安げな様子を見ていたライオンが、隣に腰掛け、不安を消すように、にっこりと笑ってみせた。

「そう案ずるな、バンダナ。」

彼のことだ、どこかで逞しくやってるさ」

「操られてないといいけど…」

「はっはっはっ。ソレを言われると、私も少し困る」

「あつ、ごめん！そんなつもりじゃなかったんだけど…」

しゅん、と目を伏せるワドルデイに、ライオン：獣王レオンガルフは、鋭い牙を見せ、不敵に笑ってみせた。

「もし操られていても、私たちには頼れる勇者がいるだろうか？」

「…それもそっか！」

いくら他のワドルデイたちよりも荒事慣れしているとはいえ、そこはただのワドルデイ。

楽観的なのは変わらないらしい。

レオンガルフはそれを豪快に笑ってみせた。

「…ニヤウ」

朝っぱらからうるさい、とでも言いたげに、背後で女豹：キャロラインが呆れたため

息を吐いた。

## LEVEL : 3 バグズ・レムナント

## STAGE : 1 追放

「……はあ」

空の上にて。

クラッコに揺られる当麻のため息が、空気の薄いはずである空に消える。

ちらり、とカービイのいるであろう、背後に目を向けると、彼は頬に空気をいっぱい  
ため、必死に両手をバタつかせながら、クラッコの後ろについていた。

端的に言おう。学園都市から追い出されたのである。

ことの発端は、最強を圧倒し、バルフレイナイトを倒したことだった。

最強を失墜させ、さらには未知の生命体を従えて、これまた未知なる騎士を倒した男。  
そんな身に余る称号を手に入れて、上条当麻が持て余さないわけがなく。

結果、学園都市中の人間に目をつけられ、日中関係なく襲ってくるようになったのだ。  
ひどい時は寮をまるごと吹き飛ばそうと考えたバカが襲いかかり。ケーキを台無し  
にされた怒り狂うカービイによって、見事に空を彩る星となったのは、記憶に新しい。

デデデ大王もそのとばっちりを受けたことがあるように、食べ物への恨みは非常に恐ろ

しいのだ。

無論、そんな暴動に近い動きがあれば、理事会も黙ってるわけがなく。

一度、ほとぼりが冷めるまで出て行け、と告げられ、半ば無理やり追い出された。宿題も進んでいなければ、新学期に登校できるかすらも怪しい。

お先真つ暗にも程があるこの状況で、ため息を吐くなど言う方が無理だった。

「そう落ち込むな。オマエは正しいことをしたのだから？」

ならば、その行いに泥を塗るようなマネはするな」

「別に落ち込んだんじゃないねえよ。バス代すら払えない上条さんを許してくれ……」

「心配するな、ウニ頭。オマエは金欠じゃないと違和感がある」

「……もうちよつとオブラートに包むってこと、覚えませんか……」

パルルは相変わらずの毒舌で、当麻が気にする懷事情をばつさり切り捨てる。

当麻はそれによつてさらに疲れたのか、深い、深いため息を吐いた。

ため息は幸せが逃げていくとは言いが、吐き出す幸運すらない。好きだけのため息を吐けることは、利点としてカウントしていいのだろうか。

そんなことを考えながら、隣でくつろぐデデデ大王に目を向ける。

「で、俺たちは今、どこに向かつてんだ？」

「メタナイトが拠点にしてる場所だな。」

協力してほしいことがあるんだと。

アイツは『ハルバードベース』って呼んでたが…、まさか、ハルバードまでこつちに  
来てたりしてな！」

「ハルバード？」

「メタナイトの空中戦艦だよ。

カービィを2回も追い払えるくらい、すごく強い船なんだ！」

「ぼよー。ぼよー！」

「3回目にはぶつ壊されてるって言い方してないか、ソレ？」

ハルバード。メタナイトが所有する、ポップスター唯一の空中戦艦。

宇宙空間でも活動ができる優れもので、かつて、「星の夢」と呼ばれるマシンを打ち倒すのに助力したのも、このハルバードである。

が、悲しいかな。事あるごとに活躍はするものの、同時に事あるごとに墜落するので、もはや一種のお家芸なのでは、と、密かに噂されている。

そんな船の名前を冠しているのだ。確実に、その拠点にあるに違いない。

「…話変わるし、今更だけだよ」

「ん？どーした？」

当麻はハルバードへの思考を一度ぶった切り、背後へと目を向ける。



そこには、インデックスやワドルデイたちとババ抜きをして遊ぶ佐天涙子がいた。

「あんたも追い出されたのか？」

「あははー…。実はそうなんですよねー…。

やっぱ、下手にいろいろと首突つ込んだのが良くなかったみたいで。

あのちようちよを渡せー…なーんて迫られたり？」

「…な、なんか、ごめんな」

どうやら後輩にまで、迷惑をかけまくっていたらしい。

当麻は罪悪感から頭を下げると、息を吐くように「不幸だ…」と呟く。

しかし、デデデ大王の家臣…本人は承諾していない…が一人、佐天涙子はそんなことでは挫けない。

「いえいえ、大丈夫ですよー」。

私も美琴さんも、あの実験を知ったら、上条さんと同じようなこと考えたでしょうし」

「堅苦しくしなくていいぞ。結構無理してるだろ、ソレ」

「あ、本当？じゃ、お言葉に甘えて」

「るいこ、早く引かないと、ワド四郎が困ってるんだよ」

インデックスの言葉に、再び彼女らとのババ抜きへと戻る佐天。

なんとも微笑ましい光景である。

そんなやりとりをしていると、クラッコが声を張り上げた。

「見えてきましたよ、大王さま！」

あの洞窟が『ハルバードベース』です！」

眼下には、海水浴場から少し離れた岩山が見えた。

◆? ◆? ◆? ◆?

ハルバードベース。

仰々しい名前をしているが、ただの洞窟ではないか、と呆れたのも束の間。

彼らを出迎えたのは、学園都市の施設もびっくりなテクノロジーの塊だった。

ワドルデイやゴリラ、アルマジロが忙しなく働く現場に、鎮座する空中戦艦。

それらを見渡し、当麻は「はあー…」と感心した息を吐く。

「…自己主張激しすぎねえ?」

「ぷいっ…」

「一種のゲン担ぎのようなもんだってメタナイトは言ってたぞ」

ハルバードの船首には、メタナイトの仮面を象った装飾が佇む。

自己顕示欲が限界突破したデザインに、当麻がそう言いたくなるのも無理はない。

このデザインは、かつてメタナイトが革命を起こそうと反旗を翻した際、「どうせなら革命を起こしたのが誰か、わかりやすいようにデザインしよう」と全会一致で決まった

経緯があるのだが、その事実を知るのは、ごく一部である。

デデデ大王の言葉に生返事を返し、当麻はハルバードの周りで作業をするゴリラやアルマジロに目を向けた。

「…なんだろう。あらゆる不思議を不思議に思わなくなってる俺がいる」

「デデさんたちといると、不思議って感覚が薄くなつてく気がするんだよね…」

勉強という概念がないにしては、明らかに地球より発達した文明に、そんな感想を述べる当麻たち。

と。そこへ、羽をマントのようにして纏うメタナイトが姿を現した。

「ようこそ、我がハルバードベースへ。」

改めて、自己紹介をしよう。

私はメタナイト。剣の道を極めるべく、日々鍛錬を重ねている。

こちらは私の部下、『メタナイツ』が一人、メイスナイトだ」

「メタナイトさまからお話は聞いているダス、カミジヨー・トーマどの。」

メタナイトさまの忠臣が一人、メイスナイトだス。よろしくダス」

メタナイトが紹介すると、メイスナイトは当麻に握手を求め。

またエフィリンのようなことになるのではないか、とビクビクしながらも右手を差し

出す当麻。

しかし、メイスナイトはメイスの扱いが得意というだけで、特殊能力がある訳ではない。

当麻の心配は杞憂に終わり、無事に握手を交わすことができた。

「つてか、言葉通じてんのな」

「ワタスたちの場合、『ハルトマンワークスカンパニー』から接収した翻訳機によって、会話が可能になってるダス。」

ポップスターの言語限定なんで、アニマルたちは喋れないダスが…」

言つて、メイスナイトは耳元であろう箇所につけた、インカムのような機械を指差す。当麻は聞き慣れない社名を疑問に思いながらも、そんなことを聞きにきた訳ではないと首を振った。

「話が逸れたな。それでは、本題に入るとしよう。」

…とは言つても、事が事だ。無用な混乱を招きたくない。メイスナイト、頼む」

「はいダス！」

メタナイトが指示を出すとともに、メイスナイトは備え付けてあったボタンを押す。

すると、がこんつ、と音が響き、当麻らが立っている床が浮遊し始めた。

「な、ななつ…!?!」

「わわっ…」

「ぼよっ」

カービイからすれば慣れたものであるが、当麻たちは慣れない衝撃に面食らう。

感覚としては、エレベーターに近い。

ゆっくり、ゆっくりと変わっていく景色と、浮遊する床に感嘆の息を漏らすこと数秒。

同じように、がこんつ、と音を立てて床が止まると、メタナイトは背を見せた。

「こちらだ」

メタナイトは言うのと、眼前にあつた扉を開き、奥へと進む。それに続いた当麻らを出迎えたのは、簡素な会議室だった。

メタナイトの部下として働くワドルデイたちに案内されるがまま、用意された座席に座る当麻たち。

全員が座したことを確認するや否や、メタナイトは話を切り出した。

「単刀直入に言おう。ハルトマンワークスカンパニーが復活した可能性がある。手を貸してくれ」

◆?◆?◆?◆?

学園都市にて。

ピンクの髪を伸ばした少女：に近いシルエットの生物が、謎のプロペラに掴まりながら、血眼になってあたりを見渡す。

「ない、ない、ない……どうしようどうしよう!?」

少女：「秘書スージー」は現在、しでかしたことの大きさに焦り散らかしていた。端的に言えば、盗まれてはならない物を盗まれてしまったのだ。

悪用されればまずいが、より危険なのは『悪用した者が導かれる』ことだろう。その末路を知るスージーだからこそ、その焦りは尋常ではなかった。

「な、なんと少しでも取り戻さなきゃ……」

二度とあんなマシンを再起動させてたまるもんですか……!!」

その決意を胸にした直後、彼女はふと、ある場所へと目を向ける。

デカデカと垂れ下がる旗に屋台。そこに書かれていたのは、なんとも鮮やかな色合いのアイスクリームであった。

「……げ、限定フレーバー……」

……はっ!?だ、ダメよ秘書スージー……。そんな、アレを追わなきゃいけないのに、はしたな……。いや、でも……」

こうして葛藤している間にも、距離は開いていく。このプロペラでは、追いつくことは難しいだろう。

しばらく葛藤したのち、誘惑に負けたスージーは地表へ降り立ち、屋台へと向かった。「すみません!限定フレーバー、3つくださいまし!!」

◆?◆?◆?◆?

その頃、学園都市にて。

研究チーム全員の重傷によって解体され、人っ子一人いないはずの場所には、騒音が発生していた。

だというのに、何故か機械がそこらじゅうを駆け回り、忙しく作業を続けていた。

彼らが作り出しているのは、紫色のアメーバのような生物や、白兵戦特化の武装。

果ては、資源を効率よく採取するために開発された、環境機械化兵器。

学園都市において、なんと少しでも唾棄されるべきプロジェクトが、秘密裏に動いていた。

『ザ、ザザ…っ、ザ——…!』

と、そこにあるパソコンの画面に、『H』を象ったような、謎の紋様が浮かび上がる。

その直後、スピーカーからは、ある音声 flowed。

『……R……E……A……D……Y……』

狂気のマシンによる侵略が、幕を開けようとしていた。

## STAGE : 2 襲撃

「宇宙の危機…なんて言われても、あんま実感ねえな」

ハルバードベースにある食堂にて。

メタナイトとの話し合いを終え、当麻はグラタンをスプーンで掬い、呷く。

ハルトマンワークスカンパニーの復活。

それが意味するのは、至上のマザーコンピュータにして、最悪の欠陥品…「星の夢」の復活、とのことだった。

「星の夢」は、はつきり言えばギャラクティック・ノヴァの模造品である。

「ネガイを叶える」と言う点はどちらも合致しているが、「星の夢」には、ある致命的すぎる欠陥があった。

あまりにも自我が強すぎるのだ。

カンパニーの繁栄の為に、全ての生命を不要と判断するくらいにはネガイを曲解し。

口にしていないのにも関わらず、勝手にネガイを叶えるべく動き出し。

ネガイを叶えることを重視し過ぎて、その先に迫るであろう、大きすぎる損害すらも考慮せず。



挙句の果てには、造物主たるプレジデント・ハルトマンを取り込み、全生命体の抹殺のために、主人の記憶とココロを破壊する。

これを欠陥品と呼ばずして、なんと呼ぶのだろうか。

そんなコンピュータが復活し、学園都市で動いている。

ワドルデイたちの尽力によって突き止めた事実を前に、当麻はいまいち実感が持てないでいた。

隣に座るカービィは、「星の夢」の脅威なぞ頭から抜け落ちているのか、はたまた深く考えていないのか、おいしいゴハンに舌鼓を打っていた。

「ぼよおー！」

「…お前はいつつも呑気だなあ」

あしたはあしたのかぜがふく。

そんな言葉があつたっけかな、と思いつつ、口の周りを汚すカービィの口元を拭く。

宇宙の危機なんて、実はそうそう驚き、戦慄くものではないのかもしれない。

ここ一ヶ月で、すっかり楽観的な思考が根付いてしまった当麻は、この後の予定を組み立て始めた。

「探そうにも、俺たちは学園都市を追い出されてるしなあ…」

「ミサカ妹に頼んだら？電話あるでしょ？」

全員が：受け入れ先？…つてのが決まるまで、学園都市にいるって言ってたよ」

「や、でも、相手はコンピュータなんだろう？筒抜けになる可能性も考えたら、あんま得策じゃないと思うぞ？」

「んつと…、つまり、電話はまずいつてことかな？」

特段、科学に明るいわけではないエフィリンには、当麻が何を危惧して電話をしないのかがわからない。

エフィリンのなんともシンプルな答えに、当麻は苦笑を浮かべながら頷いた。

「そういうことだ」

「わかった！じゃあ、電話じゃなきゃいいんだよね！」

エフィリンは言うど、「むむ…」と体に力を込める。

何をするのだろうか、と思っていると。

天井に星型の穴が開き、そこから落ちてきた御坂妹が、空いていた当麻の左隣の椅子に、すんと、と収まった。

「…ここはどこですか？」

「ね！電話じゃないでしょ？」

「確かに電話ではないけども!!」

確かに電話ではないが、それ以上に面倒な事案である。

下手すれば、能力を使った拉致に見えなくもないのではなからうか。  
当麻は学園都市に帰った時の後始末を考え、「不幸だ…」と嘆いた。

◆?◆?◆?◆?

「……」

「あの、お客さん?」注文は…?」

その頃、学園都市にあるファミリールレストランにて。

珍しく一人の時間が取れた少女：御坂美琴は、メニュー表を前に考え込んでいた。

普段であれば、少女趣味をどう誤魔化すかを悩んでいたのであろうが、生憎と今はそんな気分ではなかった。

注文を聞きに来た店員が、思わず困惑してしまうほどに難しい表情を浮かべる彼女。暫しの沈黙が続く。

数秒経った頃によくやく店員の存在に気がついたのか、びくつ、と肩を震わせ、慌てて口を開く。

「……えっ!? あ、えっと…、日替わりランチセットで…」

「日替わりランチセットですね。かしこまりました」

言って、厨房へと去っていく店員。

その後ろ姿を見届け、美琴は再び頭を抱えた。

——実験はマルクという未知の生命による介入に一方通行の裏切り、そして、それを打ち倒した上条当麻他数名の妨害により再開不能とされ、凍結されました。

先日出会った、母が産んだ記憶のない妹。

自身のクローンがいるというだけでも寝耳に水だったというのに、それが一万近くも『実験』と称して殺されていた、と知った美琴の心境は最悪だった。

気づかずにこのうのと生きていた自分が、ひどく恨めしくなった。

何より許せないのは、とうの昔にその実験を阻止した人間がいたということ。

その人間の名前は、聞き覚えがあった。

自分の能力が一切効かず、生意気で、デリカシーがない、可愛らしいピンク玉を引き連れているツンツン頭。

いっそのこと、全く知らない人間であれば、ここまで悩むこともなかったのに。

顛末に関しても気に食わなかった。

AIMバーストを取り込み、顕現した黄泉の騎士…バルフレイナイト。単身では手も足も出ず、圧倒的な速度で電撃を搔い潜り、死を覚悟させた存在。

此度顕現した際にも、学園都市最強を呆気なく切り伏せたという。

そんな存在を相手に、無傷で勝利を収めた…実際は一撃必殺もいところなデタラメ火力だったため、必死こいて避けていた…上条当麻一行。

一方、自分はどうかだろうか。切り傷に火傷まみれで、満身創痍でなんとか一撃を喰らわせるので精一杯だった。

学園都市のトップ3としての矜持など元から持ち合わせていないが、それでも多少のプライドくらいはある。

自分の不始末の産物に立ち向かい、挙句の果てには、自分がいいようにやられた相手を圧倒した当麻。

これで厚顔無恥にも「ありがとう、ご苦労様」などと宣うほど、御坂美琴の顔は厚くはなかった。

「…わかつてるわよ。もう終わっちゃって、どうしようもないってことくらい」

誰に言うでもなく、呟く美琴。

確かに分かつてはいる。分かつてはいるのだが、それに納得できるかと問われれば、首を横に振るだろう。

何もできなかつた自分に腹が立つ。

そんな思考のループに陥っていると。

がしゃん、とガラスが割れる音が響き、破片が散乱した。

「何!?!」

慌てて美琴は机に乗り出し、なにが起きたかを確認するべく目を凝らす。

瓦礫と埃に隠れたシルエットは、モノアイを煌めかせ、揺らめく剣を振るった。

斬撃。トラウマに思わず身構えるものの、あれに比べればはるかに劣る一撃を避け、電撃を放つ。

しかし、シルエットには全く効いていないのか、微動だにせず。

尾のように伸びたアームが、美琴の体を薙いだ。

「がつ…?!」

美琴は派手に吹き飛ばされ、ファミレスのガラスを突き抜ける。

ここまで派手に暴れたのならば、白井黒子を始めたとした風紀委員が駆けつけるだろう。

「なめんじゃ…ないわよ!!」

美琴は磁気を操作して、なんとか受身を取ると、シルエットの両翼から放たれたミスイル群を雷撃で撃ち落とす。

バルフレイナイトほど素早くはない。むしろ、あれに比べれば、遥かに鈍重だ。

これならば、当てることは訳ないだろう。

美琴はポケットからコインを取り出すと、右拳の親指に密着させ、簡易的な砲台を作り出す。

「これでも…喰らええ!!」

超電磁砲。

御坂美琴という人間を象徴する一撃が、埃を薙ぎ払いながら、シルエツトへ迫る。しかし、シルエツトは手に持った剣を回転させ、その一撃を叩き切った。

「……………」

あまりの光景に、美琴は目を丸くする。

そこに立っていたのは、まんまるのシルエツトに、むやみやたらと兵器を取り付けたかのような歪な存在。

モノアイが怪しく煌めく仮面に、両肩に積まれたミサイル。

背にはアームがたたずみ、その不気味さに拍車をかけていた。

「な、なによ、コイツ…？ワドルデイに似てるけど、何かが違う…？」

彼女は知る由もないが、その目の前に立つ存在は、かつてカービイらに牙を剥いたハルトマンワークスカンパニーの尖兵が一機。

その名も「強化量産メタナイトボグ」。

純然たる科学のみで形成された、ココロ持たぬ兵器。

機械であるが故に、電撃対策はバッチリなのに加え、インプットされたメタナイトのデータから、オリジナルには劣るものの、超電磁砲程度であれば切り裂けるほどの性能を誇っている。

ざつくばらんに言えば、美琴の手はほとんど通用しないのだ。

そのことを薄々ながらに察したのだろう。

美琴は砂利に紛れる砂鉄を操り、刃の弾幕としてメタナイトボーグへと迫る。

しかし、メタナイトボーグもそうあっさりとはやられない。

メタナイトボーグは体に力を溜めると、エネルギーを身に纏い、それによって、襲ってくる砂鉄を払う。

が。それが煙幕となり、メタナイトボーグの目の前から、美琴の姿が消え失せた。

「よそ見してんじゃないわよ!!」

三度の轟音と共に、メタナイトボーグの右半身が吹き飛ぶ。

美琴が三発同時に放った、背後への超電磁砲は、鈍重なメタナイトボーグでは対応できなかった。

メタナイトボーグは暫し足掻くべく、モノアイに光を溜めていたが、悲しいかな。

既に機能の殆どが死んだ機体では思うようにいかず、直後、派手に爆散した。

破片が飛び散る中で、喧騒が戻っていく。風紀委員たちが駆けつける中で、転がった仮面を見下ろし、呟く。

「……なんだったの、今の?」

御坂美琴もまた、この復讐劇に巻き込まれていく。



この闘いは、その序章に過ぎなかった。

◆?◆?◆?◆?

「…なんだア?この樹木モドキ」

スクラップになったロボを前に、とある少女を庇うように立つ一方通行が呟く。

襲われていたから、などという単純な理由で助けたものの、明らかに軍事用に作られた兵器を前に、訝しげに眉を顰める。

一方通行が打ち倒したのは、「Re:ウイスピーボーグ」。

本来であれば、「ウイスピーウツズ」と呼ばれる人面樹を素体に作られる兵器なのが、このウイスピーボーグは純然たる機械であった。

随分とふざけた見た目だが、使われている技術は、学園都市のレベルを超えている。となれば、考えられるのは、ただ一つ。

「…また宇宙関連かよ、クソツタレ」

一方通行は悪態をつくくと、ガンつ、とウイスピーボーグの残骸を蹴る。と。そんな彼に、助けた少女が近づいた。

「あの、あのっ!ありがとうって、ミサカはミサカはあなたにお礼を言ってみたり!」  
「ああ?」

ヒーローに憧れる悪党の英雄譚が、復讐劇と共に動き出す。

## STAGE : 3 無力

「もお、いきなりのことですつごくびつくりしたんだから！つて、ミサカはミサカは驚愕をあらわにしてみたり！」

「うっせエ。耳元で喚くな」

一方通行はとてとてと付いてくる少女：自らが殺してきた妹達の末妹たる「打ち止め」に悪態をつき、足を早める。

振り切ろうと思つてはいるのだが、なんとか日常生活を送れるようになった程度で、傷は完治していない状態にある一方通行。

そのためか、多少の無茶をするだけで走る苦痛が、その動きを鈍らせる。

結果、一方通行は渋々、この少女と歩みを共にしていた。

「で、なんで狙われたかわかるか？」

「たぶん、ミサカがミサカネットワークの中核を担つてるからだと思つて、ミサカはミサカは推測してみたり」

「…成る程。むやみやたらと放逐してるわけじゃねエつてこつたな。

しつかり狙う対象は決めてるワケか」

誰の犯行かは知らないが、随分と周到だ。

今、学園都市は混乱の渦中にある。

風紀委員やら警備員などの治安維持部隊がそこらを駆け回り、武装無能力集団がコロボキないキカイを前に無駄に足掻く。

事件が常に起きるとは言え、ここまでの混乱は史上初だ。

一方通行は襲いかかるメタナイトボウグの顔面を掴み、スクラップへと変える。

「…チツ。これで五体目だぞ…？」

「ドンだけ放逐してやがんだ…？」

「んつとね、ミサカたちが把握してる限りでは、現在163機が暴れ回ってるみたい…つて、ミサカはミサカは絶望的な事実を突きつけてみたり」

スクラップにした分を除いて、160機前後が暴れ回っているらしい。そこらじゅうで悲鳴が轟き、爆炎が上がるワケだ。

自分以外のレベル5が対応していないとは考えられないが、それでもここまでの混乱が巻き起こっているあたり、対応は遅々としていると考えていいだろう。

「オイ、妹達はどオいう状況だ？」

「ミサカたちは全員が交戦せずに、襲撃の犯人を探してるみたい。」

『星の夢』…つていうコンピュータなんだけど、何か知ってるかなつてミサカはミサカは

望み薄だけどあなたに聞いてみたり！」

「知らねエよ」

星の夢。反吐が出そうになるほどにロマンチックな名前だ。

そんなことを思ったものの、ふと、一方通行は違和感に気づく。

「犯人のことを把握してんのか？」

「んつとね…、なんて言ったらいいのかな？」

知ってる人…いや、人かどうかは怪しいけど、誰かから聞いたみたいって、ミサカは

ミサカは端的に答えることにしてみたり」

「…『星のカービィ』か」

どうやら、ヒーロー達もひそかに動き出しているらしい。

一方通行は苛立ちを吐き出すように、大きく舌打ちした。

「『星のカービィ』ってなんなの…って、ミサカはミサカは好奇心のままあなたに聞いてみたり！」

「…全宇宙が足をむけて寝れねエ、無敵のヒーロー様だよ」

一方通行は適当に返すと、形容しようのない感情に顔を顰める。

漫画に出てくる主人公のように、運命に愛された存在。彼が勝つことが元から決まっているかのように、自身が警戒していたマルクがあつさりと敗れたことから、マルクが

言っていたことは事実だったのだろう。

どうせ、この騒動も彼らによって解決に導かれることだろう。

全くもって気に入らない。

「…『星の夢』だったか。場所がわかったら教えて。俺が潰す」

「残念だが、貴殿単独では到底不可能だ」

突如として投げかけられた言葉に、一方通行は反射的にそちらを見やる。

そこにあるのは、街灯。その先頭には、先ほど壊したロボによく似た、仮面を被った

一頭身…メタナイトが佇んでいた。

メタナイトはそこから降り立つと、一方通行の無事を喜ぶ。

「どうやら傷は治ったらしいな。」

面会も許されないほどの重体と聞き、心配していたのだ」

「…お前、バルフレイナイトを倒した…」

「メタナイトだ。以後、よろしく頼む」

言つて、メタナイトは手を差し出す。

十中八九、こちらの能力を知っているだろうにも関わらず、だ。

以前会った時に見せた善性から見るに、少なくとも、マルクよりは信頼に値する。

一方通行は暫し考えた後、その手を取り、軽く握手を交わす。

「…で、俺が単独で動いても倒せねエ…つつーのは、一体全体どおいうワケだ？」  
 「その説明の前に、少しばかり頼みがある」

言つて、メタナイトは降りかかつてきたキカイ兵器：計10機を一瞬にして切り刻み、スクラップへと変える。

あまりの早業に一方通行と打ち止めが目丸くする中で、メタナイトは告げた。

「我らに力を貸してほしい。」

「この星に…否。この宇宙に、危機が迫っている」

◆?◆?◆?◆?

「が、学園都市が…!?!」

「ぼよ…」

学園都市の動乱をテレビ越しに目の当たりにし、当麻らは戦慄く。

ウイスピーボグ、メタナイトボグが街を蹂躪するのを目の当たりにして、冷静でいられるわけがない。

追放された身であれど、この事態を黙って見ていられる程、冷酷な人間になれない当麻は、慌てて支度をする。

「カービィ! ワープスターで向かうぞ!」

「ぼよおー!」

「待て、トーマ、カービィ。今は動くな」

「何言ってるんだ、デデデ！」

学園都市が…、俺たちのともだちが危険に晒されてんだぞ!!」

「ぼよーぼよっ!!」

デデデ大王の制止に、当麻が食ってかかる。

カービィもまた、今すぐにも行こう、と言わんばかりに抗議した。

が。それをデデデ大王は悔しげに一喝する。

「わかっておるわ!!あそこには、今なおオレさまを探してるだろう、かわいいかわいい部

下達がおるんだ!!

オレさまだつて今すぐ向かいたい!!

だが、『星の夢』がそれを見越しておらんはずがないだろうが!!」

「で、でも…」

「…今、メタナイトたちと作戦を立てておる。カービィがいるからと言って、無策で突っ込んで勝てるような相手ではない。

ヤツは壊れているとはいえ、学び、進化するコンピュータだ。確実に、オレさまたちを止めるための手段を持つてるハズ。

オレさまたちに今出来ることは、『星の夢』を叩くために、牙を研ぐことだ」

「その通りだ、トーマ」

パルルもまた、槍の手入れをしつつ、動こうとする当麻を止めた。

「そもその話、相手はキカイだ。キサマの右腕は役に立たんぞ。

無策で突っ込んでどうやって勝つつもりだ、愚か者め」

「あ」

そう。相手がキカイである以上、上条当麻の右腕は使い物にならない。

殺すべき幻想が無いのだから当たり前なのだが、当麻は焦るあまり、そのことすら頭から抜け落ちていたようだ。

頭の冷えた当麻は、しかし悔しそうに歯噛みして、テレビの画面を見やった。

と。カービィはふと、あるかどうかもわからない首をかしげる。

「……ふい？」

「どうした、カービィ？」

「ぼよっ！ぼよお？ぼよっ！」

カービィは身振り手振りで疑問を表現するが、当麻には一向にわからない。当麻もまた、カービィの疑問に疑問を抱き、エフィリンへと視線を向ける。

すっかり通訳が板についたのか、エフィリンはスラスラとカービィの真意を汲み取った。



「メタナイトがここにいないことが気になるみたいだよ。

さつきから見ないけど、どこ行っちゃったんだろう…?」

「…そういうやそうだな」

メタナイトの所在が何処か、と、皆が探るようにハルバードベースを見渡していると。話を聞いていたのか、作業を終えたメイスナイトがこちらに駆け寄った。

「学園都市に助っ人を探しに行ってるだス。

もうちよつとで帰ってくるって入電があつただスよ」

「助っ人? 誰のことだ?」

「それは…」

と。その時だった。

「敵襲! 敵襲! ーっ!! 『ンギユア基地』に酷似した空中艦がこちらに向け、計6機接近してます!!」

船員ワドルデイの逼迫した声が響いたのは。

繰り返し述べられる事実を前に、全員が困惑を露わにする。

「な、なにつ?! ハルバードもまだ直ってないというのにだスか!?!」

「カービー、行けるか?」

「ほよお…」

「…どうした、カービー?」

ンギユア基地のことをよく知らない当麻がカービーに確認を取ると、彼にしては珍しく、首を横に振る。

どういうことか、と疑問に思っていると、呼吸を整えたメイスナイトが解説を始めた。「ンギユア基地の装甲は非常に硬く、デカくてタフで、カービーでも壊すのに時間がかかるだス。」

そんなのが大量に向かっているとという状況は、ハッキリ言つて絶体絶命なんだスよ」

「はああああつ!?!じゃあ、前はどうかやつて倒したんだ!?!」

「カービーが敵のアーマーを奪つて戦つたんだスが…、今回はそれを警戒されて、製造されてないみたいなんだス」

万事休すにも程がある事態らしい。

ハルバードベースに走る絶望感の意味が伝わった当麻もまた、冷や汗を流す。

佐天も同じようにデデデ大王に聞かされたようで、「どうしようもないじゃん!」と叫んでいた。

実際に、打てる手はほとんどない。

こうしている間にも、ンギユア基地が刻一刻と迫る中で、ある声が轟く。

「欲しがってたのはコイツよね!!」

当麻たちがそちらを向くと。

カービィによく似た、少し巨大なシルエットが佇んでいた。

◆?◆?◆?◆?

『すみません、御坂さん……! 白井さんが……、白井さんが、あのロボットたちに攫われてしまいました!!』

「……………は?」

時は少し進み、夕方。

友人たる初春飾利の報告に、足元が崩れるような感覚に陥っていた。

電話の向こうでは、キカイ兵器を殲滅し、街が復興へと向かう中で、行方不明者が多数出ている、という報告が飛び交う。

その中には、自身の後輩である白井黒子の名前もあつたと言う。

行方不明者は全員がレベル2以上の能力者。

彼らと行動を共にしていた人物からは、「ロボットに捕まり、どこかへ運ばれていった」という証言があつた。

現在、風紀委員、警備員も総力を挙げて捜索しているが、結果は芳しくないらしい。『いつ再び襲撃があるかわかりません。』

御坂さんも、警戒を怠らないでくださいね』

「……わかったわ」

通話を切った美琴は、崩れ落ちるようにベッドに倒れ込む。

あまりに無力だった。多勢に無勢、という言葉がしっくりくるような戦力差。

鍛え上げた自慢の能力をもってしても、後輩一人守れなかった。

更なる無力感がのしかかり、空気ですらも圧力を感じてしまう。うまく呼吸ができな

いような閉塞感が、美琴を襲った。

「……なにが、レベル5よ」

美琴は悔しげに吐き捨てると、仰向けに寝転がり、天井を睨め付ける。

常盤台の寮内でも混乱が続いているあたり、学内でも多数の行方不明者が出たらし

い。

犯人も勿論のことだが、自分の無力さにも腹が立つ。

そう思っていると。

「……お、お姉様……」

先ほど、行方不明だと聞かされた、白井黒子の声が部屋に響いた。

美琴は慌てて起き上がり、声の聞こえた方向を見やる。

そこには、空間移動で逃げて来たのだろう、傷だらけの黒子がいた。

「黒子、無事だったの…!？」

「え、ええ…、な、なんとか、逃げられ、ましたわ…」

息も絶え絶えに答える黒子は、そのまま膝から崩れ落ちる。

無力感に打ちひしがれている場合ではない。早く手当てをしなければ。

美琴は黒子に駆け寄り、彼女に肩を貸した。

「ほら、立てる？ 医務室に行くわよ」

「え、ええ…、ありがとうございます…」

——騙されてくれて。

瞬間。美琴を取り巻く空間が一変した。

## STAGE : 4 星の夢

「黒子、あなた…!?!」

親友の裏切り。予想だにしなかった事態に、美琴は驚愕に目を見開き、黒子を見やる。怪しげな笑みを浮かべる黒子は、まるで機械にでもなったかのように、表情を一切動かさずに口を開く。

「少シ抑揚ヲ付ケテ話スダケデ・コウモ容易クダマセルトハ…。」

ヤハリ・生命体トハ・ココロトハ・脆弱ナモノデ・ゴザイマス…。」

「く、黒子…? いや、違う…?」

あなた誰?! 黒子をどうしたのよ!?!」

明らかに様子が違う。光すら見えない瞳で、抑揚もなく言葉を並べる黒子に、美琴は叫ぶように問いかける。

まるで、ココロのない機械とでも話しているような、そんな感覚。

そんなわけがない、と否定した思考を肯定するかの如く、黒子はただ、無機質に言葉を放った。

「白井黒子ハ・ワタシガ改造シ・キカイ化スル予定ノ・一人デス…。」

ソシテ・ソレハ・アナタモ同ジコト……」

「質問に答えなさい!! アナタはなんなのって聞いているの!!」

美琴は怒鳴り、黒子に：否。黒子の皮を被った誰かにコインを向ける。

緊張と沈黙が走る。数秒のソレを破ったのは、黒子に乗った誰かだった。

「ワタシハ……『ハルトマンワークスカンパニー』ノ・マザーコンピュータ……『星の夢』……」

宇宙ニ蔓延ル・スベテノ生命体ヲ・ホロボスモノデス・」

「星の……夢……?」

宇宙のすべての生命を絶やす。そう謳う割には、随分とロマンチックな名前だ。

黒子が時折書く、自分とのありもしない熱愛を語った痛々しいポエムにその名前を放り込んでも、なんら不自然ではない。

美琴はあたりの電磁波を探るべく、神経を研ぎ澄ませ、黒子に相対する。

マザーコンピュータと言うからには、必ずハードがあるはずだ。

「改造……って、言うのは?」

「丁度いい……」。先程完成シタ・新製品ヲ・ゴ紹介サセテ・イタダキマス・」

がこん、と音を立て、黒子と自分を隔てるように、床に穴が開く。

その奥からせり出て来たのは、見覚えのある人影。

頭部に歪な機械を被せられ、華奢な四肢には不釣り合いなほどに無骨な武装を装着した少年の姿に、美琴は目を見開く。

「あ、あなた…、虚空爆弾の…!?!」

そう。彼女の目の前にいたのは、以前、学園都市を震撼させた「虚空爆弾事件」の犯人であつた少年だつた。

あまりに変わり果てた姿の前に、愕然としてみると、星の夢が淡々と言葉を紡ぐ。

「コレゾ・我が社ノ新製品…>」

24時間休ムコトナク・破壊工作ヲ続ケル爆撃用兵器…プロダクトナンバー・GB  
—110…『グラビトンボーグ』デス・>」

絶句。人命を考慮しないどころではない、生命の尊厳を根幹から破壊した産物を前に、美琴は愕然とした。

同時に、操られている黒子も同じ末路を辿ることを悟り、怒りを露わにする。

「外道…っ!」

声に乗せて怒りを叩きつけるも、ココロを持たぬ星の夢には届かない。

一刻も早く、本体を見つけないで。

美琴は星の夢の動きを警戒しつつ、必死でその本体を探す。

しかし、ソレと思しき電磁波は感知できず。



逆に、探っていることを悟られたのか、グラビトンボーグから発射された物体が潰れ、爆ぜた。

「きやあつ…!?!」

あまりに急なことで、対応の遅れた美琴は吹き飛び、その場を転がる。慌てて立ちあがろうとするも、覚えのあるノイズが辺りを駆け巡った。

「がっ…!?!」

「使エルト思イ・再現シテミマシタ・>」

「キャパシテイ…ダウン…!?!」

かつて打倒した、テレスティーナⅡ木原Ⅱライフラインが用いた超音波兵器。

ノイズを発することで能力者の演算を妨害するソレを前に、美琴は無力であった。

しかし、ソレを使えば、黒子らもタダでは済まないはず。

だというのに、彼女らは一切苦痛に喘ぐことなく、そこに佇んでいた。

『星のカービィ』ニハ・効力ナイデシヨウガ…>。コノ都市ノ能力者ノ捕獲ニ・大イニ貢献スル・コトデシヨウ…>。

…アノ生命体ヲ排除シナクテハ・ワタシノ目的ハ果タセマセン…>。

アナタニハ・ソノタメニ働ク・究極ノ兵器ニナツテ・イタダキマス…>」

「星の…カービィ…?!」

聞いたことのない名前だ。

いや、カービィという名前なら知っている。いけすかないツンツン頭と一緒にいた、あのまんまるピンクがそんな名前だったはず。

あの人畜無害そうなマスコットの何を恐れているのだろうか。

可愛さに弱い、などというアホみたいな弱点がない限り、恐れる理由が見当たらない。走る苦痛に喘ぎながらも、美琴は星の夢が支配した黒子を睨みつけた。

「デハ・改造ヲハジメマシヨウ……」。

3……2……1……Go!

今、ココロ無き悪意が、牙を剥いた。

◆?◆?◆?◆?

「……まさか、助っ人がお前なんてな」

「ぼよっ…」

時は少し進み、ンギユア基地を撃退した後。

ンギユア基地から現れたコア・カブラーを片手でスクラップに変えるという、ヒーロなのかヒーローなのかよくわからないサプライズ登場をかました一方通行が、当麻たちの前に立っていた。

当麻は先ほどの光景と合わせ、一方通行が助っ人だという事実になんとも言えず、苦

笑を浮かべる。

一方通行はというと、事情をあらかた聞かされたようで、今回ばかりは役に立ちそうもない当麻を前に、嫌味つたらしく笑みを浮かべた。

「オイオイオイオイ、劣等生クウン。今回に限って『パーフェクトな役立たず』なんだからオ？」

泣いて喜ぶ。学園都市一位サマが直々に手エ貸してやつからよオ」

「くう……っ！俺の右手がキカイにも通用すれば……っ！」

前のお返しと言わんばかりに、ここぞとばかりに嫌味を畳み掛ける一方通行。完全に舐められている。

しかし、ンギュア基地及びコア・カブラーを見事撃墜してみせたのは、カービィと駆けつけた一方通行の二人なのだ。

反論しようのない事実を前に、当麻は何の役にも立ちそうのない右手を呪った。

「わあ……。すごーい……っ！って、自己顕示欲が透けて見える船にミサカはミサカは子供っぽく感心してみたり！」

「……私もこのくらいの妹がほしーなー、なーんて……」

「上条さんはこれ以上の床面積の圧迫を許しません」

妹達らしく、一言余計な打ち止めを見やり、インデックスが修道女としての矜持など

かなぐり捨てたような我儘を当麻にねだる。

当麻はいろいろツツコミどころの多いその願いをバツサリと切り捨て、打ち止めに振り回されて疲れ切ったのか、遠い目をした一方通行に目を向けた。

「…大変そうだな、そつちも」

「……チツ」

謎のシンパシーを感じた。

以前、相対した時の冷酷さはカケラも見えず、ただの突き放し気味な子供のように思える。

ちよつと会わないだけで、随分と印象が変わるモノだな、と思つていると。

「みんな、作戦会議を始めるだス。それぞれ、席に着いて欲しいだス」

メイスナイトの声が響いた。

そちらを見ると、メタナイト、デデデ大王、スージーの三人は既に椅子に腰掛けていてる。

皆が慌てて席に座る中で、一方通行が当麻を指差した。

「この役立たず、居ても意味あるのか？」

「お前俺のこと嫌いなのか!？」

「当たり前だろ」

「恩着せがましくなるから言わなかったけど、応急処置したのも病院に担ぎ込んだのも俺なんだぞ?!」

「へたくソ過ぎて逆効果だったろ。」

「そのまんまるピンクがカバーして処置したのは知ってたんだからな」

「その節は誠に申し訳ありませんでした」

「落ち度のありすぎる当麻では、この舌戦に勝つことは難しかった。」

「深々と頭を下げる当麻に、「調子狂う」と不機嫌そうに告げ、席に着く一方通行。」

「当麻もまた、少しばかり躊躇ったものの、おずおずとドーナツをほおぼるカービイの隣に座った。」

「ぼよっ」

「あ、ああ、ありがとう…」

「口元を汚しながら、ドーナツの一つを当麻に差し出すカービイ。」

「どうやら、落ち込んだ当麻を慰めようとしたようだ。」

「当麻はイチゴソースがたっぷり塗られたソレを受け取ると、一口齧った。」

「ミサカも！ミサカもドーナツ食べたーいって、ミサカはミサカは空気も読まずおねだりしてみたり！」

「私もドーナツ欲しいんだよ！オールドファッション、フレンチクルーラー、マラサダ、

チュロス…、あと、えっと、んつと…、とにかく思いつくかぎりいっぱい！」

「はいはい。食堂に案内するんで、コツチについてきて欲しいです」

「カービー。お前は会議が終わってからな」

「ぼよお…」

ソレに反応してか、精神が幼い二人が大声で駄々を捏ねる。

カービーが三人に増えたみたいだ、と辟易しながらも、メイスナイトは二人を連れ出す。

食欲に忠実なカービーもそつちについて行こうとしたが、当麻がなんとか食い止めた。

「メタさん、なんかウズウズしてるけど」

「………気にするな。作戦会議を始めよう」

余談だが。その後、佐天が思いつく限りのドーナツを大量に食べるメタナイトを目撃したとかしなかつたとか。

◆? ◆? ◆? ◆?

現在、初春飾利はどうしようもない無力感に打ちひしがれていた。

頼れる親友たちは訳もわからない事情で追放され、猛抗議も意味をなさず。その直後に起きた、謎のロボットたちによる襲撃により、パートナーは攫われ。挙句、先ほど連

絡したばかりだった友人もまた、行方不明になってしまったという。

仲の良い皆が次々と学園都市から姿を消す中で、健全な心なんて保てる訳がなかった。

「……もうっ！なんでこんな訳の分からないプログラムで動いてるんですかこれ!」

初春は接收したメタナイトボグのプログラムの前に、苛立ちを込めた叫びを放つ。

持ち前のハッキング技術で、ファイアウォールの突破は容易ではあった。が、中に眠っているデータがあまりにもデタラメ過ぎて、得られた情報は少なかった。

初春は気づかなかったが、「星の夢」はメタナイトボグらに全てのファイアウォールが突破された時、プログラム配列をまったくデタラメなものに書き換えるという隠蔽措置を仕込んでいた。

というのも、今回の襲撃に使用されたキカイ兵器は、地球の素材でも再現できるよう、大幅にデチューンされていたのである。

プログラムに関しても同じことで、プレジデント・ハルトマンが作り出した特殊合金：「ハルトニウム」がなくては、どうしても限界がある。

とは言っても、コインの超電磁砲を切り裂くことは出来るので、地球製品と比べてハイスペックなことには変わりないが。

そんな地球規模のスペックだからこそ、初春程のハッカーであれば、星の夢の所在を

暴くことが出来てしまう。

そのため、誰にも邪魔されない場所で、能力者の改造を狙う星の夢は、所在を誤魔化すための処置を取ったのだ。

しかし、地球でハルトニウムが製造できない訳ではない。今回、キカイ兵器に使われなかったのは、ただ単に、製造が追いつかなかっただけである。

製造できた分は、改造した能力者を制御するための装置に優先した……というのが、デチューンの真相であった。

無論、そんな裏事情を知る由のない初春は、スクラップになったメタナイトボウグの返却手続きを終え、どさつ、と座り込む。

「……んな時、佐天さんが居てくれたら……」

追放された友人のことを思い浮かべ、弱音を吐く初春。佐天の底抜けの明るさがあれば、この不安も吹き飛ぶかも知れない。

そんなことを考えるも、結局は無い物ねだりだと思いを切り上げ、ため息を吐いた。と。その時だった。

「やあ。君が『初春飾利』かな?」

黒いローブに赤い髪を揺らす少年が、卵型のシルエットと共に現れたのは。



## STAGE : 5 逆襲

その日、学園都市は恐怖に包まれた。

キカイ兵器が蹂躪を終え、数時間後。『改造能力者』らが襲撃したのだ。

暗部からも漸く目が覚めたものの、既に遅く。実にその半数が改造され、その尖兵へと成り下がった。

能力者、無能力者、警備員、風紀委員、暗部などの確執を問わず、残った者たちは徒党を組み、それらに応戦。

しかしながら、学園都市が誇るレベル5は7人のうち、二名が行方知れず。残った5名も、そのほとんどが改造能力者として街を破壊する始末。

学園都市は既に、砂上の楼閣に等しかった。

「わーっ!?!わわっ、大王さまを探しに來ただけなのにいー!!」

崩れゆく常盤台中学にて、なんとも間の抜けた悲鳴が轟く。

校庭にて、泣き言を吐きつつ、改造能力者に立ち向かうのは、青いバンダナを巻いたワドルデイだった。

彼の名は「バンダナワドルデイ」。非力なワドルデイらの憧れであり、最強のワドル

デイと名高い、カービイのともだちである。

デデデ大王を探すべく、意を決して学園都市を訪れたというのに、あんまりな仕打ちだ。

ワドルデイはバイザーで顔も見えない少女を前に槍を振るい、能力で作り出したであろう水の弾幕を打ち消す。

「なんでハルトマンワークスカンパニーの兵器がいるのー!？」

態度だけ見ればなんとも情けないが、繰り出す槍術はあまりに洗練されている。

どれだけ相手が機敏に動こうとも、的確にキカイの部分のみを攻撃し、その破壊を指すバンダナ。

デデデ大王曰く、これで自信さえあれば一人前なのだが、非力なワドルデイであった期間が長かったためか、自己肯定感が極度に低いのが玉に瑕。

襲いかかる水の弾幕を華麗に避け、バイザー部分を刺突し、軽く破損させるバンダナと、そこへ、新たな刺客が訪れ、バンダナの顔面に蹴りを叩き込もうと迫る。

「ウガオツ!!」

が。それは、剛腕により吹き飛ばされた。

吹き飛ばしたのは、バンダナと共に行動していた獣王レオンガルフ。

彼らは背中合わせに立つと、挟み撃ちの形でこちらを睨む刺客らを真っ直ぐ見やる。

否、挟み撃ちの形ではない。次々と改造能力者らが現れ、あつという間に幾重にも重なった包囲網が敷かれてしまった。

「わ、わわっ…!? ウソでしょ…!? こんなにいるのお…!?」

「むう…、キリがない…」

バンダナは弱音を吐いたものの、すぐさま持ち直し、槍を握る手に力を込める。

レオンガルフもまた、己を奮い立たせるように軽く爪を擦り合わせ、「ガルルル…」と唸り声をあげた。

◆? ◆? ◆? ◆?

ハルバードの艦橋にて。

戦士たちが戦いに向けて牙を研ぐ中で、非力なワドルデイ、ビースト軍団らが、「せめて自分達にできることを」と言わんばかりに、作業に勤しむ。

重々しい音を立てながら、ハルバードベースを隠す岩が割れ、月明かりを取り込んだ。

「リアクター ver. 9、出力良好!」

「バランス調整0003だス!」

「反重力プラントチェック…、オールオッケーです!」

「セイル解放! ソーラレベル288!」

「いつでも離陸可能です!」

乗組員たるメタナイトらが動作確認をとると、主人たるメタナイトへ、指示を仰ぐように目を向ける。

メタナイトは軽く頷くと、剣を抜き、艦橋の窓に見える空を指した。

「戦艦ハルバード、テイクオフ!!」

一瞬の浮遊感。この艦橋からは決して見えぬだろうが、海水浴場にて、今夏最後のバカンスに来ていた観光客らは目をひん剥いたことだろう。

あまりにも巨大すぎる黒色の戦艦が、空を飛んでいたのだから。

復活した戦艦ハルバードは、風を巻き起こしながら、学園都市へと方向を修正する。数秒もしないうちに学園都市の方角を捉えると、ハルバードは後部にあるノズルから火を噴き出し、真つ直ぐ進み出した。

「くうー……。この一ヶ月、本当に長かったですねえ……っ!」

「ああ、ああ……っ!この艦橋からこの星の空を見ることができるとは……!」

「お前ら、感動するのは後だ!今は星の夢を倒すまで、気を抜くんじゃない!」

「バル艦長が言っても説得力ないだす。誰よりはしゃいでたくせに」

「な、なにおうーう!?!」

なんとも緊張感のないやりとりが繰り返される中で、無理矢理ついてきた打ち止めとインデックスが、艦橋から見える空を見渡す。

ガラス越しではあるものの、星が見えるなんとも幻想的な空間を前に、二人はきらきらと目を輝かせていた。

「とうま、カービィ！星が空いっぱいなんだよ！満天の星空なんだよ！」

「学園都市じゃ永遠に見られなさそうな絶景だよって、ミサカはミサカは興奮のままにあなたに見ることを勧めてみたり！」

「ぽよおっ！ぽよっ！」

「緊張感のカケラもねえな、テメエら」

「まあ、こういう奴らだし……」

まだポップスター特有である究極の楽観的思考に慣れてないのか、一方通行がこめかみに青筋を浮かべながら威圧する。

が。カービィらはそれに一切動じず、流れる星空に見惚れていた。

デデデ大王も同じように、ガラス越しの星空を見て、豪快に笑う。

「がっはっはっはっ！ポップスターの星空もいいが、こっちの星空も見ものだな、お前たち」

「そーですなー……。サテンちゃんやウイハルちゃんたちにも、ポップスターの夜空を見せてやりたいぜ」

「そんなに綺麗なの？」

「おうともさーこの星とは違って、どこにいても満天の星空が見れるんだぜ？」

「へー…。食べ物も美味しいし、景色も綺麗だし、住んでる人はみーんな優しくて…。天国みたいな星だね」

クラツコが自分のことのようにポップスターの絶景を自慢すると、佐天はその景色を思い描き、眩くように溢す。

と。デデデ大王は笑いながら、ばん、ばん、と佐天の肩を叩いた。

「だからこそ、ポップスターは『きせきの星』と呼ばれておる！」

この星の部下第一号のお前には、オレさまの城がある『マウントデデデ』から見える、デーリシヤスでデーンジヤラスでデーラックスな星空を見せてやろうではないか!!」

「おー！デデさんのお城も見てみたいーい！」

皆が遠足前の子供のようにきやいきやいと騒ぐ中で、思考を巡らせていた一方通行は苛立ちを込めてつぶやく。

「お気楽なバカしかいねエのか、この船は」

「お気楽なバカだからこそ、なんの関係もないこの星のために命張ってくれてるんだ。いいヤツらだろ？」

そこそこの付き合いを続けてきた当麻が、一方通行に問いかける。

善意など向けられたことの無い一方通行は、拗ねたように顔を逸らし、悪態をついた。

「…反吐が出るほど善人ヅラしやがる。気に食わねエ」

「いいじゃねえか、善人ヅラ！悪人やってるよか、よっぽど気分がいいぞ？」

お前も、これを機にやってみるか？」

「……………今さら過ぎんだろオが。一万も殺してんだぞ」

「だからって、『善人』を諦める理由にはならねーと俺は思うぞ」

「……………調子狂うから話しかけんな、劣等生」

当麻のあまりにめちやくちやで、身勝手な感情論を前に、一方通行は背を向ける。

当麻はこれ以上何を言っても、一方通行が聞く耳をもたぬことを悟り、「それじゃあ、頼むな」とだけ告げ、側を離れる。

以前までは、学園都市に渦巻く闇の渦中にいたというのに、たったの数日で、周りが随分と明るくなったような気がする。

柄にもなく、そんなことを考えていると。

けたたましい警報音が鳴り響いた。

「何が起きた!?!」

「学園都市を覆い隠すように、『ハートフル・シエル』が張られました！

学園都市まであと2分！このままいけば進入は不可能！作戦が大きく狂います!!」

ハートフル・シエル。星の夢が展開する、あらゆる物理的干渉を断絶するバリア。い

くらハルバードとは言えど、それを破る程の設備は整っていない。

しかし、焦ることはない。

そのために、最高の戦力を整えていたのだから。

「頼むぜ、最強。ドンとかましてくれ」

「言われるまでもねエ」

◆? ◆? ◆? ◆?

「そ、そんな…。なんだよコレ!？」

理事長たるアレイスターの生命維持装置のみが機能するだけとなった学園都市にて。

あまりに急激な崩壊から逃げ惑う彼らは、外界へと向かったものの、そこに聳え立つ

絶望に戦慄いた。

桃色のガラスのようなバリアが、学園都市と外界を断絶していたのだ。

その光景を見上げ、一人の少年が飛び上がり、渾身の力を込めて拳を放つ。

『すごいパンチ』っ!!』

彼の名前は削板軍覇。学園都市に存在する能力者の最高峰…レベル5の末席に座す少年である。名前通りのパンチという、なんともシンプルな一撃であれど、その威力は聖人すらも殴り倒すことが可能な程に強大である。

しかしながら、『ハートフル・シエル』を破るには、あまりにも弱過ぎた。がいい…ん、



と固い音が反響すると共に、削板の体が少しばかり震える。

彼はそのまま落下すると、真つ赤になつた右拳を押さえて叫んだ。

「いつ………てええええつ?!?!」

「そ、そんな…、嘘だろ…? レベル5ですら破れないのかよ!」

まさに絶望。削板が高く飛び上がっていたがために、この絶望の伝染は早かつた。

その場に呆然と立ち尽くす者もいれば、ヤケを起こしたようにハートフル・シエルをひたすら殴りつける者、果ては逃げ場もないと言うのに、何処かへと逃げようとする者、蹲つて現実から逃げ出す者など、阿鼻叫喚が広がる。

しかし、削板軍覇の辞書に、「諦める」などという言葉はない。彼は再び飛び上がり、何度も、何度もハートフル・シエルを殴りつける。

だが、悲しきかな。一切の亀裂も走らず、絶望はそこに佇んでいた。

と。そんな時。彼の目に、なにやら小さな点が見えた。

点が段々と接近し、人の形をしていることを悟つた次の瞬間。

「怪我したくなきやア退きやがれエ!!」

ハートフル・シエルが轟音と共に破裂した。

## STAGE : 6 ヒーローズ

「ハートフル・シエルの破壊を確認！

30秒後、学園都市領空に突入します！」

「総員、救助の用意を急げ！

ケミトリイ、ビビツティア、コックカワサキ部隊は治療の準備！バグジー、ボンカー  
ス等のチカラ自慢部隊は担架の用意だ！」

『『はっ!!』』

メタナイトの指示に従い、なんともファンシーな見た目の救助部隊が慌ただしく動  
く。

そんな中、パルルは小さく詠唱を組み立て、何人かのワドルディらの協力のもと、儀  
式を行っていた。

「ドーム式バリア完成までの時間は?」

「パルル殿曰く、残り45秒です！」

学園都市突入に間に合いません！」

「遠距離部隊、迎撃用意！ヘビローブスターver. 2の全機投入も惜しむな！15秒、

なんとしてでも持ち堪えろ!!」

今回の作戦を立てたのは、生粋のお人好し集団、ポップスターの住人らと、学園都市のヒーローたちである。重要視されているのは、なにも星の夢の破壊だけなわけがない。

日常を奪われ、逃げ惑う学園都市の住人らの救助もまた、優先すべき事項であった。生命がそこらのペンペン草の如く復活し、どんな重傷も食べ物を食べるだけで治るポップスターとは違い、この星において怪我は数日…酷い時は残りの一生ずっと引きずるようなものである。

ソレを聞いたお人好し集団の頭に、怪我人を捨て置くなどという思考は最初から存在しなかった。

「スージー、あとの指揮は任せた」

「ええ。任せましたわ、剣士様」

「背筋が凍る。やめてくれ」

「あら。緊張をほぐそうと思ったのに。ザンネン」

かつて改造されたトラウマが蘇ったのか、珍しく食い気味で懇願するメタナイト。ソレに対し、スージーは軽く肩をすくめ、マイクを手を取った。

「作戦通り、現時点より本艦の指揮権はこの私、美人秘書スージーに移りますわ!!」

あらゆることにおいて思い通りに行く……なんて奇跡はあり得ません！

総員、気を引き締めてくださいまし!!」

「は、いっ……」

いきなり指揮権が他人に移れど、それが敬愛する主人の意志ならば異論はない。

裏切り（何処その道化師や魔術師は除く）や軋轢などといった、どろどろとした人間関係のトラブルとは無縁の彼らだからこそ成せるチームワークである。

スージーも少しテンションが上がっているのか、かつてのキャリアウーマンが如きビジネス口調でテキパキと指揮を取り始めた。

「これより、私はカービィらと共に学園都市内部に突入し、星の夢の元へと向かう！

我が剣が……などと傲慢なことには言わない！

私たちがヤツを打ち倒すまで、なんとしてでもこの戦艦ハルバードを死守してくれ  
!!」

メタナイトは言うのと、マントを翻し、その場から姿を消す。

残されたのは、詠唱を続けるパルルとスージーのみ。

二人は視線を合わせると、互いに不敵な笑みを浮かべてみせた。

◆? ◆? ◆? ◆?

その頃、甲板にて。

デデデ大王とその一味が立ち並び、各々の獲物を手に取る。無論、デデデ大王と佐天、クラッコを除く全員がフレンズハートによる強化を受けており、準備は万端。

デデデ大王は隣でハンマーの調子をチェックする佐天に、大声で喝を入れた。

「ハンマーの手入れは怠っておらんな!!」

「もちろんです!」

「ミサカやクロコが操られておつたら!」

「ぶっ飛ばしてから考えます!」

「サテンちゃん…。立派になって…」

ものの見事にデデデ大王の英才教育に染まり切った佐天を前に、付き合いの長いクラッコは隻眼に感涙を浮かべる。

ずびつ、と、ここにいる殆どが鼻もないのに鼻を啜る音が響き、皆が感涙を流す中。

デデデ大王がハンマーの柄を地面に叩きつけた。

「お前たち! ジャクハイの成長を喜ぶのはアトにしろ!! 今は何をすべきか、声を揃えて言ってみろ!!」

「「操られてるヤツをカタッパシからぶっ飛ばします!!」」

「OKだお前たち! オレさまに続けえーっ!!」

デデデ大王は佐天を背におぶると、そのまま甲板から飛び降りる。

部下たちもまた、滝のように甲板から飛び降り、阿鼻叫喚の学園都市へと降り立つ。しかし、そんな格好の的が狙われないはずもない。

目敏く気づいた改造能力者たちが、デデデ大王に続く滝目掛けて弾幕を張る。

いくらフレンズハートで強化したと言えど、カービィやデデデ大王ほどのタフネスはなく、有体に言えば雑兵にすぎない彼らにとっては、手痛い一撃となろう。

しかしながら、ここにいる誰もが、カービィと戦い続けた歴戦の戦士であることも事実。

パラソルワドルディらがアイアイパラソルを、ネスパーとロッキーらが力を合わせ、フレンズ技…『ポルターガオブジェ』を発動させ、その弾幕をあつさりを受け止めた。

「損害は!?」

「ナシです!」

「よし、上出来だ! 『あの時のお返し』も含めて、地上にいるヤツラを全員ぶつ飛ばすぞ!!」

「「おーっ!!」」

今、6年越しのデデデ大王たちの逆襲が始まった。

◆? ◆? ◆? ◆?

「力技なら右に出る者はいないな」

艦橋から飛び立ったメタナイトは、滝のように落ちていくデデデ大王の部下を横目に、宝剣ギヤラクシアを構える。

迫り来るのは、遠距離攻撃手段を持たない、改造能力者たち。

備え付けられた反重力発生装置で飛んでいるのだろう、彼らはメタナイトにも目をくれず、ハルバードへと真つ直ぐに向かう。

内部に侵入して破壊する腹づもりなのは、透けて見えた。

「この私が、それを許すと思うか？」

しかし、メタナイトはソレを牽制するように、装置に軽く切り傷を入れる。

こんな場所で倒してしまつては、落下死は免れないだろう。

しかしながら、敵がまんまとこちらの思惑に乗って追いかけてくるなどということ  
は、万が一にもあり得ない。

ならば、強制的に地上に移動させるまでだ。

「生憎だが、私とて余裕がない。

傷の一つや二つは覚悟してもらおう」

メタナイトは言うど、音を置き去りにして、改造能力者たちに迫った。

◆?◆?◆?◆?

「どういう風の吹き回しですか、と、ミサカは複雑な心境であなたに問いかけます」

「……ちが聞きてエ」

改造能力者を相手に鎧袖一触……否。袖すら振らずに薙ぎ払う一方通行は、『たまたま』助けた御坂妹を横目に悪態をつく。

蝶の髪飾りを付けた彼女は、かつてバルフレイナイトに取り込まれた個体。一方通行にとっては、打ち止めに次いで相手にしたく無い個体である。

殺さない程度に出力を調節し、洗脳装置を片手で破壊する一方通行。

一方で、御坂妹は手も足も出ないのか、相手の攻撃を避けるので精一杯だった。

「お前みたいになザコにやアキツいか」

一方通行は御坂妹に迫っていた改造能力者の腹に蹴りを叩き込み、くの字に曲がった影響で近づいた頭を驚掴みにする。

流れるように地面に叩きつけると、装置だけが器用に破壊され、改造能力者だった少年が解放された。

「……礼は言いません。あと一万回の援護をお願いします、と、ミサカは至極真つ当な権利を主張します」

「そオカ。そりやア……、あつという間に超過しちゃうかもなア!!」

一方通行は吼ええると、地面のベクトルを操作して天然の槍を作り出す。

せり出たソレが改造能力者のバイザーを次々と破壊するが、ソレを補充するように、



一方通行たちを更なる脅威が取り囲む。

しかし、相手が機械で制御された能力者である以上、彼に敵は無い。

望まない形ではあるが、一方通行は今、確かに無敵の称号を冠していた。

「……っ！」

が。その快進撃を阻止するべく、送り込まれた刺客の一撃が、一方通行の頬を掠める。つう、と以前のトラウマを再起するに、切り傷から血が滴る中で、一方通行は目の前に立つ改造能力者を見やった。

明らかに、他の能力者とは毛色が違う。

機械ですつぽり目元が覆い隠されているため、顔はわからないが、その能力には覚えがあった。

「第二位……。オイオイ、随分と落ちぶれたモンだなア。

あんまりにも哀れすぎて……。く、くかかつ、くく……。笑つちまうぜ」

一方通行はおかしくて仕方がないと言わんばかりに、これ見よがしに笑って見せる。

しかし、相手は機械に支配された能力者。煽りに怒り狂うココロなど、とうの昔に捨て去っている。

相手からのアクションが無いことに、気が萎えた一方通行は、先ほどとは打って変わって、怖気がする程に凄絶な表情を浮かべる。

「来いよ、三下。テメエの目エ、ぶん殴って覚まさせてやらア」

御坂妹には、その姿に上条当麻が重なって見えた。

◆◆◆◆◆

「どえええっ!? こ、こんな無茶苦茶理論を30分で理解しろって言うんですかあ!」

「イーカラはよヤレ! キミのアタマならホンキ出しやあソク終わるダロオガ!!」

その頃、学園都市郊外に隠された空色の帆船: ハルカンドラの遺物『ローア』にて。

初春飾利はローア船内に広がったプログラム理論の前に、激しく困惑していた。

理解できないことはないが、どう言う発想力があれば、こんなことを思いつくのだと

思うほどには出鱈目が過ぎる。

あまりに大き過ぎるカルチャーシヨックを前に、初春は脳がパンクしそうだった。

「…僕は科学のことは一切わからないぞ。

何故、ここに呼ばれたんだ?」

背後で様子を見守っていたステイルが、作業を続けるマホロアに問いかける。

マホロアは猫をかぶっている間は一切見せない、苛立った顔でステイルの方を振り向

いた。

「アレは魔術的アプローチがクソみたいにゼージャクなんだヨオ!! ダカラ、ハッキング用の魔術を二人ガカリのソッコで完成させようと呼んだんだヨオ!!」

デモ、ヤツのコンピュータ内で魔術を作る二ハ、まずは科学でヤツのプロテクトをコジ開け、マルハダカにする必要がアル!!

今死ぬ気でプロテクトを破ってるケド破っても破ってもキリがネーンダイチイチ聞いテジャマすんナ黙つテ見てろジョージャク!!」

「……あ、ああ、うん。すまない」

捲し立てるような説明だったのと、ステイルが科学に無知なために言ってる内容はよくわからなかったが、どうやら上手く行つてはならないらしい。

マホロアはギリつ、と、口も見えないのに歯軋りのような音を立て、吐き捨てた。

「クツソ！アイツ、データを更にプロテクトが強固な本体に移しやがッタ……！マターから作業し直しダヨオ……っ！」

サイアクつてノハ、一秒ゴトに更新するみたいだネ……！」

「……わ、私、頑張つて覚えます！」

「頑張らなくてモ覚えロブツ飛ばスゾ!!」

「ひ、ひやいつ!!」

ステイル曰く、マホロアたちの戦いは、なんとも地味な絵面であった。

◆?◆?◆?◆?

空に浮かぶハルバードを落とそうと、さまざまな能力が飛び交う中。



暫くして、カービィは「ぼよ」やら、「ぷい」やらの喃語モドキで構成された文章を繰り広げる。

慰めている…というよりは、説明しているような口調だが、残念。カービィの言葉がわからない当麻には何も伝わらない。

と。当麻の懐に入っていたエフィリンが、口を開く。

「だって、トーマはナツトクしないでしょ？」

ともだちが困ってるのに、なにもしないなんて、トーマがトーマを許さないんじゃないかって思ったんだって」

眩しいほどに優しい言葉に、当麻はきよとんと目を丸くした。

たしかに、上条当麻はヒーローである。しかし、彼にとつてのヒーローもまた、ここに存在していた。

当麻はカービィの優しさに応えるように、飛んできた流れ弾を右手で打ち消し、笑って見せる。

「…っしー！行くこう、相棒！」

学園都市をこんなにしやがったポンコツマシンを、『四人』でぶっ壊してやろうぜ!!」

「ぼよっしー！」

ぎい、と駆動音を立てて、カービィの「キカイのともだち」が頷く。

ヒーローたちが学園都市に降り立つまで、あと数秒。

## STAGE : 7 闘争

「なんぼの…、もんじゃあああいつ!!」

がんつ、という音と共に、改造能力者の機械にハンマーが叩き込まれる。

軽々と重厚な木槌を扱う佐天は、崩れ落ちる能力者を足場に飛び上がり、周りを囲んでいた能力者の攻撃を避ける。

空では身動きが取れない。そう判断した改造能力者がこぞって攻撃を放つ。

しかし、ここにいるのは、非力な無能力者ではない。歴戦の大王から直々に戦術を叩き込まれた、一人の戦士である。

力いっぱい木槌を握りしめ、遠心力で体を遊ばせることで攻撃を掻い潜り、地面を叩く。

ぐらり、と振動で改造能力者がバランスを崩すのを見逃さず、佐天は火炎こそ纏わぬものの、鬼を殺す勢いで、その機械の顔面にハンマーを叩き込んだ。

「はい次っ！」

そこに以前まで能力の有無で悩んでいた少女の姿はなく、立っていたのは、情け容赦が微塵もない修羅だった。

しかし、戦士として未熟なことは変わらず。その脳天を貫こうと、能力による狙撃が向かっていることに気づけなかった。

「サテンちゃん、オレに乗れ！ ジュゲムみたいな感じで!!」

「へ？ あ、はいっ!」

クラツコの声に飛び上がり、上に乗る佐天。

狙撃は地面に着弾し、放った改造能力者のバイザーに、スナイパーの能力を持つフレインズ：「スパイナム」の放った『マジカ・スターアロー』が着弾した。

「クラさん、ありがと！ もう降りるね!」

「いや！ オレの必殺技に巻き込まれちゃうから、もうちよつと待つててくれな!」

クラツコは言うど、ずもも…と改造能力者だけが蔓延る一帯に広がる。

いつもの真っ白なわたあめカラーは何処へやら、曇天を思わせるほどに黒く染まると、ばちばち、と音を立てて帯電した。

「食らいやがれ! 『天からの災雷』!!」

刹那。豪雷があたり一面に降り注ぐ。

直撃した者がタダで済む訳もなく、バタバタと人が倒れる音がそこらじゅうで響いた。

佐天は恐る恐るクラツコの真下に広がる光景を見やり、苦笑を浮かべた。



「こんなん使えたんだ」

「おう！こないだ、フロラルドの親戚に教えてもらったんだ！まー、ケツコー疲れるから、連発はムリなんだけどよ！」

「へー…つて、クラさんごめん！」

「へ？わぶつ?!」

佐天はある物を視認した途端、咄嗟にクラッコの脳天にハンマーを叩き込む。

クラッコはいきなりのフレンドリーファイアに対する驚きと、脳天に走った痛みのみあまり、思わずよろよろと墜落する。

何をするんだ、と怒鳴ろうとして、クラッコは上を見上げて顔を青くした。

そこには、クラッコを両断するかの如く、薄いガラスが『転移』していたのだから。それにダラダラと冷や汗を流し、クラッコは生唾を飲み込む。

「…こんな芸当出来んの、一人しか思い浮かばねーんだけど」

「奇遇だね。私も」

ばつ、と二人がそちらを見やると。

無骨な機械に身を覆われた白井黒子が、バイザー越しの生気のない顔で見つめていたのが見えた。

「…クラさん、他の援護よろしく」

「勝てんのか?」

「モチのロン! デデさんたちと一緒にバルフレイナイトに勝ったの、クラさんだって知ってるじゃん!」

「なら心配いらねーな! 思いっきりぶっ飛ばしてやれ!!」

クラッコは言うのと、佐天を下ろし、何処かへと飛び去っていく。

落下する佐天はそれを見届け、咄嗟に背後にハンマーを振るう。

がきん、という音を立て、転移した黒子の武装から展開した剣とがちあつた。

「白井さんごめん! 今からぶっ飛ばす!!」

◆? ◆? ◆? ◆?

「地べたの味はどオだ、第二位。

なんつっても…今のテメエは、屈辱を感じるココロすらねエみてエだな」

バチバチと音を立て、ショートする機器を外すこともせず、地面に転じて痙攣する少年の前に、一方通行は嘲る。

ただ、その顔は笑っていない。

心の底から湧き出る憐れみを向け、機器を一つずつ引き剥がす一方通行。

苦悶の声ひとつあげない様に彼は舌打ちし、その顔を片手で握り、持ち上げる。

本来、彼の筋力ではこんな芸当は逆立ちしても無理なのだが、ベクトル操作がそれを

可能としていた。

「哀れだよ、お前。『自分からそオなった』ンだろ」

一方通行には確信があつた。

第一位だからこそわかる。学園都市第二位という…否、レベル5という称号は安くない。

それこそ、先日の襲撃に使われたキカイに囲まれた程度では、その優位は決して揺らがないはずなのだ。

と言うのに、その二位があつさりと捕まり、改造されている。戦闘向けの能力であるにも関わらずだ。

それに加え、人質という手を通じるほど、甘い性格をしていないのも人伝から聞いた。導き出される答えは、すでに絞られていた。

「何を考えてたかは知らねエがよオ…」

『その程度』で『学園都市最強』が揺らぐとか思つてたのか？  
ばきつ、という音と共に、少年の体が崩れ落ちる。

バラバラと落ちる機械の破片を踏み躪り、一方通行は踵を返した。

「退屈凌ぎにもなンなかつたな」

◆?◆?◆?◆?

「デデデ大王、アレに当たるなよ。」

いくら我々がポップスター出身だからと言って、ちよつと怯む程度じゃすまないからな」

「当たってたまるか!!」

光線が飛び交う中で、デデデ大王とメタナイトの応酬が繰り広げられる。

相對するは、キカイに支配された、実年齢よりも大人びて見える少女。

学園都市第四位の称号を冠する少女は、驚嘆すべき精度で光線を放つ。

建物を簡単に真つ二つに叩き割る威力を誇るソレは、当たればタダでは済まないだろう。

人間が当たれば真つ二つ。ポップスター出身も、一度循環することは間違いない。

キカイとなった少女が躊躇いもなく放つソレを掻い潜り、メタナイトが少しばかり顔を顰める。

「…仮面が少し欠けてしまった。予備は少ないというのに…」

「しよつちゆう割れとるだろうが!!」

デデデ大王はツッコむと共に、光線を掻い潜り、少女の懐に入り込む。

しかし、少女は自爆覚悟で光を顕現し、デデデ大王に牙を剥いた。

「つぶねえな!!」

デデデ大王は少女の顔面にハンマーを叩き込み、脳を揺らすことで発動を阻止する。吹っ飛んだ少女は、キカイによってありえない挙動で受け身を取り、全方位に向けて光線を放つ。

以前、カービィが対峙した、カオス・エフィリスが放ったような光線の雨。

デデデ大王はソレを前にハンマーを空へと投げ捨て、四つん這いになって見せた。

「ウガアアアオオオオオッ!!」

野獣のように吼え、巨体からは考えもつかない速度で雨の中を駆け巡るデデデ大王。

メタナイトはそれに驚嘆しながらも、同じように雨の中へと突っ込み、襲い掛かる光線を次々と避けて見せる。

が、しかし。急激に光線が屈折し、デデデ大王やメタナイトの進行方向に降り注いだ。

「うおっ、危なっ!」

「くっ…」

二人は咄嗟に避けて見せたものの、光線の軌道変化は止まらない。

既に予想できなくなったソレを前に、デデデ大王らはなす術もないかと思われた。

が。そんな程度で心折れるほど、この二人はヤワな鍛え方をしていない。屈折する光線を避け、隙を窺い、互いに力を溜めていた。

これほど強力な能力ともなれば、相手には相応の負荷があるはず。

いくら外付けの頭脳で許容範囲を広げたとして、絶対に限界は来る。

二人の経験からの憶測は的中しており、数秒もするとバイザーが処理落ちしたのか、ぷしゅう、と音を立てて、煙が上がっていた。

その隙を見逃すほど、歴戦の戦士は甘くはない。

「合わせろー！」

「うむー！」

二人は手を取り合い、衝撃波を撒き散らしながら、くるくると回転し始める。

地面が抉れ、切り裂かれ、暴風雨のような攻撃の嵐が少女の体を襲う。

それだけではない。回転を終えた二人は勢いよく、少女の体に一撃を叩き込む。

瞬間。周囲の地面が捲れ上がり、火炎のような衝撃波が天へと昇った。

バラバラになった機械の残骸へ倒れ込む少女を背に、二人は踵を返す。

「これぞ、『月下無双』」

手を組んだ二人を止められるものは、この場にはいなかった。

◆?◆?◆?◆?

とあるビルの前。

星を撒き散らしながら、ワープスターがアスファルトに着弾する。

ズン、と重量が地面に降り立つと共に、ダイナミックな着地に慣れぬ当麻がすっ転ん

だ。

「あだっ」

「大丈夫？」

「ぼよっ？」

「いや、大丈夫だ。擦りむいてもない」

当麻は土埃を払いながら立ち上がり、カービイが乗り込む「キカイのともだち」の背に飛び乗る。

目の前にあるビルは、明らかに様相が変わっており、学園都市に立ち並ぶどの摩天楼よりも異彩を放っている。

少なくとも、地球上で見ることはないだろう、遥か彼方の技術の結晶。

当麻らは本能的に、ここが「星の夢」が潜む場所であることを悟った。

「ぼよっ！」

「おう！カービイ、頼むぜ！」

カービイの眼差しに、当麻は笑みを返す。

覚悟はできてる。例え役に立たなくとも、ともだちのため、足掻いてみせる。

当麻が拳を握ると共に、「キカイのともだち」もまた、拳を握る。

滑るようにアスファルトを駆け、「キカイのともだち」：「ロボボアーマー」は、当麻

がいつもそうするように、右拳を放った。

ビルの扉が壊れ、中の悪趣味な内装が、まるで怪物の口腔のように待ち構える。しかし、ヒーローたちは躊躇わない。互いに頷くと、彼らはそこへ飛び込んだ。

「カービィ、ちよつと伏せろ！」

「ぼよっ！」

当麻が叫ぶと共に、その右手に何かに触れ、派手に碎けるような音が響く。

あたりを見渡すと、やはりと言うべきか、警備の改造能力者がいた。

「全部で六人か……。殴り飛ばすには、ちつとばかしキツイ数だな……！」

「トーマ、トーマ！」

「どうした、カービィ？」

「くいつ、と当麻の服を引っ張るカービィ。」

当麻がなんだ、とそちらを見ると、カービィの手に小石が転がっていた。

「ぼよっ！」

「……コイツもコピーできるんだな？よし、わかった！」

当麻は言うのと、小石を前へ投げける。

ロボボアーマーは、がぱつ、と口を開け、口内に備わったスキャン機能で「せいのおスキャン」を行い、自らの体を変形させる。



愛嬌あるピンクのボディから、無骨さを強調させる茶色に染まり。

肩の大きさの割には小さく、チャーミングな両拳は、顔がすっぽり隠れてしまうほどに、頑強な岩のグローブへと変貌した。

無骨な武闘派、蔓延る敵を怒りのギガトンパンチでぶっ飛ばすナックルマシン。その名も「ロボボアーマー：ストーンモード」。

襲いかかる改造能力者らに、その剛腕から放たれたパンチが突き刺さる。

機械諸共吹き飛ば彼らに、当麻は引き攣った笑みを浮かべた。

「…よ、容赦ねー…」

「ぼよっ…」

立ちはだかる者には容赦ないとは聞いたが、ここまでとは思わなかった。

しかし、相手を気遣うような余裕など微塵もないのも事実。

倒れた彼らに向けて、「すまん」とだけ告げると、当麻たちはビル：否。オフィスの中を進む。

「…なんつーか、生活感がないな。プログラムの中を歩いてるみたいだ」

「おーほ」

当麻の言葉は的を射ていた。

そもそも、このオフィスは人間が活用することを完全に度外視している。

マシンにより完璧に調律されたオフィス。その歯車を回すのは人間ではなく、ココロを持たないキカイたち。

その中で生活感を感じろと言われても、土台無理な話であった。

「…で、カービィ。星の夢が何処かはわかるのか？」

「ぽよこ。」

「やっぱりか」

どうやら、カンで突っ込んだらしい。

確かに、このビルにあることは打ち止めより事前に聞かされたが、具体的な場所までは把握していない様子だった。

上に行くか、下に行くか。

ゲームのラスボスだったりすれば、お決まりのように最上階にいるのだろう。

しかし、相手はポンコツもいところなイカれたスーパーコンピュータ。

それが馬鹿正直に最上階にいるわけがない。

当麻はオフィスの地図すらもない不親切な設計に頭を掻きむしり、前を指差した。

「よーしっ！取り敢えず敵がたっくんいる場所に突っ込め！たっくんいるってことは入られたくない場所ってこった!!」

「ぽよこ。」

残念。この場に当麻の単純思考をツッコめるほど、頭の切れた者はいなかった。ロボボアーマーもまた、その言葉に頷き、滑るようにオフィスを駆けた。この宇宙の命運を託されたにしては、随分とお気楽なパーティーであった。

## STAGE : 8 真相

「よつとー…結構進んだな」

死屍累々。改造能力者がロボボアーマーの前に倒れ伏す惨状の中、当麻が流れ弾を打ち消しながら呟く。

両腕に展開する刃を振るう「ロボボアーマー：ソードモード」によって、迫り来る能力者がまるで紙吹雪のようにそこらに吹っ飛ぶ様を見て、当麻は苦笑を浮かべた。

「百人力どころの騒ぎじゃないな、コレ」

「ぶやあいー！」

「ボクも聞いてただけで、初めて乗ったけど…、『フェクト・エフィリス』の時に使われてたらつて思うと…」

「何だ、その強そうな名前？」

「んー…。ちよつとややこしいから、今度話すね」

オフィスを縦横無尽に駆け回り、鎧袖一触を体現するかのように猛威を振るうロボボが、かつての自分と対峙したことを考え、エフィリンは身を震わせる。

ロボボアーマーは一騎当千のチカラを有しているが、その素体となった「インベード

「アーマー」がそうであったかと言えば、否であった。

インベードアーマーには、搭乗者の能力によって機能を拡張するプログラムが組み込まれている。そこにカービイという「理解不能」という言葉がそっくりそのまま歩いているようなヤツが搭乗することによって、星の夢すら想定し得なかった脅威の出力を叩き出しているのだ。

夢も見なければ、ゴハンも食べない。ココロを奪われた能力者たちはもはや、星のカービイの敵ではなかった。

と。ロボボアーマーが足を止め、その場に立ち尽くす。

当麻がなんだ、と前方を見ると。

赤く染まり、ハルトマンワークスカンパニーのロゴが刻まれた扉が、どっしりとその場に構えていた。

「…なんか、いかにもな扉が出てきたな」

「ぼよっ！」

「大丈夫、怖がつてねえよ。…行こうぜ」

当麻の言葉に呼応するように、そこらじゅうから煙を噴き上げ、扉が動き出す。

扉が開き終わると、その奥には、なんとも幾何学的な紋様が走るキューブの集合体で形成された空間が広がっているのが見えた。

ロボボアーマーでその奥に進むと、ずんつ、と音を立て、立っている床がエレベーターのように降下していく。

なんとも不気味な空間を見渡し、警戒していると。再びの衝撃で、三人がロボボアーマーの上でバランスを崩した。

「うおっ!?!…つたく、とんでもなく不親切な設計だな、オイ…」

「ぼよっー!ぼよ、ぼよっー!」

当麻が呻く隣で、カービーが騒ぎ、眼前を指差す。

そこには、謎のキューブが菱形に揃った集合体が佇んでいるのが見えた。

一体なんだ、と構えていると、キューブが静かに変形し、奇怪な形の扉へと作り変わる。

その奥には、ドラマで見えるような社長室としか思えないガラス張りの空間が広がっており、不気味なほどに静寂が包んでいるのがわかった。

「…ここに、星の夢がいるのか?」

「多分だけど、いかにもってカンジがするね」

ロボボアーマーが、ずん、ずん、と音を立て、扉をくぐる。

急襲を警戒するも、通じないとわかっていのか、はたまた相手の余裕なのか、攻撃は飛んでこない。

皆がキョロキョロとあたりを見渡していると。ぱちぱちと、拍手の音が響いた。

しかし、何故だろうか。規則的なリズムを発するソレに、一切の生気が感じられない。当麻が気味の悪さに身震いしている。その拍手の主であろう、少しばかり体が紫がかり、表面が粘性の液体で塗れた卵型の男が、椅子をこちらに向けた。

「ようこそ、我がオフィスへ。」

ワシの名はプロダクトナンバーPH-8610、『クローン・プレジデント・ハルトマン』。

『Re. ハルトマンワークスカンパニー』の代表取締役社長である」

「……丁寧にも。上条当麻、ちよつと不幸なぐらいの高校生だ」

恐ろしいほどに起伏がない。

御坂妹と同じクローンとは言え、あまりに超然とした態度を前に、ごくり、と生唾を飲み込む当麻。

クローンハルトマンは「あー、オッホン」とわざとらしい咳払いをし、つらつらと言葉を並べた。

「フム。この星は文化どころか、礼節すら弁えていない、低レベルにも程があるヤバンジンどものソウクツであるな」

「デメエが言うか、侵略者」

「侵略……？ナニを言う」

——「星の夢」を招き入れたのは、この星の住民であろう？

「……………は？」

あまりに衝撃的な一言に、当麻は呆然と思考を止め、力を抜いてしまった。

今、クローンハルトマンは何と言った？この惨状を生み出したキツカケは、「星の夢」ではなく、この星の人間だということのか？

そんな考えが浮かんでは消え、結局のところ、答えは出ない。

ただでさえ出来の悪い頭が、上手く機能しない。

それに苛立ちを感じながらも、当麻はクローンハルトマンに問いかけた。

「……どういふこと？」

「フム。自覚もない、と。マツタク、規律を守らず、統率も取れていないヤバンジンのア  
イテは時間のムダであるな」

いちいち鼻につく言い方だ。以前に打ち倒したダーククリム口のことか頭をよぎる。

自覚がないも何も、殆どの地球人が「星の夢」の襲来に関して、全くの無関係。それを  
まとめて考えているあたり、どうしようもない価値観の隔たりを感じた。

一応は生き物の形を取っているのだろうが、その実はただのキカイ。プログラムの  
中で、狂った結論しか導き出せない、壊れたマシンの一部なのだ。



立ち向かうべき相手への悍ましさを痛感し、顔を顰める当麻。

クローンハルトマンは椅子を移動させると、ガラスの向こう側に飾られた「ある物」へと指差す。

そこには、シヨーケースに入りそうな程に小さいカケラが埋め込まれていた。

「コレは、『星の夢』を呼び寄せたキカイのカケラである。」

名は：『樹形図の設計者』と言ったか。掌握する直前に破壊されなければ、器としての利用価値は十分にあつたのである」

上条当麻は頭が悪い。

だがしかし、度を超えたバカでは決してない。情報さえ揃っていれば、理論を組み立てることが出来る。

ゆえに、結論に至るのは早かった。

「おいおい：!?! ワープスターがぶつ壊す直前に『樹形図の設計者』を『星の夢』が乗っ取りかけてたのかよ：!?!」

「マツタク忌々しい：!?! あと数秒さえあれば、スムーズに復活できたものを：!?!」

肯定はなかった。しかし、それが事実だとして、クローンハルトマンは愚痴を吐いた。

もし、ワープスターが『樹形図の設計者』に直撃していなければ、現時点よりも侵攻は劇的に進んだことだろう。

最悪の場合、マルクの計画とブッキングした可能性だつてある。

なんとという奇跡だろうか。

しかし、悲しきかな。そんなことなど知る由もなかった学園都市は、十分にあつた時間と備えができなかつた。

それを責め立てるような真似はしない。気づく方法などなかつたのだから。

この惨状を止める手立てがあつたと今更ながらに気づき、無力感に打ちひしがれる当麻。

そんな彼を慰めるように、カービーが背を撫でた。

「…なんで、『樹形図の設計者』が『星の夢』を呼び込んだんだ？」

「個体名『ザン・パルルテイザーヌ』の解析が『樹形図の設計者』のみでは不可能だつたからである。

『樹形図の設計者』は既に残骸となつたハルトマンワークスカンパニーのネットワークにアクセスし、『星の夢』の碎かれたデータの一部を発見。それを己と統合することで、その修復を図つたのである」

あまりに出来すぎた繋がりに、当麻は軽く眩暈がするのを感じた。

つまるところ、『絶対能力進化計画』のチームがパルルを発見し、『樹形図の設計者』にそのデータを打ち込んだことが、今回の事件のキツカケとなつたらしい。

ロボボアーマーに付け足されたカメラ機能により、ハルバードにもこの会話は伝わっていることだろう。

今頃、目を白黒させて戦慄くパルルを思い浮かべ、当麻は心の中で合掌した。「さて、ムダ話はここまででいいかな、ヤバンジン諸君。

ワシはキミたちと違い、この宇宙に蔓延る生命のハイジヨのため、忙しい身なのである」

彼は言うど、ぱん、と拍手を一つ鳴らす。

すると、駆動音と共に床が開き、キューブで形成されたフィールドが現れた。

四人は慌ててそちらに飛び乗ると、あたりを警戒する。

と。天井からも駆動音が響いていることに気づき、上を見上げた。

「安心したまえ。キミたちのアイテは、しっかりと用意しているのである」

そこにいたのは、見覚えのある少女。

常盤台の制服に、バイザーから垂れる、切り揃えられた茶髪。

羽衣と無骨な機械に四肢を包まれた彼女は、ずんつ、と地面を揺らすと、怪しい光をバイザーに映し、こちらを睨め付けた。

「み、御坂……?」

いつものように、ビリビリと軽口で揶揄することは出来なかった。

肌さえもピリつく威圧感の中、クローンハルトマンは笑みを浮かべ、告げた。

「本製品は先ほど完成した、改造能力者のマスターピース…。」

24時間休むことなく、星を破壊する天体制圧兵器…、プロダクトナンバーG—666『レールガンボーグ』である」

「テメエ…っ、御坂はそんな名前じゃねえし、兵器でもねえ!!能力がちつとばかり強いだけの、ただの中学生なんだぞ!」

当麻が激昂してクローンハルトマンに食ってかかるも、彼は聞かない。

あまりに痛々しい姿となった少女の前に、当麻はロボボアーマーから降りた。

「ぼよっ!」

「トーマ、危ないよ!」

「アイツとの喧嘩なら慣れてる。カービィ。お前は『星の夢』をぶっ壊してくれ」

二人の制止を聞かず、キューブで構成された戦場へと立つ当麻。

彼はクローンハルトマンに指を向け、カービィに告げる。

カービィはそれ以上、引き止めなかった。

こくり、と頷き、去りゆくクローンハルトマンへと向かうカービィたち。

その後ろ姿を見届けることなく、当麻はカービィたちに襲いかかる電撃を右手で払い除け、笑みを浮かべる。

「こっちは任せろ、相棒！」

機械仕掛けの女神を前に、人は拳を握った。

◆?◆?◆?◆?

「トーマを置いてつちやつてよかったのかなあ…?」

「ほよっ」

きつと、彼なら大丈夫だ。

そんなカービイの返事に、不安げに轟音が響く背後を見やるエフィリン。

社長室から出て、オフィスをさらに降下する中で、ともだちのその姿は、すっかり見えなくなってしまうている。

正直に言えば、カービイも当麻のことは心配だ。

しかし、ともだちである彼が「任せろ」と言ったのだ。疑うと言うことを知らないカービイにとっては、それだけで信用に値する。

カービイたちがクローンハルトマンを追いかけっていると、彼は見覚えのある機械を前に立ち止まる。

「どうだ、星のカービイ?じい、つう、にい、スバラシイであろう?」

そこに佇んでいたのは紛れもなく、以前破壊した「星の夢」であった。

## BOSS 1 ドラゴンストライク

星の夢は考えていた。

星のカービィの絶対的なチカラの前に敗れ去った自分が今、こうして蘇ったのは、一体何故なのだろうか、と。

その答えは出ている。しかし、『逃げる暇もなく破壊され尽くした』はずの自分が、こうしてネットワークの海を漂い、幾つもの偶然が重なって復活するまでに至った。宇宙最高峰の科学が集約された頭脳をもってしても、分からないことだらけだ。しかし、コレだけは言える。

——果タセナカタ・アノ「ネガイ」ヲ・再ビ叶エルタメ・ワタシハ・コノ宇宙ニ蘇ツタ・。

◆?◆?◆?◆?

「うおおあつ!?!」

捲れ上がる床に翻弄され、目を剥く当麻。

走る電撃は、普段の比ではない。

バルフレイナイトを前にした時のような、肌さえも焼け焦げる緊迫感。

機械仕掛けの神とでも言うべき存在となった御坂美琴を前に、言葉を紡ぐ余裕もなく、当麻は電撃を右手で払う。

流石に無限の可能性がある訳でもないらしく、打ち消すことは可能である。

しかし、打ち消して尚、強く走る痺れに、目の前に立ちはだかる美琴の強大さがヒシヒシと伝わってくる。

果たして、自分は勝てるのだろうか。

そんな考えが頭をよぎるも、当麻は拳を握ることで振り払う。

「なに弱気になってんだよ、ヒーロー……！」

勝てるかどうかなんて考えてんじゃねえ!! 御坂を助けるんならなあ……! 今ここで勝たなきゃダメなんだよ!!

なあ! そうだろ、上条当麻!!」

当麻は鼓舞するように吼えると、床を蹴って真っ直ぐに美琴へと駆け出す。

しかし、美琴から放たれた雷によって、当たり一面が作り変わる。

オフィスの内装など、最早原型すらない。

当麻は運悪く崩れゆく床に左足を取られ、そこへ雷が飛来する。

しかし、この程度の不運を乗り越えられないほど、上条当麻という男は軟弱ではない。多少、足を捻ってしまうことになるが、無理矢理に雷の方向を向き、右手をかざす。

「ぎっ…!?!」

頭の中で、嫌な音がした。

骨折、とまではいかないが、予想通り、変に捻ってしまったらしい。

踏み込むたびに左足に痛みが走る。だが。この程度の苦痛など、数えきれぬほど乗り越えてきた。

当麻は足に負荷がかかることも厭わず、雷を打ち消しながら駆けていく。

が。美琴もそのまま突っ立っているわけがなく、高速で動き回り、当麻を翻弄した。

「なめんじゃねえぞ!!」

当麻は美琴から放たれる連撃に、這う這うの体ではあるが、なんとか反応してみせる。

相手は機械なのだ。狙うならば確実に、自分が「ここだけは嫌だ」と思う場所に攻撃を叩き込むはず。

そんな当てずっぽうにも程がある予測が、ドンピシャで当たっていた。

しかし、当麻の身体能力では、雷を回避する、などという芸当ができない以上、右手で迎撃するしかない。

幸い、あの機械の中には、銃火器の類は搭載されていないようだ。

いや。強力な電撃に耐えきれない故に、搭載されていないのだろうか。

そんなことを思っていると。



機械が展開し、そこから幾つもの『レールガン』が構築された。

「はあああつ?!?!?」

本気で殺しにきてる。

かす当たりさえ許されない攻撃の雨霰で、あれを避けろと言うのか。

当麻の導き出した答えは至極単純。「そんなもの、避けれるわけがない」。

放たれたレールガンが、当麻の右腕を根元まで抉り取った。

「がああああつ?!?!?」

あまりの激痛に叫びかけるも、攻撃が四方八方を取り囲む状況に口をつぐむ。

痛みを吐き出してる場合ではない。今すぐこの場から離れなければ、死ぬ。

しかし、離れようにも逃げ場などどこにもない。

まさに四面楚歌。

そんな状況下であるにも関わらず、当麻はまだ、諦めてはいなかった。

「……、な、く、そおおおつ!!」

その時だった。

右腕から、幾つもの鱗が並び立つ、異形が飛び出してきたのは。

◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

御坂美琴は、目の前の光景に絶望していた。

自分が作り出した地獄絵図。自分が油断しなければ、回避できたはずの惨劇。

非力な親友を襲う側になってしまった自分の不甲斐なさに、心底腹が立つ。

弾け飛ぶ当麻の右腕を前にして、美琴のココロは、既に砕けそうだった。

「……なにが……。なにがレベル5!!学園都市第三位よ!!」

こんな、こんなことをするために成ったんじや……!こんな、こんな殺し合いなんてしたくないの!!やめて、やめてよ!!

私……、私を、返してよお……」

既にキカイに奪われた体。

ただ殺戮と破壊を振りまくだけの体を前に、ただ嘆願することしかできない美琴。

しかし。絶望に満ちたその光景に、変化が訪れる。

8匹の竜。そうとしか呼べない存在が、まるで蓋から解き放たれたように、美琴へと殺到したのは。

その顎門はあらゆる攻撃を否定し、美琴を苛むキカイを喰らい尽くす。

当麻がコントロールしている訳ではないようで、本人もパチクリと目を丸くしていた。

ばきり、ばきり、と、キカイが残骸となって落ちるたびに、閉じ込められていた美琴の意識が表面化する。

そこにいたヒーローは、左拳で彼女の額を叩いた。

「よっ！暴れてた割には元気そーだな！」

どこまでも能天気で、デリカシーなどかけらもない一言に、ひどく安堵してしまった自分がいた。

◆? ◆? ◆? ◆?

「……ぐふっ……。や、やはり、凄まじいであるな、星のカービィ……」

「ぼよっ」

紫色のゲルト、改良されたプレジデンバーの破片がそこらじゅうに散乱し、床を汚す。そこに立っていたのは、ロボボアーマーに乗った星のカービィ。

襲いかかってきたクローン戦士たちを鎧袖一触に薙ぎ倒し、果てはクローンハルトマンまで下したカービィは、ぐずぐずに崩れゆくハルトマンを真っ直ぐに見つめる。

本来のハルトマンのココロのカケラすらない、ただの模造品もどき。命への最大の冒涇としか言えないその存在は、死への恐怖や苦悶の声など一切上げず。

ただ不気味なほどに、笑っていた。

「ぐふっ……。ワシの目的は、既に果たしている……。タダの捨て駒であったワシに時間をかけすぎたな、星の戦士よ……」

瞬間。オフィス全体が揺れ動き、ずず、と音を立てて天井が開く。

まずい。早く破壊しなければ、星の夢が宇宙に飛び立ってしまふ。

いくら能天気とはいえ、一度倒した強敵のことを忘れるわけがない。カービイは大慌てでロボボアーマーを発進させ、飛び立とうと設置台からパージしていく星の夢へと向かう。

今ここで、倒さなくては。

そんな焦燥感故に、カービイは上への警戒が疎かになっていた。

「ぼよおっ!!」

「か、カービイ!?!」

上から降り注ぐ弾幕がいくつも命中し、カービイはロボボアーマーから弾き飛ばされてしまう。

操縦主のいなくなったロボボアーマーは、それでも星の夢へと駆ける。

が。星の夢はそれに向けて、漆黒の光線を放ち、風穴を開けた。

「ぼよーっ!!」

ようやく再会できたともだちの無惨な姿を前に、カービイが叫ぶ。

その隙にと星の夢は宇宙へと飛び立ち、あつという間に雲海へ姿を消した。

それを満足げに見届けたクローンハルトマンは、高らかに笑いながら、ゲルとなって爆散する。

ロボボアーマーは修復不可能。敵は遙か宇宙。絶体絶命の状況の中、カービィはある秘策を思いついた。

「……ぼよっー！」

カービィは体にチカラを込めると、その両手に無限のチカラのカケラ：「フレレンズハート」を生み出す。

それをロボボアーマーの残骸に投げつけると、ハートがその機体へと溶けていった。しかし、残骸が再生することはない。

一体どうするつもりなのか、とエフィリンが聞こうとするや否や。

カービィはロボボアーマーの残骸に駆け寄り、祈るようにチカラを込めた。

カービィのフレレンズとなった者は、同じフレレンズやカービィがチカラを注ぐことで、チカラ尽きても復活することができる。

あまりのダメージに、無限のチカラを發揮できる状態ではなくなった体を、外から無限のチカラを注ぎ込むことで無理矢理に再生させるのだ。

無論、マキシムマトや元気ドリンクなどを口に突っ込んだ方が早いのだが、ロボボアーマーの場合は話は別。

そもそもの話、これで復活するかどうかも怪しいが、カービィは一縷の可能性に賭けた。

もうお分かりだろう。運命に愛された戦士、星のカービィはその運命を手に入れた。運命がカービィを選んだのかのように、ロボボアーマーの傷が修復していく。

やがて全てが直ると、ロボボアーマーは瞳に光を取り戻し、ゆっくりと立ち上がった。

「ぼよっ！ぼよっ！」

「やった！やったよ、カービィ！」

「…いや、でも……」

ロボボアーマーの復活に一度は沸き立つも、エフィリンは空を見上げ、耳を垂れる。

カービィもまた、届かない敵を見上げ、肩を落とした。

と。その時だった。

『カービィービィー……ッ!!』

ともだちたちの声とともに、巨影が空を覆い隠したのは。

カービィらはそれを見上げると、互いに笑い、頷く。

ロボボアーマーに乗り込み、とん、とん、と屋上へと登る。

彼らを出迎えるのは、雲を引き裂き、宇宙へと向かった星の夢によつて顔を覗かせた晴天。

その青空ごと吸い込むように、ロボボアーマーはその口をがばつ、と開け、巨影を吸い込んだ。

瞬間。ロボボアーマーは光に包まれ、天使のようにその翼を広げる。

光が晴れると、そこには。戦艦ハルバードをコピーしたロボボアーマーが、空に鎮座していた。

学園都市の空に現れた桃色の天使を見上げ、改造能力者を相手取っていた当麻の友人……土御門元春は、苦笑を浮かべた。

「……ははっ。なんだ、そりゃ。」

デタラメなヤツには、デタラメなもだちができるもんなんだにやー」

明日のゴハンとお昼寝のため、ついでにこの星を救うため。

宇宙一能天気なヒーローたちは今、決戦の宇宙へと放たれた。

## BOSS 2 VSスタードリームリターンズ

「すげえ……」

星海へと飛び立った当麻は、操縦席のモニター越しに広がる神秘に息を呑む。

宇宙。文明が遙かに進んだ学園都市でも、選ばれたエリートのみしか辿り着けない、果てしない未知が溢れる、夢の象徴。

本来であれば、天体観察だけで沸き立つほどの興奮を覚えるのであろう。

しかし。たどり着いたそこは、決戦の地。

キカイの翼を広げ、星の夢はそのモノアイでこちらを睨め付ける。

「総員、気を引き締める！この船に乗る全員の手には、宇宙の生命がかかっている!!  
役立たずなど一人もおらぬ!!」

ここにいる我ら全員が、宇宙を救うために立ち上がった『ヒーロー』なのだ!!!  
艦橋に立つメタナイトの啖呵に、乗り込んだ全員の目つきが変わる。

当麻もまた、何が出来るわけではないものの、沈んだ表情の美琴へと目を向けた。

「ミサカはオレさまのかわいい部下の一人だ。泣かせたら承知しないで、トーマ」

「あいよ」



デデデ大王は、ばん、と当麻の再生したばかりの右肩を強く叩き、美琴のことを任せ  
る。

佐天は白井黒子と相討ちとなり、現在は医務室でワドルデイらに介抱されている。避  
難していた人間らは、一方通行が作り上げた簡易式の地下シェルターで、医療班による  
治療等を受けているだろう。

今、この船には、戦う決意をした者しかいなかった。

「……厄介なことになったな」

「それって、どういう…?」

メタナイトの言葉に首を傾げる当麻。その疑問は、すぐに晴れることとなった。

星の夢がハート型の穴を開くと共に、そこから幾つもの紫色のゲルとキカイが顕現す  
る。

鉄巨兵ギガヴォルトやクローン戦士、果ては当麻の右腕を一度は消し飛ばした、『レ  
ルガンボグ』の量産型が立ち並ぶ光景は、まさに地獄絵図。

当麻らがソレに青い顔をするも、カービィは冷静にハンドルを握った。

「ほよーっ!!」

撃て。

カービィがそう叫ぶと共に、二連主砲、果ては追加で取り付けられたレーザー砲門か

ら、弾幕が放たれる。

これでギガヴォルトは轟沈。クローン戦士も、呼び出された二割弱が消し飛ぶ。

ギガヴォルトの残骸を『キャプチャーすいこみ』で、夢のチカラへと変換し、『プラネットバスター』の弾丸として取り込む。

しかし、星の夢もまた、残骸とならない以上、大砲へと変換できないクローン戦士を生み出し、負けじと弾幕を張った。

「なんということだ……これでは『プラネットバスター』が溜まらない……」

「配置が終わりましたって、ミサカはミサカはちよっぴり船員っぽく報告してみる!!」

「っ、ナイスタイミングだ、打ち止め殿！」

カービー！緑のランプが全て光った時に、BボタンとAボタンを同時に押せ!!」

「ロボボの操縦ボタン、この状態でもまんまゲームなんだな……」

当麻が半ば呆れ、そういえば移動するためのレバー以外はヤケにゲーム機のような配置だったな、と想起する。

スージー以外は知らぬことだが。ハルトマンワークスカンパニーの製品は、どれもが『誰でもお手軽に使える』というコンセプトで生み出されている。

ハルトマンがココロを失った後も変わらなかったが、そのコンセプトが功を奏し、星の夢打倒につながったのだ。

夥しい弾幕を避けること数分。

ちんつ、という、レンジのような音と共に、緑色のランプが点る。

ソレを視認するや否や、カービィは即座にボタンを押した。

『プラネットレールガン』、『展開!!』

瞬間。ハルバードの船底が展開し、そこからレールガンの砲身が形成される。

その内部には、一万の御坂妹やプラズマウイスプなどの電撃能力者が搭乗しており、レールガンボグに負けぬほどの威力を誇る一撃を放つために、能力をフル稼働させていた。

砲身部分には、神妙な面持ちのバルルが鎮座する。

バルルは太鼓型の砲台を展開すると、星の夢目掛け、槍を構えた。

『プラネットレールガン』、『発射!!』

バルルが叫ぶとともに、砲身に凄まじい雷撃が迸る。

そこを駆けるように槍が放たれると、その槍は一発の巨弾と化し、衝撃波と熱波でクローン戦士を殲滅した。

それだけでは終わらない。その光は星の夢のボディに着弾し、その装甲をこつそりと削り取った。

『クローンハルトマン部隊・テンカイ・』

星の夢がそんな電子音声を放つと共に、ハート型の穴から幾人ものクローンハルトマンが、インベイドアーマーに乗って現れる。

星の夢が幾重ものハートフル・シエルで身を固めると、その中でハルトマンたちが修復作業を始めた。

「あのポンコツ…っ！どれだけパパを侮辱すれば気が済むのよっ！！」

「まずいな。ジリ貧にも程がある」

スージーが怒りを露わにする隣で、メタナイトが仮面の下に焦燥を滲ませる。

残量が分からないクローン戦士らがこちらへと殺到する中、ハートフル・シエルを削り切ることも叶わない。

打開策が手元のないこの状況に、船員らも不安げな表情を浮かべる。その時だった。

『ツシ、間に合っタヨオ!!』

通信機から、そんな音声 that 響いたのは。

瞬間、ハートフル・シエルが砕け散り、星の夢の無防備な姿が晒される。

クローン戦士らも自壊し、宇宙のチリへと消えていった。

『も、もお、無理ですう…。頭が熱い…』

『……お前…、あんな無茶な式でよくも…、ほんと、お前…!』

『ゴチャゴチャうっせエナ!!文句ならあとでイエ!!』

…オホン。トモカク、コレでヤツの機能を一部ハカイしタヨオ!!

ヤツはもう、多重ハートフル・シエル、クローン戦士は使えナイ!!

アトはやつつけるダケダヨオ!!」

「え?う、初春さん…と、誰と、誰?」

「…今だけは礼を言おうか、マホロア」

美琴がパチクリと目を丸くし、船内に響く友人らの声に首を傾げる。

希望は確かに見えた。

だが、星の夢の回復には間に合わなかったのだろう。星の夢のボディはすっかり元通りとなっている。

その光景を見て、美琴は呟いた。

「なんで、戦おうと思えるのよ…。」

アイツはっ!…学園都市を好き勝手にできるようなバケモノで、狡猾で…、強大で…。勝ち目なんて、あったとしても、すぐに摘まれてしまうような、そんな相手なの…。

それなのに、なんで…?」

「…いいこと教えてやるよ、ビリビリ」

当麻は真つ直ぐにモニターを見て、笑みを浮かべる。

「コイツら全員、とびっきりのお人好しなんだよ」

「ぼよーっ!!」

まるで自分の親友を自慢するかのように告げると共に、カービィの咆哮が轟いた。

星の夢に弾幕が殺到する中、ハート型の穴から、今度は量産型メタナイトボーグやハート型の爆弾などと言った兵器が飛び出す。

砲門に限りがあるため、その全てに対応は出来ないが、その一部を撃ち落とすことで残骸を取り込む。

プラネットバスターが満タンになるまで、あと二割。

そのタイミングで、ぼら撒いた弾幕に被弾したことでダメージの入った星の夢は、ハートの部分をパージさせ、一枚のハートフル・シエルを展開した。

それだけではない。星の夢はガラスのような羽を飛ばし、雨霞と見まごうほどのレーザを放つ。

「おい!回避で精一杯だぞ、メタナイト!」

「慌てるな!!打開策はある!!」

焦燥するデデデ大王の声に、メタナイトが一喝すると。

甲板から白の一閃が放たれ、ハートフル・シエルを破壊してみせた。

『オイ、仮面剣士。コレでいいかア?』

「助かった、一方通行殿。急かすようですまないが、即座に帰還してくれ。危険だ」

『あゝよ』

宇宙に漂う白：ハルトマンワークスカンパニー製試作宇宙服を纏う一方通行が、ハルトバードの甲板へと戻っていく。

ハートフル・シエルを展開していたパーツを取り込んだことにより、コントロールパネルのランプが虹色に煌めく。

カービィはソレを視認すると、勢いよくAと刻まれたボタンを押した。

「ぼよおー……っ!!」

『『プラネットバスター』、発射!!』

カービィが星型弾を吐き出すように、がぱつ、と開いたロボボアーマー：ハルトバードモードの口から、夥しい数の巨大星型弾が星の夢に着弾する。

その一撃が星の夢に深刻なダメージを与えたのか、星の夢は黒煙を巻き上げながら落ちていった。

「っしーやった!!」

「いいえ、まだよーヤツはこれだけでやられるタマじゃないわ!!」

スージーが声を上げると共に、太陽を遮り、ハルトバードを丸い影が覆い隠す。

落ちてゆくはずだった星の夢は持ち直し、その影へとマージすると、丸い影が覚醒したかのように、その目を見開く。

「……………猫？」

インデックスがそう呟くと共に、丸い影の口から咆哮が放たれる。

宇宙が万華鏡のような空間に作り変わると共に、その影の姿は露わになった。

黄金のボディに、いくつも付属した、統一感のないガラクタ。

等しく眠そうな猫のように半分が閉じられた瞳は、無機質にこちらを見つめている。

その姿は、かの機械仕掛けの大彗星：『ギャラクティック・ノヴァ』にそっくりであった。

『3……………2……………1……………GO!!』

瞬間。ハルバードに衝撃が走った。